

MNO series

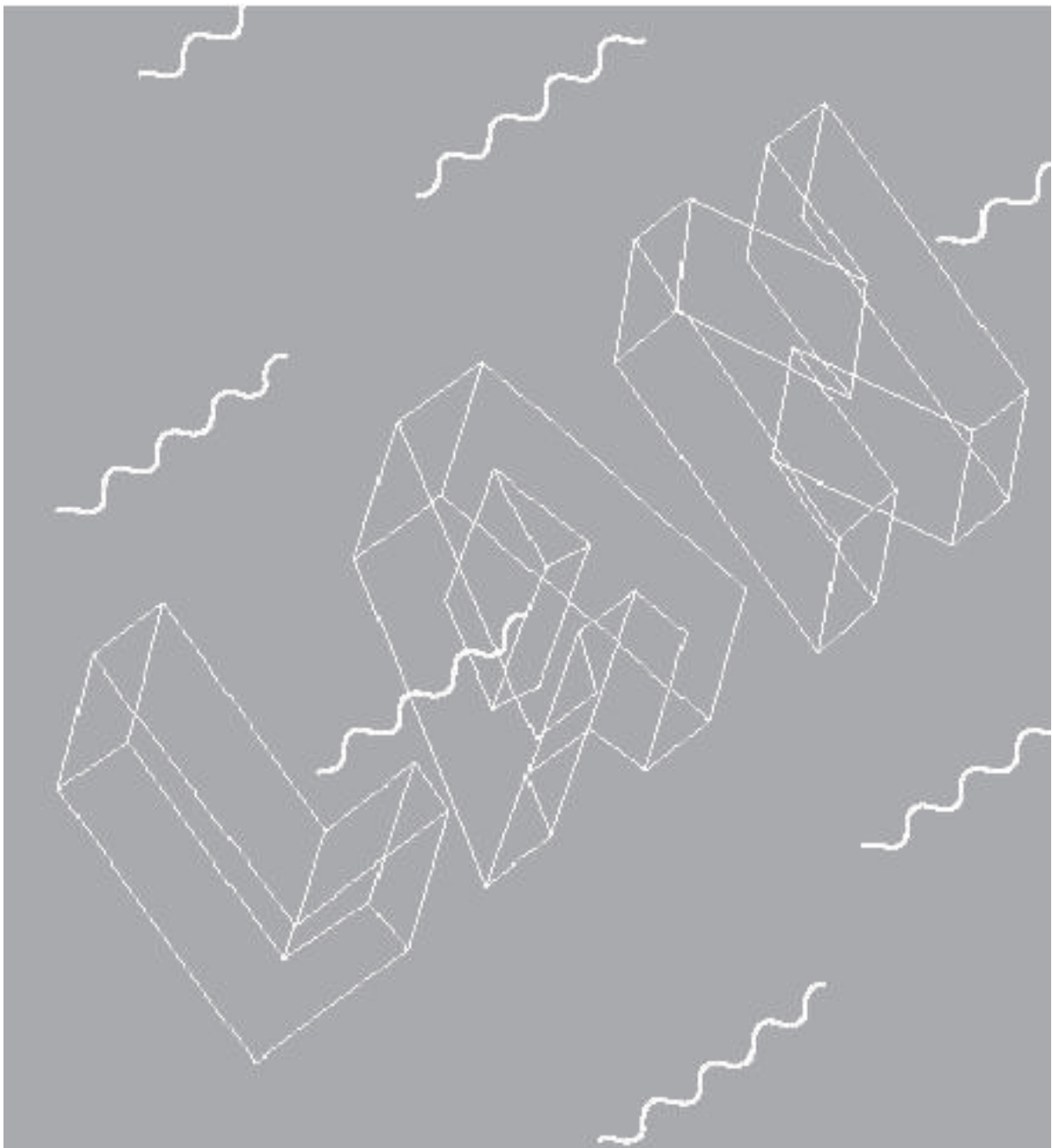
保証書別添付

Switch-M12GL3

品番 MN36120

取扱説明書
(メニュー編)

- お買い上げいただき、まことにありがとうございます。
- この取扱説明書をよくお読みのうえ、正しく安全にお使いください。
- ご使用前に「安全上のご注意」(2ページ)を必ずお読みください。
- この取扱説明書は大切に保管してください。



安全上のご注意



注意

- 交流100V以外では使用しないでください。火災・感電・故障の原因となることがあります。
- 必ずアース線を接続してください。感電や誤動作の原因となることがあります。
- 雷が発生したときはこの装置や接続ケーブルに触れないでください。感電の原因となることがあります。
- この装置を分解・改造しないでください。火災・感電・故障の原因となることがあります。
- 電源コードを傷つけたり、無理に曲げたり、引っ張ったり、ねじったり、たばねたり、はさみ込んだり、重いものをのせたり、加熱したりしないでください。電源コードが破損し、火災・感電の原因となることがあります。
- 濡れた手で電源プラグを抜き差ししないでください。感電の原因となることがあります。
- 開口部から内部に金属や燃えやすいものなどの異物を差し込んだり、落とし込んだりしないでください。火災・感電・故障の原因となることがあります。
- 水のある場所の近く、湿気やほこりの多い場所に設置しないでください。火災・感電・故障の原因となることがあります。
- 直射日光のあたるところや温度の高いところに設置しないでください。内部の温度が上がり、火災の原因となることがあります。
- 振動・衝撃の多い場所や不安定な場所に設置しないでください。落下して、ケガ・故障の原因となることがあります。
- この装置を壁面に取り付ける場合は、本体および接続ケーブルの重みにより落下しないよう確実に取り付け設置してください。ケガ・故障の原因となることがあります。
- ツイストペアポートに10BASE-T/100BASE-TX/1000BASE-T以外の機器を接続しないでください。火災・感電・故障の原因となることがあります。

●ご注意

1. お客様の本取扱説明書に従わない操作に起因する損害およびこの装置の故障・誤動作などの要因によって通信の機会を逸したために生じた損害については、弊社はその責任を負いかねますのでご了承ください。
2. 本書に記載した内容は、予告なしに変更することがあります。

この装置は、情報処理装置等電波障害自主規制協議会（VCCI）の基準に基づくクラスA情報技術装置です。この装置を家庭環境で使用すると電波妨害を引き起こすことがあります。この場合には使用者が適切な対策を講ずるよう要求されることがあります。

使用上のご注意

- 内部の点検・修理は販売店にご依頼ください。
- 商用電源は必ず本装置の近くで、取り扱いやすいところからお取りください。
- この装置の電源を切るときは電源コードをはずしてください。
- この装置を清掃する際は、その前に電源コードをはずしてください。
- 仕様限界をこえると誤動作の原因となりますので、ご注意ください。
- マグネットにフロッピーディスクや磁気カードなどを近づけないでください。
記録内容消失の恐れがあります。
- RJ45コネクタの金属端子やコネクタに接続されたツイストペアケーブルのモジュラプラグの金属端子に触れたり、帯電したものを近づけたりしないでください。静電気により故障の原因となることがあります。
- コネクタに接続されたツイストペアケーブルのモジュラプラグをカーペットなどの帯電するものの上や近辺に放置しないでください。静電気により故障の原因となることがあります。

※本書に記載されています会社名、商品名は、各社の商標または登録商標です。

目次

安全上のご注意	2
使用上のご注意	3
1. はじめに	8
1.1. 製品の特徴.....	8
1.2. 同梱品の確認.....	9
1.3. 同梱品の確認.....	9
1.4. 各部の機能と名称.....	10
2. 設置	11
2.1. 19インチラックへの設置.....	11
3. 接続	12
3.1. ツイストペアポートを使用した接続.....	12
3.2. GBICポートを使用した接続.....	13
3.3. 電源の接続.....	14
3.4. LEDの動作.....	15
3.4.1. 起動時のLEDの動作.....	15
3.4.2. 動作中のLEDの動作.....	15
4. 設定	16
4.1. コンソールポートへの接続.....	16
4.2. ログイン.....	17
4.3. 画面の基本的な操作.....	19
4.4. メインメニュー(Main Menu).....	20
4.5. 基本情報の表示(General Information Menu).....	21
4.6. 基本機能の設定(Basic Switch Configuration).....	23
4.6.1. 管理情報の設定(System Administration Configuration).....	24
4.6.2. IPアドレスに関する設定(System IP Configuration).....	25
4.6.3. SNMPの設定(SNMP Configuration).....	27
4.6.3.a. SNMPマネージャの設定(SNMP Management Configuration).....	28

4.6.3.b.	トラップ送信の設定(SNMP Trap Receiver Configuration).....	30
4.6.3.c.	リンク状態変更時のトラップ送付(Enable/Disable Individual Trap Menu)	32
4.6.4.	各ポートの設定(Port Configuration)	33
4.6.5.	アクセス条件の設定(System Security Configuration)	35
4.6.5.a.	RADIUSの設定(RADIUS Configuration).....	37
4.6.5.b.	Syslog Transmissionの設定(Syslog Transmission Configuration)....	38
4.6.6.	MACアドレステーブルの参照(Forwarding Database)	40
4.6.6.a.	MACアドレスの追加・削除	41
4.6.6.b.	ポート毎のMACアドレステーブルの表示.....	42
4.6.6.c.	全てのMACアドレスの表示	43
4.6.6.d.	VLAN毎のMACアドレステーブルの表示.....	44
4.6.7.	時刻同期機能の設定(SNTP Configuration)	45
4.6.8.	ARP table	47
4.7.	拡張機能の設定(Advanced Switch Configuration)	49
4.7.1.	VLANの設定(VLAN Management)	50
4.7.1.a.	特徴	50
4.7.1.b.	VLAN設定の操作(VLAN Management Menu).....	51
4.7.1.c.	VLANの作成(VLAN Creation Menu).....	53
4.7.1.d.	VLAN設定の変更(VLAN Modification Menu).....	55
4.7.1.e.	ポート毎の設定(VLAN Port Configuration Menu).....	57
4.7.2.	リンクアグリゲーションの設定(Link Aggregation)	59
4.7.2.a.	トランッキングについて	59
4.7.2.b.	設定操作(Link Aggregation Menu).....	61
4.7.2.c.	ポート毎の優先値設定(Set Port Priority).....	63
4.7.2.d.	LACPグループの状態表示(LACP Group Status).....	64
4.7.3.	他ポートのモニタリング(Port Monitoring Configuration)	65
4.7.4.	スパニングツリーの設定(Rapid Spanning Tree Configuration)	67
4.7.4.a.	ポート毎の基本設定(Basic Port Configuration).....	70
4.7.4.b.	ポート毎の拡張設定(Advanced Port Configuration).....	72
4.7.4.c.	構成情報の表示(Designated Topology Information).....	74
4.7.5.	QoSの設定(Quality of Service Configuration)	75
4.7.5.a.	パケットによるQoSの設定(Traffic Class Configuration Menu).....	76
4.7.6.	Access Controlの設定(AccessControl Configuration Menu)	77
4.7.6.a.	クラスの設定(Classifier Configuration Menu)	78
4.7.6.b.	クラスの詳細な設定(Create Classifier Configuration Menu).....	80

4.7.6.c. クラスの簡易情報の参照(Classifier Configuration Menu).....	82
4.7.6.d. クラスの詳細な情報の参照(Show Deleted Entries Information Menu).	83
4.7.6.e. クラスグループの設定(Classifier Group Configuration Menu).....	84
4.7.6.f. In-Profileの設定(In-Profile Action Configuration Menu).....	86
4.7.6.g. In-Profileの作成(Create In-Profile Action Menu).....	88
4.7.6.h. No-Matchの設定(No-Match Action Configuration Menu).....	90
4.7.6.i. No-Match Action Configuration Menuの作成 (No-Match Action Configuration Menu)	92
4.7.6.j. Out-Profileの設定(Out-Profile Action Configuration Menu).....	94
4.7.6.k. Out-Profile Action Configuration Menuの作成 (Out-Profile Action Configuration Menu)	96
4.7.6.l. ポートリストの設定(Port List Configuration Menu).....	98
4.7.6.m. Policyの設定(Policy Configuration Menu).....	100
4.7.6.n. Policyの作成の設定(Create Policy Configuration Menu).....	102
4.7.7. 帯域幅の制御設定(Egress Rate Limiting Configuration Menu)	104
4.7.8. ストームコントロール設定(Storm Control Configuration Menu)	106
4.7.9. 802.1x認証機能の設定(802.1x Access Control Configuration)	108
4.7.9.a. 802.1xポートベース認証機能の設定 (802.1x Access Control Configuration)	109
4.7.9.b. 802.1xMACベース認証機能の設定 (802.1x MAC Base Access Control Configuration)	112
4.7.9.c. Force Authorized MAC Addressの設定 (Force Authorized MAC Configuration Menu)	115
4.7.9.d. Guest/Default VLANの設定(Guest/Default VLAN Configuration Menu)	117
4.7.9.e. 802.1x統計情報の表示	119
4.7.10. IGMP Snoopingの設定 (IGMP Snooping Configuration)	123
4.7.10.a. VLAN Filterの設定	125
4.7.10.b. Show Router Port Tableの設定.....	126
4.8. レイヤー3スイッチングの設定と参照 (Routing configuration and reference Menu)	127
4.8.1. RIPの設定(RIP Configuration)	128
4.8.1.a. RIPのインタフェースの設定(Configure RIP Interface Attribution Menu)	130
4.8.2. OSPFの設定(OSPF Configuration)	133
4.8.2.a. エリアの設定(Configure Area Menu).....	136
4.8.2.b. スタブエリアの設定(Configure Stub Area Menu).....	138

4. 8. 2. c. 近接関係にあるルータの優先性の設定 (Neighbor Priority Configuration Menu)	140
4. 8. 2. d. 仮想インタフェースの設定 (Virtual Interface Configuration Menu) .	142
4. 8. 2. e. エリア境界ルータの参照 (Show Border Router Menu).....	144
4. 8. 2. f. OSPFのインタフェースの設定 (Configure OSPF Interface Attribution Menu)	145
4. 8. 2. g. LSAの参照 (Show LSA Database Menu).....	148
4. 8. 2. h. 外部LSAの参照 (Show External LSA Database Menu).....	149
4. 8. 2. i. 集約アドレスの参照 (Show Summary Address Menu).....	150
4. 8. 2. j. エリアの設定の参照 (Show Statistics).....	151
4. 8. 3. ルーティングテーブル情報 (Routing Table Information Menu)	152
4. 8. 3. a. スタティックルーティングの設定 (Static route Entry).....	153
4. 8. 3. b. プロトコルの優先性の設定 (Configure Protocol Preference Menu) ...	154
4. 8. 4. VRRPの設定 (VRRP Configuration Menu)	155
4. 8. 4. a. VRRPの作成 (Create VRRP Menu).....	157
4. 8. 4. b. VRRP設定情報参照 (Show Detailed VRRP Entry Information Menu)....	159
4. 8. 5. DHCPリレー機能の設定 (DHCP Relay)	160
4. 8. 5. a. DHCPサーバの設定 (DHCP Server IP Address Configuration Menu)....	161
4. 9. 統計情報の表示 (Statistics)	162
4. 10. 付加機能の設定 (Switch Tools Configuration)	166
4. 10. 1. ソフトウェアのアップグレード (TFTP Software Upgrade)	167
4. 10. 2. 設定情報の保存・読込 (Configuration File Upload/Download)	169
4. 10. 3. 再起動 (System Reboot)	170
4. 10. 4. 例外処理 (Exception Handler)	171
4. 10. 5. Pingの実行 (Ping Execution)	172
4. 10. 6. システムログ (System Log)	174
4. 11. 設定情報の保存 (Save Configuration to Flash)	176
4. 12. ログアウト.....	177
付録A. 仕様	178
付録B. Windowsハイパーターミナルによる コンソールポート設定手順.....	180
故障かな?と思われたら.....	181
アフターサービスについて.....	182

1. はじめに

Switch-M12GL3は、12組の選択使用可能な10BASE-T/100BASE-TX/1000BASE-T自動認識のツイストペアポートとGBIC拡張スロットを持つ、IPプロトコルに対応したレイヤー3ギガビットイーサネットスイッチングハブです。GBIC拡張スロットには別売オプションのGBIC 1000BASE-SX/1000BASE-LX/LX40モジュールを搭載可能です。

1.1. 製品の特徴

- IEEE802.3 10BASE-T、IEEE802.3u 100BASE-TX、IEEE802.3ab 1000BASE-Tに準拠した、データ伝送速度10/100/1000 Mb/sを実現したIPプロトコル対応のギガビット対応レイヤー3スイッチングハブです。
- オプションのGBICモジュールを追加することにより、1000BASE-SX・1000BASE-LXが使用可能です。（ツイストペアポートとの排他利用となります。）
- 標準MIB (MIB II, Bridge MIB, RMON 4グループ)をサポートし、SNMPマネージャからHUBの管理が行えます。
- Telnetにより遠隔からHUBの設定変更・設定確認が簡単にできます。
- オートネゴシエーション機能に対応し、10BASE-T、100BASE-TX、1000BASE-Tの混在環境に容易に対応できます。また、設定により速度・通信モードの固定が可能です。
- LEDにより機器の状態が確認できます。
- ツイストペアポート全てが、自動的にMDI/MDI-Xの判別を行ないますので、ハブやスイッチを接続する際、ストレートケーブルで接続できます。
- スパニングツリープロトコルをサポートし冗長性のあるシステム構築が可能です。
- IEEE802.1Qのタグging VLANをサポートしており、最大256グループの設定が可能です。
- IEEE802.1p準拠のQoS機能をサポートしています。
- IEEE802.3ad準拠のトランッキング機能をもち、最大8ポートまでの構成が可能です。
- 通信確認のためのPingコマンドを実行することができます。
- IEEE802.1x準拠のポートベース認証機能(EAP-MD5/TLS/PEAP認証方式)が利用可能です。

1.2. 同梱品の確認

開封時に必ず内容物をご確認ください。不足があった場合は、販売店にご連絡ください。

- Switch-M12GL3本体 1個
- 取扱説明書 1冊
- CD-ROM（本取扱説明書を含む） 1枚
- 取付金具 2個
- ビス（大） 4本
- ビス（小） 8本
- ゴム足 4個
- 電源コード 1本

1.3. 別売オプション

- MN72002
Dsub9ピン-Dsub9ピンコンソールケーブル

- MN54011
1000BASE-SX GBICモジュール

- MN54013
1000BASE-LX GBICモジュール

- MN54015
LX40 GBICモジュール

1.4. 各部の機能と名称

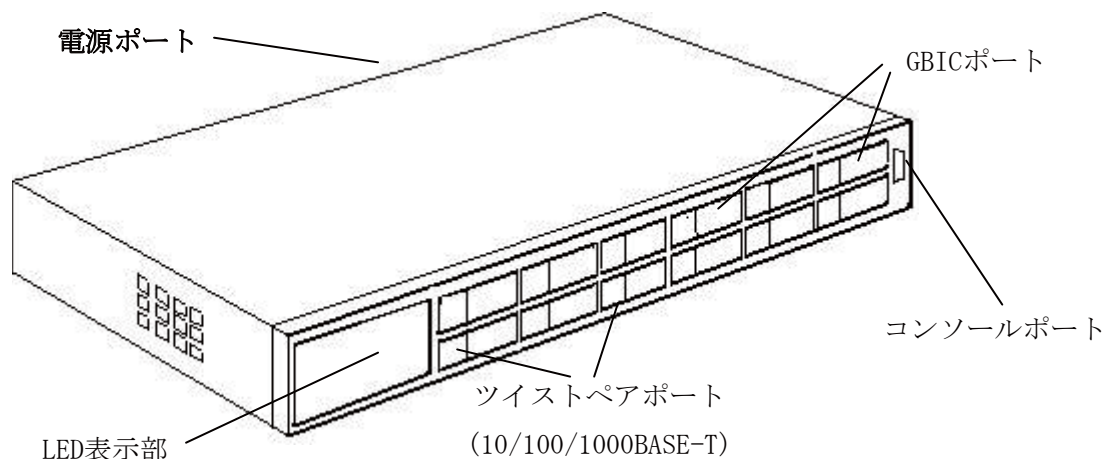


図 1-1 Switch-M12GL3

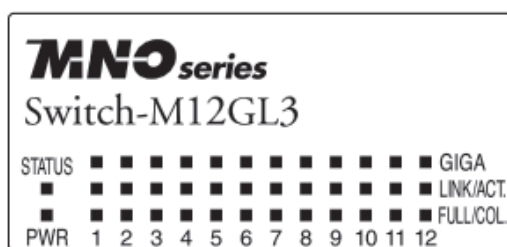


図 1-2 前面LED拡大図

●電源LED (PWR)

緑点灯 : 電源ON

●自己診断LED (STATUS)

緑点灯 : システム正常稼動

橙点灯 : 起動中

橙点滅 : システム障害

●ポートLED

1～12ポート 速度モード (GIGA)

青点灯 : 1Gbpsでリンクが確立
 青点滅 : 1Gbpsでパケット送受信
 消灯 : 10、100Mbpsで端末と接続
 または端末未接続

1～12ポート リンクモード (LINK/ACT.)

緑点灯 : 100Mbpsでリンクが確立
 橙点灯 : 10Mbpsでリンクが確立
 緑点滅 : 100Mbpsでパケット送受信
 橙点滅 : 10Mbpsでパケット送受信
 消灯 : 1Gbpsで接続、または端末未接続

1～12ポート 全二重モード (FULL/COL.)

緑点灯 : 全二重で動作
 橙点灯 : 半二重で動作
 橙点滅 : コリジョン発生中
 消灯 : 端末未接続

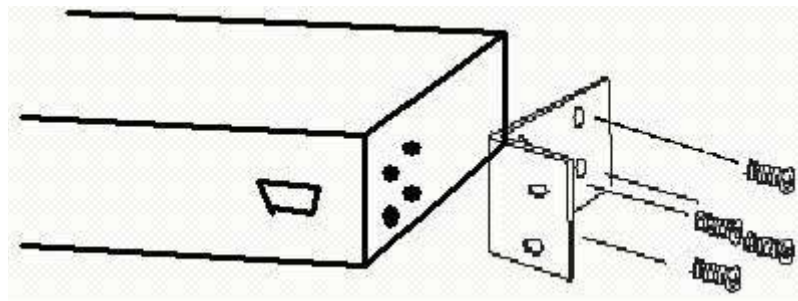
2. 設置

本装置は、19インチラックに手軽に設置できます。

2.1. 19インチラックへの設置

付属品の取り付け金具とビス（小）を取り出し、本機の横にある4つの穴にビスで本機と取付金具を接続してください。

その後、付属品のビス（大）もしくはラックに用意されているビスで、しっかりと本機をラックに設置してください。



3. 接続

3.1. ツイストペアポートを使用した接続

●接続ケーブル

接続には、8極8心のRJ45モジュラプラグ付き、CAT5E準拠のストレートケーブル（ツイストペアケーブル）をご使用ください。

●ネットワーク構成

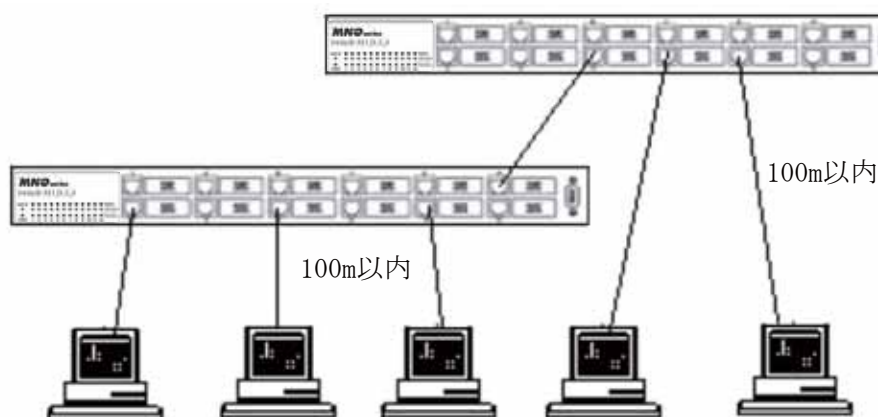


図3-1 接続構成例

各端末と本機器との間のケーブル長が100m以内に収まるように設置してください。

オートネゴシエーション機能をもった端末またはLAN機器を接続すると、各ポートは自動的に最適なモードに設定されます。

オートネゴシエーション機能を持たない機器または端末を接続すると、本装置は通信速度を自動的に判断し、設定しますが、全/半二重は判断できないため、半二重に設定されます。オートネゴシエーション機能をもたない機器または端末を接続する際は、ポートの通信条件を固定するよう設定してください。設定方法の詳細については4.6.4章をご参照ください

ご注意：通信条件を固定に設定した場合は、Auto-MDI/MDI-X機能は動作しませんので、スイッチ間の接続はクロスケーブルを使用する必要があります。

3.2. GBICポートを使用した接続

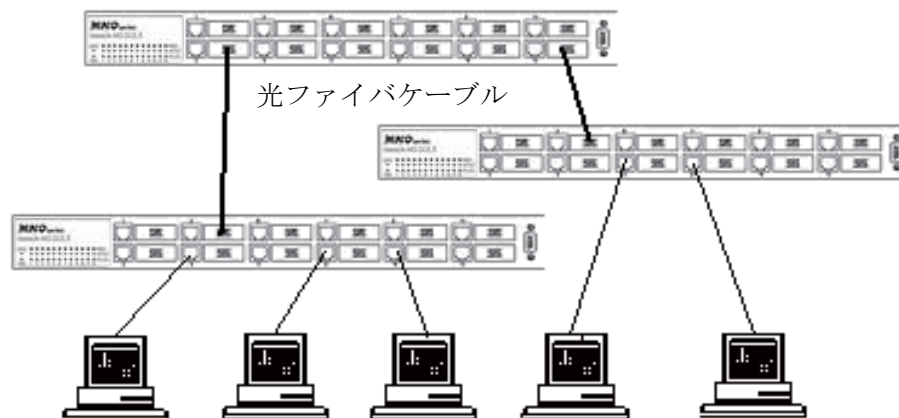


図3-2 光ファイバケーブル接続例

GBIC拡張ポートにオプションのGBICモジュールを図3-3のように差し込むことにより、光ファイバでの接続が可能です。

それぞれ、TXポートは相手側機器のRXポートへ、RXポートは相手側機器のTXポートへ接続してください。

弊社ではオプションとして下記のGBICモジュールをお取り扱いしております。

1000BASE-SX GBICモジュール (品番: MN54011)

1000BASE-LX GBICモジュール (品番: MN54013)

LX40 GBICモジュール (品番: MN54015)

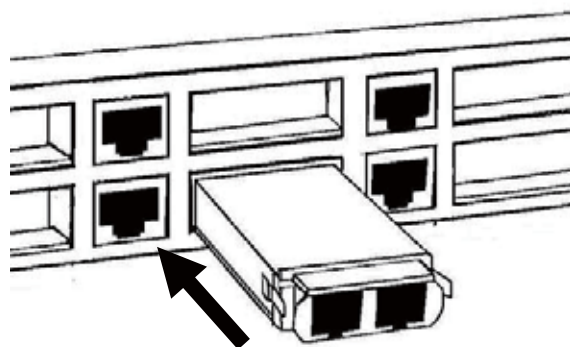


図3-3 GBICモジュール取付

3.3. 電源の接続

本装置は、添付の電源コードを本体の電源ポートに接続し、電源コンセントに接続します。本装置は、100V（50/60Hz）で動作します。本装置には、電源スイッチがありません。電源コードを接続すると、電源が投入され、動作を開始します。電源を切る際には電源コードをコンセントから抜いてください。

3.4. LEDの動作

3.4.1. 起動時のLEDの動作

本装置に電源を入れると、STATUSを除く全てのLEDが一斉に点灯します。その後、ハードウェアの自己診断を実行し、完了すると電源LEDが緑、ステータスLEDが橙に点灯の後、ステータスLEDが緑に変わり、起動が完了してスイッチングハブとして動作します。

3.4.2. 動作中のLEDの動作

本機器には下記3つのポート毎に配置されているLEDにより動作中の各ポートの状態を確認することが可能です。

名称	本体表示
速度モードLED	GIGA.
リンク/送受信LED	LINK/ACT.
全二重/コリジョンLED	FULL/COL.

各LEDの表示内容は下記のとおりです

LED	動作	内容
速度モードLED	青点灯	1Gbpsでリンクが確立
	青点滅	1Gbpsでパケット送受信中
	消灯	10、100Mbpsで接続、または端末未接続
リンク/送受信LED	緑点灯	100Mbpsでリンクが確立
	橙点灯	10Mbpsでリンクが確立
	緑点滅	100Mbpsでパケット送受信中
	橙点滅	10Mbpsでパケット送受信中
	消灯	1Gbpsで接続、または端末未接続
全二重/コリジョンLED	緑点灯	全二重で動作
	橙点灯	半二重で動作
	橙点滅	コリジョン発生中（半二重のみ）
	消灯	端末未接続

4. 設定

本装置は電源を入れただけで通常のスイッチングハブとして動作しますが、SNMP管理機能や特有の機能を使用するには、コンソールポート、Telnetのいずれかを使って設定をする必要があります。

ここでは、本装置の設定内容について説明します。

ご注意: TelnetによるアクセスはIPアドレスが設定されていないとできません。必ずはじめにコンソールポートから少なくともIPアドレスの設定を行ってからアクセスしてください。IPアドレスの設定は4.6.2章を参照してください。

4.1. コンソールポートへの接続

DEC社製VT100互換の非同期端末、またはWindowsのハイパーターミナルのようなVT100互換端末エミュレーションソフトウェアが動作する端末を本装置のコンソールポートに接続します。

本装置側がD-sub9ピンメスのRS-232C準拠クロスケーブルの仕様になっております。

非同期端末の通信条件は、次のように設定します。

- 通信方式: RS-232C (ITU-TS V.24 準拠)
- エミュレーションモード: VT100
- 通信速度: 9600bps
- データ長: 8ビット
- ストップビット: 1ビット
- パリティ制御: なし
- フロー制御: なし

Windowsをお使いの場合は「付録B Windows ハイパーターミナルによるコンソールポート接続手順」をご覧ください。

4.2. ログイン

接続後、次のようなログイン画面が表示されます。次の画面が表示されない時は、通信条件等の設定に間違いがないかどうかをよく確認してください。コンソールからログインすると図4-2-1のような画面が表示されます。

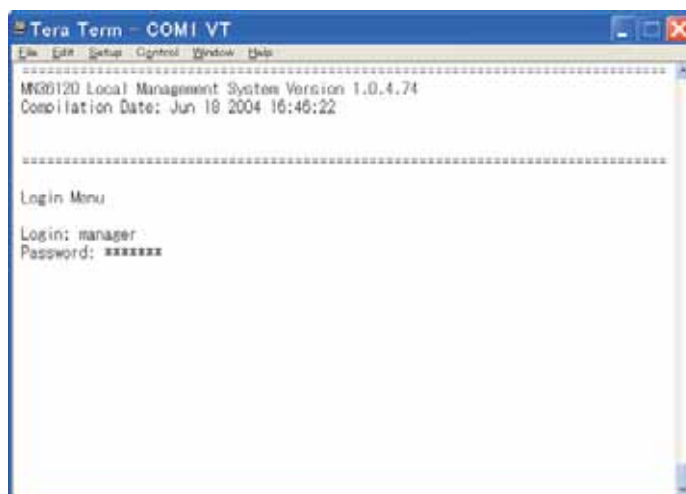


図4-2-1 ログイン画面 (コンソール)

Telnetでログインすると図4-2-2のように「Remote Management System」と画面上部に表示されます。

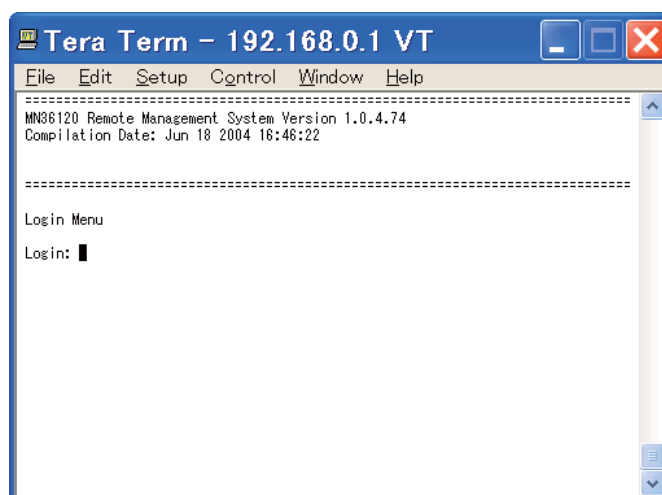


図4-2-2 ログイン画面 (Telnet)

接続すると図4-2-1、図4-2-2のような画面が表示されますので、まずログイン名を入力してください。出荷時の設定は「manager」となっていますので、「manager」と入力し、リターンキーを押します。すると図4-2-3のようにパスワードを聞いてきます。出荷時に設定され

ているパスワードもログイン名と同じ「manager」となっていますので正しく入力し、リターンキーを押してください。

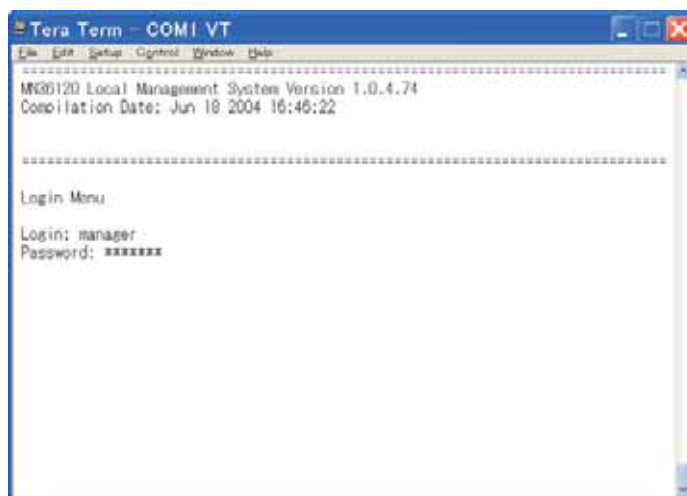


図4-2-3 パスワード入力

ログイン名およびパスワードは変更することができます。変更方法の詳細は4.6.6章をご参照ください。

ご注意: Telnetでは、最大4ユーザーまで同時にアクセス可能です。

4.3. 画面の基本的な操作

本装置の各画面は、次のような構成になっています。

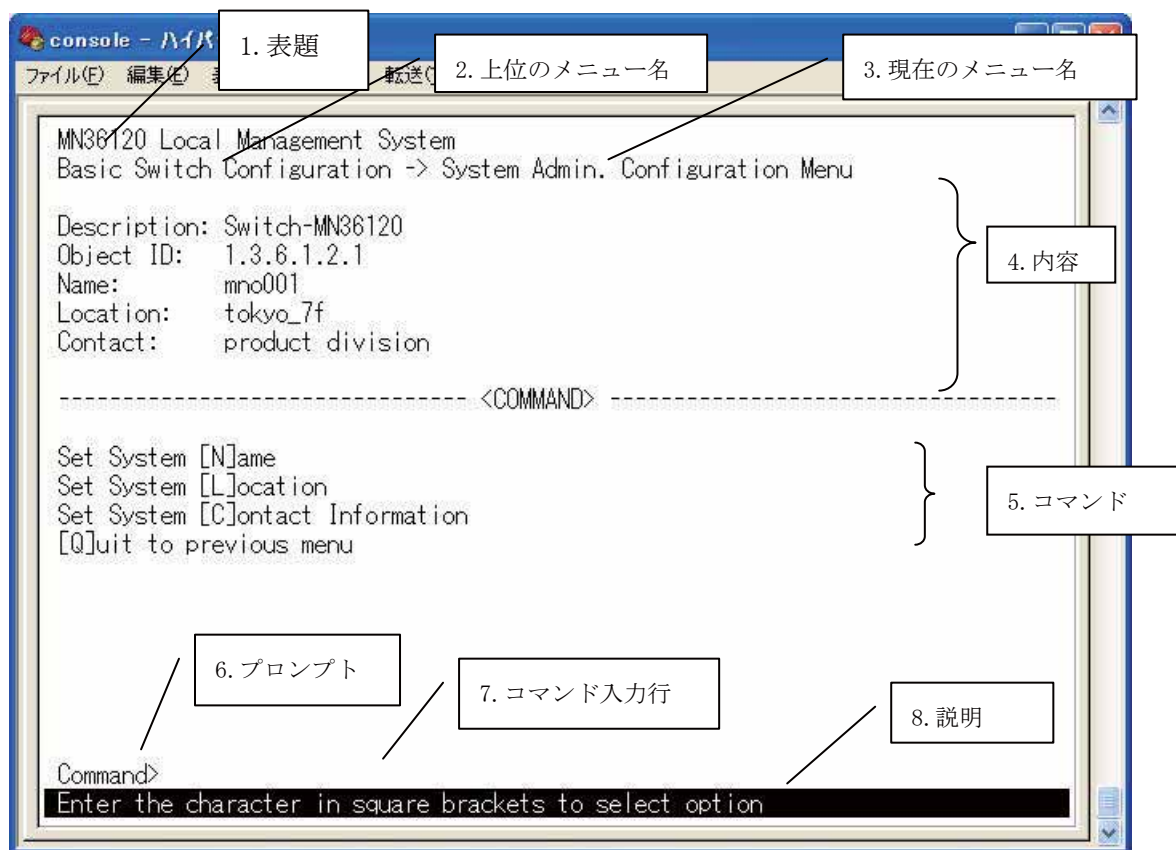


図4-3-1 画面構成

画面の説明

1.	表題	この画面の表題です。コンソールからアクセスしている場合は「Local Management System」、Telnetでアクセスしている場合は「Remote Management System」と表示されます。
2.	上位のメニュー名	ひとつ上位のメニューを表示します。後述のコマンド「Q」(上位のメニューに戻る)を使用すると、この欄に表示されているメニュー画面になります。
3.	現在のメニュー名	現在の画面のメニュー名を表します。
4.	内容	現在の画面での設定されている内容を表示します。
5.	コマンド	現在の画面で使用可能なコマンドを表示します。使用可能なコマンドは画面ごとに異なります。操作をするときはこの欄を参照してください。
6.	プロンプト	コマンド入力を行うと表示が切り替わり、次に入力を行う指示が表示されます。この欄の表示に従って入力してください。
7.	コマンド入力行	コマンドまたは設定内容を入力します。
8.	説明	現在の画面の説明および状況と入力の際のエラーが表示されます。

本装置では画面の操作はすべて文字を入力することによって行ないます。カーソル等での画面操作は行ないません。各画面で有効な文字は異なり、画面ごとにコマンド部分に表示されます。コマンド部分で[]で囲まれた文字がコマンドを表します。有効でないコマンドまたは設定を入力した場合は、説明欄にエラーメッセージが表示されます。

4.4. メインメニュー(Main Menu)

ログインが完了すると、図4-4-1のようなメインメニューが表示されます。

本装置のメニューはメインメニューとサブメニューから成り、メインメニューを中心としたツリー構造になっています。サブメニューに移動するには、コマンド文字を入力してください、戻る場合は、コマンド「Q」を入力すると上位のメニューに戻ります。現在どのメニューを表示しているかは、画面の2行目に表示されていますので、これをご確認ください。

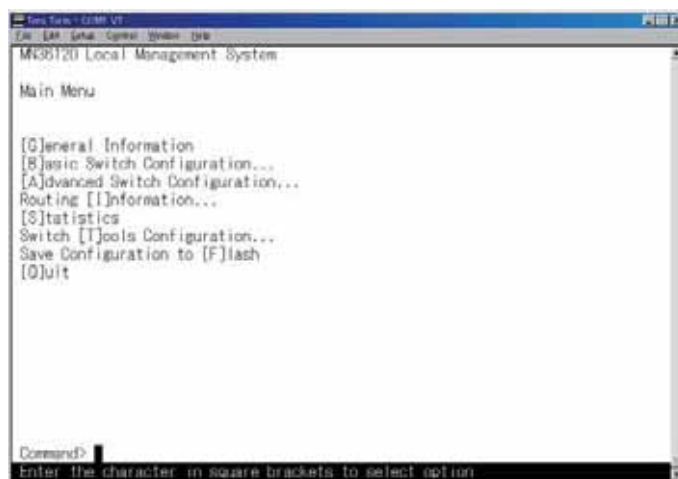


図4-4-1 メインメニュー

画面の説明

General information	本装置のハードウェアおよびソフトウェアの情報とアドレス設定の内容を表示します。
Basic Switch Configuration...	本装置の基本機能(IPアドレス、SNMP、ポート設定など)の設定を行います。
Advanced Switch Configuration...	本装置の特殊機能(VLAN、トランキング、スパンニングツリー、QoS、802.1x認証機能など)の設定を行います。
Routing Information...	レイヤー3スイッチング機能の設定を行います。
Statistics	本装置の統計情報を表示します。
Switch Tools Configuration...	本装置の付加機能(ソフトウェアアップグレード、設定の保存・読込、Ping、システムログなど)の設定を行います。
Save Configuration to Flash	本装置で設定した内容を内蔵メモリに書き込みます。
Quit	メインメニューを終了し、ログイン画面に戻ります。

4.5. 基本情報の表示(General Information Menu)

「Main Menu」で「G」を選択すると図4-5-1のような「General Information Menu」になります。この画面を選択すると、本機器の情報を見ることができます。この画面は表示のみで設定する項目はありません。



図4-5-1 スイッチの基本情報の表示

画面の説明

System up for:	本機器が起動してからの通算の時間を表示します。	
Boot Code Version/Date:	本装置のソフトウェアのバージョンと作成日を表示します。ダウンロードの日付とは異なります。(4.9.1項に記載されているソフトウェアのバージョンアップは、Runtime code のバージョンアップになります。)	
Runtime Code Version/Date:		
Hardware Information	ハードウェアの情報を表示します。	
	Version:	ハードウェアのバージョンを表示します。
	DRAM Size:	実装されているDRAMの容量を表示します。
	Fixed Baud Rate:	コンソールのボーレートを表示します。
Administration Information	Flash Size:	
	実装されているFlash memory の容量を表示します。	
	ここで表示される項目は4.6.1章の「System administration Configuration」で設定を行います。	
	Switch Name:	設定した本機器の名前を表示します。出荷時には何も設定されていません。設定については4.6.1章を参照してください。
Switch Location:	設定した本機器の設置場所を表示します。出荷時には何も設定されていません。設定については4.6.1章を参照してください。	
Switch Contact:	設定した連絡先を表示します。出荷時には何も設定されていません。設定については4.6.1章を参照してください。	
System MAC Address, IP Address, Subnet Mask and Gateway	ここで表示される項目は4.6.2章の「System IP Configuration」で設定を行います。	
	MAC address:	本機器のMACアドレスが表示されます。これは、個々の装置に固有の値で、変更することはできません。
	IP Address:	本機器に設定されているIPアドレスを表示します。出荷時には何も設定されていませんので0.0.0.0と表示されます。設定については4.6.2章を参照してください。
	Subnet Mask:	本機器に設定されているサブネットマスクを表示します。出荷時には何も設定されていませんので0.0.0.0と表示されます。設定については4.6.2章を参照してください。
	Default Gateway:	デフォルトゲートウェイとなるルータのIPアドレスを表示します。出荷時には何も設定されていませんので0.0.0.0と表示されます。設定については4.6.2章を参照してください。

4.6. 基本機能の設定(Basic Switch Configuration)

Main Menu]から「B」を選択すると図4-6-1のような「Basic Switch Configuration Menu」の画面になります。この画面ではIPアドレス、SNMP、ポートの設定、スパニングツリー、アクセス制限等の設定を行います。



図4-6-1 スイッチの基本機能設定メニュー

画面の説明

System Administration Configuration	スイッチの名前、場所、連絡先の管理情報をメモできます。
System IP Configuration	IPアドレスに関するネットワーク情報の設定を行ないます。
SNMP Configuration	SNMPに関する設定を行ないます。
Port Configuration	各ポートの設定を行ないます。
System Security Configuration	本装置へのアクセス条件等の設定を行ないます。
Forwarding Database	MACアドレステーブルを表示します。
SNTP Configuration	NTPを利用した時刻同期機能の設定を行ないます。
Quit to previous menu	メインメニューに戻ります。

4.6.1. 管理情報の設定(System Administration Configuration)

「Basic Switch Configuration Menu」でコマンド「A」を選択すると、図4-6-2のような「System Administration Configuration Menu」の画面になります。この画面では、機器名称等の管理情報を設定します。



図4-6-2 管理情報の設定

画面の説明

Description:	システムの説明です。変更できません
Object ID:	MIBの対応するIDを表示します。変更できません。
Name:	システム名を表示します。出荷時には何も設定されていません。
Location:	設置場所を表示します。出荷時には何も設定されていません。
Contact:	連絡先を表示します。出荷時には何も設定されていません。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	システム名の設定・変更を行います。
	「N」と入力するとプロンプトが「Enter system name>」となりますので、スイッチを区別するための名前を半角50文字以内で入力してください。
L	設置場所情報の設定・変更を行います。
	「L」と入力するとプロンプトが「Enter system location>」となりますので、スイッチの設置場所を区別するための名前を半角50文字以内で入力してください。
C	連絡先情報の設定・変更を行います。
	「C」と入力するとプロンプトが「Enter system contact>」となりますので、連絡先や問い合わせ先等の情報を半角50文字以内で入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.6.2. IPアドレスに関する設定(System IP Configuration)

「Basic Switch Configuration Menu」でコマンド「I」を選択すると、図4-6-3のような「System IP Configuration Menu」の画面になります。この画面では、本機器のIPアドレスに関する設定を行います。

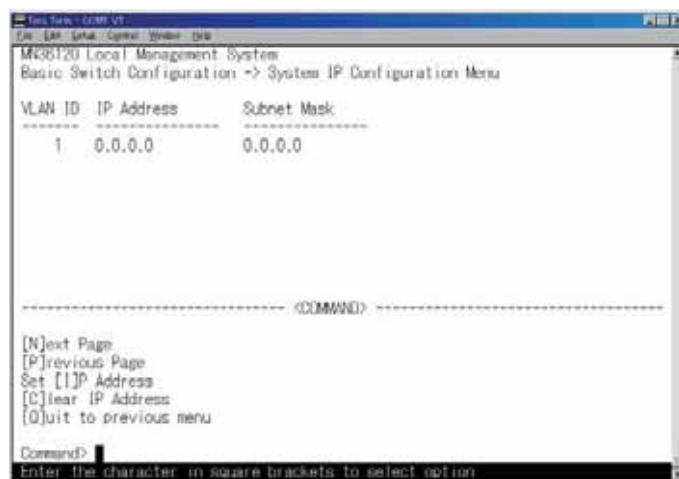


図4-6-3 IPアドレスの設定

画面の説明

VLAN ID	VLAN IDを表示します。出荷時はデフォルトVLAN (VLAN ID=1) のみ設定されています。
IP Address	現在設定されているVLANのIPアドレスを表示します。出荷時には何も設定されていないので0.0.0.0と表示されます。
Subnet Mask	現在設定されているVLANのサブネットマスクを表示します。出荷時には何も設定されていないので0.0.0.0と表示されます。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページに移動します。
	「N」と入力すると画面が次のページに移動します。
P	前のページに移動します。
	「P」と入力すると画面が前のページに移動します。
I	IPアドレスの設定・変更を行います。
	「I」と入力するとプロンプトが「Enter VLAN ID>」となりますので、IPアドレス設定するVLANのIDを入力してください。その後、プロンプトが「Enter IP address>」、「Enter subnet mask>」、「Enter IP broadcast>」となりますので、それぞれ入力してください。デフォルトVLAN以外へのIPアドレスの設定には 4.7.1 項におけるVLANの作成がなされている必要があります。
C	設定されたIPアドレスを削除します。
	「C」と入力するとプロンプトが「Enter VLAN ID>」となりますので、IPアドレスを削除するVLAN IDを入力してください。但し、デフォルトVLANのIPアドレスは削除できません。
Q	上位のメニューに戻ります。

ご注意: この項目を設定しないと、SNMP管理機能とTelnetによるリモート接続は使用できません。必ず設定してください。どのように設定したら良いか分からない場合は、ネットワーク管理者にご相談ください。ネットワーク上の他の装置のIPアドレスと重複してはいけません。また、この項目には、本装置を利用するサブネット上の他の装置と同じサブネットマスクとデフォルトゲートウェイを設定してください。IPアドレスと組み合わせて、ネットワーク上の固有の装置の識別に使用されます。

4.6.3. SNMPの設定(SNMP Configuration)

「Basic Switch Configuration Menu」でコマンド「N」を選択すると、**図4-6-4**のような「SNMP Configuration Menu」の画面になります。この画面では、SNMPエージェントとしての設定を行います。

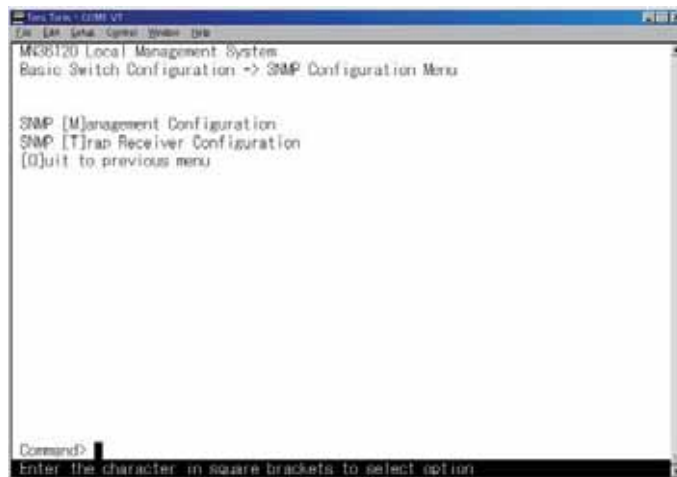


図4-6-4 SNMPの設定

画面の説明

SNMP Management Configuration	SNMPマネージャに関する設定を行います。
SNMP Trap Receiver Configuration	SNMPトラップ送信に関する設定を行います。
Quit to previous menu	上位のメニューに戻ります。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

M	SNMPマネージャの設定を行います。 「M」と入力するとSNMP Management Configuration Menuに移動します。
T	トラップ送信の設定を行います。 「T」と入力するとSNMP Trap Receiver Configuration Menuに移動します。
Q	SNMP Configuration Menuを終了し、上位のメニューに戻ります。

4.6.3.a. SNMPマネージャの設定(SNMP Management Configuration)

「SNMP Configuration Menu」でコマンド「M」を選択すると、図4-6-5のような「SNMP Management Configuration Menu」の画面になります。この画面では、SNMPマネージャの設定を行います。

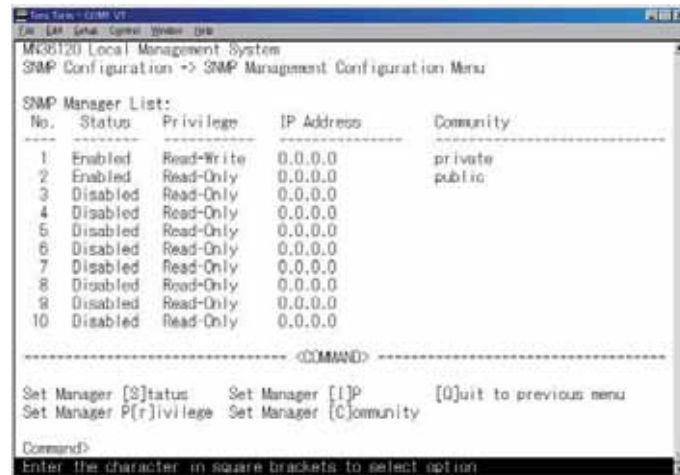


図4-6-5 SNMPマネージャの設定

画面の説明

SNMP Manager List:	現在設定されているSNMPマネージャの設定を表示します。		
	No.	SNMPマネージャのエントリ番号です。	
	Status	SNMPマネージャの状態を表示します	
		Enabled	SNMPマネージャが有効であることを表します。
		Disabled	SNMPマネージャは無効であることを表します。
	Privilege	SNMPマネージャのアクセス権限を表示します。	
		Read-Write	読み書きともに可能です。
		Read-Only	読み取りのみ可能です。
	IP Address	トラップ送信先のIPアドレスを表示します。	
	Community	トラップ送信する場合の、現在設定されているコミュニティ名を表示します。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	SNMPマネージャの状態を設定します。 「S」と入力すると、プロンプトが「Enter manager entry number>」に替わりますので、設定を行うSNMPマネージャのエントリ番号を入力してください。その後、プロンプトが「Enable or Disable SNMP manager (E/D)>」に替わりますので、SNMPマネージャを有効にする場合は「E」、無効にする場合は「D」を入力してください。
I	SNMPマネージャのIPアドレスを設定します。 「I」と入力すると、プロンプトが「Enter manager entry number>」に替わりますので、設定を行うSNMPマネージャのエントリ番号を入力してください。その後、プロンプトが「Enter IP Address for manager>」に替わりますので、IPアドレスを入力してください。
R	SNMPマネージャのアクセス権限を設定します。 「R」と入力すると、プロンプトが「Enter manager entry number>」に替わりますので、設定を行うSNMPマネージャのエントリ番号を入力してください。その後、プロンプトが「Enter the selection>」に替わりますので、読込専用 (Read-only) の場合は「1」を、読み書き可能 (Read-write) の場合は「2」を入力してください。
C	SNMPマネージャのコミュニティ名を設定します。 「C」と入力すると、プロンプトが「Enter manager entry number>」に替わりますので、設定を行うSNMPマネージャのエントリ番号を入力してください。その後、プロンプトが「Enter community name for manager>」に替わりますので、コミュニティ名を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.6.3.b. トラップ送信の設定(SNMP Trap Receiver Configuration)

「SNMP Configuration Menu」でコマンド「T」を選択すると、図4-6-6のような「SNMP Trap Receiver Configuration Menu」の画面になります。この画面では、SNMPトラップ送信の設定を行います。

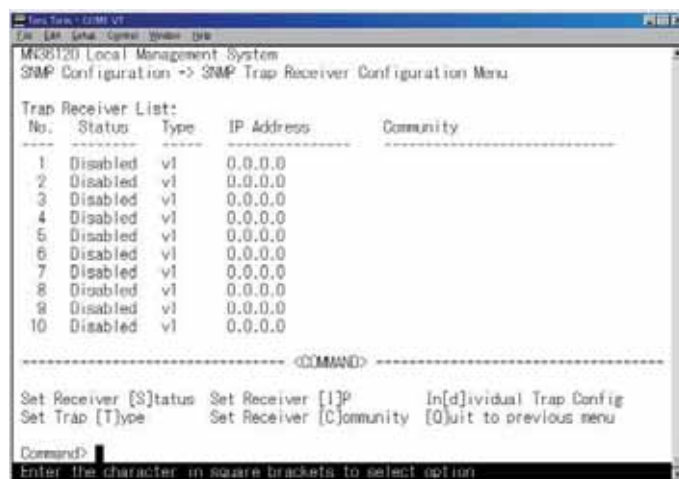


図4-6-6 SNMPトラップ送信の設定

画面の説明

Trap Receiver List:	現在設定されているトラップ送信先のIPアドレスとコミュニティ名を表示します。		
	No.	トラップ送信先のエントリ番号です。	
	Status	トラップを送信するかどうかを表示します	
		Enabled	トラップを送信します。
	Disabled	トラップを送信しません。	
	Type	トラップの種類を表示します。	
		V1	SNMP v1のトラップを送信します。
		V2	SNMP v2のトラップを送信します。
IP Address	トラップ送信先のIPアドレスを表示します。		
Community	トラップ送信する場合の、現在設定されているコミュニティ名を表示します。		

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	<p>トラップ送信先の有効/無効を設定します。</p> <p>「S」と入力すると、プロンプトが「Enter manager entry number>」に替わりますので、設定を行うトラップ送信先のエントリ番号を入力してください。その後、プロンプトが「Enable or Disable Trap Receiver (E/D)>」に替わりますので、SNMPマネージャを有効にする場合は「E」、無効にする場合は「D」を入力してください。但し、有効可能なのはコミュニティ、IPアドレス設定後となります。</p>
I	<p>トラップ送信先のIPアドレスを設定します。</p> <p>「I」と入力すると、プロンプトが「Enter manager entry number>」に替わりますので、設定を行うトラップ送信先のエントリ番号を入力してください。その後、プロンプトが「Enter IP Address for trap receiver>」に替わりますので、IPアドレスを入力してください。</p>
D	<p>リンク状態変更時のトラップ送出について設定します。</p> <p>「D」と入力すると、画面が「Enable/Disable Individual Trap Menu」に切り替わります。詳細な設定については次項(4.6.3.c)を参照ください。</p>
T	<p>トラップの種類を設定します。</p> <p>「T」と入力すると、プロンプトが「Enter manager entry number>」に替わりますので、設定を行うトラップ送信先のエントリ番号を入力してください。その後、プロンプトが「Enter the selection>」に替わりますので、トラップをSNMP v1とする場合は「1」を、SNMP v2とする場合は「2」を入力してください。</p>
C	<p>トラップ送信先のコミュニティ名を設定します。</p> <p>「C」と入力すると、プロンプトが「Enter manager entry number>」に替わりますので、設定を行うトラップ送信先のエントリ番号を入力してください。その後、プロンプトが「Enter community name for trap receiver>」に替わりますので、コミュニティ名を入力してください。</p>
Q	<p>上位のメニューに戻ります。</p>

4.6.3.c. リンク状態変更時のトラップ送出(Enable/Disable Individual Trap Menu)

「SNMP Trap Receiver Configuration」でコマンド「d」を選択すると、図4-6-7のような「Enable/Disable Individual Trap Menu」の画面になります。この画面では、各ポートのリンク状態が変更された際のトラップ送出の設定を行います。

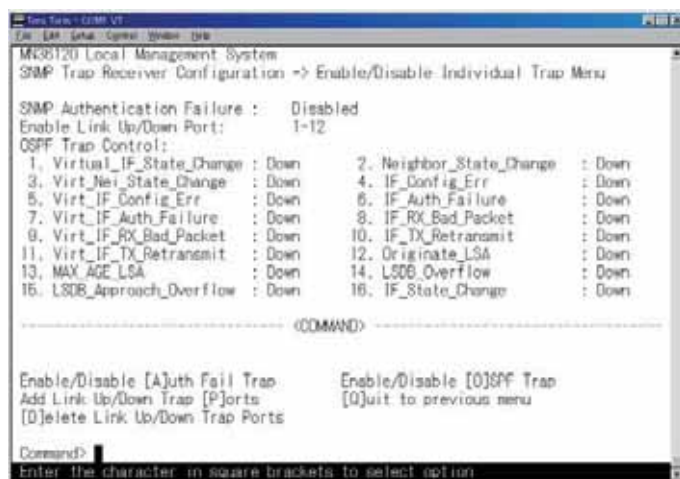


図4-6-7 リンク状態変更時のトラップ送出の設定

画面の説明

Authent Failure:	リンク状態変更時のトラップ送出の有効・無効の設定を表示します。	
	Enable:	トラップ送出を有効にします。
	Disable:	トラップ送出を無効にします。(出荷時設定)
Enable Link Up/Down Port:	リンク状態が変更された際、トラップ送出がされる対象のポート番号を表示します。出荷時は全ポートに設定されています。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

A	リンク状態変更時のトラップ送出の有効/無効を設定します。 「A」と入力すると、プロンプトが「Enable or Disable SNMP Authentication trap (E/D)>」に替わりますので、トラップ送出を有効にする場合は「E」、無効にする場合は「D」を入力してください。
P	リンク状態変更時のトラップ送出の対象ポートを追加します。 「P」と入力すると、プロンプトが「Enter port number>」に替わりますので、トラップ送出の対象としたいポート番号を入力してください。
D	リンク状態変更時のトラップ送出の対象ポートを削除します。 「D」と入力すると、プロンプトが「Enter port number>」に替わりますので、トラップ送出の対象外としたいポート番号を入力してください。
O	OSPFのトラップ送出を有効/無効にします。 「O」と入力すると、プロンプトが「Enter OSPF trap index>」に替わりますので、トラップ送出の対象外としたいポート番号を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.6.4. 各ポートの設定(Port Configuration)

「Basic Switch Configuration Menu」でコマンド「p」を選択すると、図4-6-8のような「Port Configuration Menu」の画面になります。この画面では、各ポートの状態表示、及びポートの設定を行います。

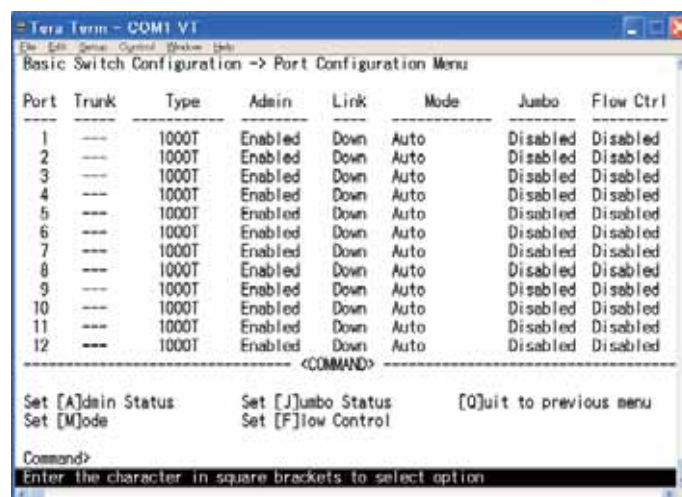


図4-6-8 各ポートの設定

画面の説明

Port	ポート番号を表します。	
Trunk	トランキングの設定状態をグループ番号で表示します。	
Type	ツイストペアポートまたはGBICポートの有効なポートの種類を表します。(自動認識)	
	1000T	ツイストペアポートが有効です。(通常状態)
	1000X	GBICポートが有効です。(GBICポートがリンクした場合有効)
Admin	現在のポートの状態を表します。出荷時はすべて「Enabled」に設定されています。	
	Enabled	ポートが使用可能です。
	Disabled	ポートが使用不可です。
Link	現在のリンクの状態を表します。	
	Up	リンクが正常に確立した状態を表します。
	Down	リンクが確立していない状態を表します。
Mode	通信速度、全/半二重の設定状態を表します。出荷時はすべて「Auto」に設定されています。	
	Auto	オートネゴシエーションモード
	100-FDx	100Mbps全二重
	100-HDx	100Mbps半二重
	10-FDx	10Mbps全二重
	10-HDx	10Mbps半二重
Jumbo	Jumbo Frameを転送するかを設定します。出荷時は全て「Disable」に設定されています。	
	Enabled	Jumbo Frameを転送します。
	Disabled	Jumbo Frameを転送しません。
Flow Ctrl	フローコントロールの設定状態を表します。出荷時は全て「Disable」に設定されています。	
	Enable	フローコントロール中であることを表します。
	Disable	フローコントロールをしていないことを表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです。

S	各ポートを有効か無効か (Enable/Disable) に設定できます。																
	「S」を入力するとプロンプトが「Select port number to be changed>」となりますので、変更したいポート番号を入力してください。全ポートを一度に変更する場合はポート番号を「0」と入力してください。すると、プロンプトが「Enable or Disable port # (E/D)>」となりますので、有効 (Enable) にする場合は「E」を無効 (Disable) にする場合は「D」を入力してください。入力が完了し、設定が変更されると上部の表示も自動的に変更されます。																
M	各ポートの速度と全/半二重を設定できます。																
	「M」を入力するとプロンプトが「Enter port number >」となりますので、変更したいポート番号を入力してください。全ポートを一度に変更する場合はポート番号を「0」と入力してください。すると、プロンプトが「Enter mode for port # (A/N)>」となりますので、オートネゴシエーションモードを使用する場合は「A」、使用しない場合は「N」を選択してください。「N」を選択した場合、プロンプトが「Enter speed for port #(10/100)>」となりますので、設定したい通信速度を入力してください。指定するとプロンプトが「Enter duplex for port #(F/H)>」に替わりますので、全二重の場合は「F」(Full duplex)、半二重の場合は「H」(Half duplex)を指定してください。入力が完了し、設定が変更されると上部の表示も自動的に変更されます。																
	<table border="1"> <tr> <td>Mode:</td> <td>A:</td> <td>オートネゴシエーションモードに設定</td> </tr> <tr> <td></td> <td>N:</td> <td>オートネゴシエーションモードを使用しない (Gigaの速度の固定は未サポート)</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">Speed:</td> <td>10:</td> <td>10Mbpsに設定</td> </tr> <tr> <td>100:</td> <td>100Mbpsに設定</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">Duplex:</td> <td>F:</td> <td>全二重に設定</td> </tr> <tr> <td>H:</td> <td>半二重に設定</td> </tr> </table>	Mode:	A:	オートネゴシエーションモードに設定		N:	オートネゴシエーションモードを使用しない (Gigaの速度の固定は未サポート)	Speed:	10:	10Mbpsに設定	100:	100Mbpsに設定	Duplex:	F:	全二重に設定	H:	半二重に設定
Mode:	A:	オートネゴシエーションモードに設定															
	N:	オートネゴシエーションモードを使用しない (Gigaの速度の固定は未サポート)															
Speed:	10:	10Mbpsに設定															
	100:	100Mbpsに設定															
Duplex:	F:	全二重に設定															
	H:	半二重に設定															
F	フローコントロールを使用するかどうかの設定を行うことができます。																
	「F」を入力するとプロンプトが「Select port number to be changed>」となりますので、変更したいポート番号を入力してください。全ポートを一度に変更する場合はポート番号を「0」と入力してください。すると、プロンプトが「Enable or Disable flow control for port # (E/D)>」となりますので、使用する (Enable) 場合は「E」を、使用しない (Disable) 場合は「D」を入力してください。入力が完了し、設定が変更されると上部の表示も自動的に変更されます。																
J	Jumbo Frameを転送するかどうかの設定を行うことができます。																
	「J」を入力するとプロンプトが「Select port number to be changed>」となりますので、変更したいポート番号を入力してください。全ポートを一度に変更する場合はポート番号を「0」と入力してください。すると、プロンプトが「Enable or Disable Jumbo Status for port # (E/D)>」となりますので、転送する (Enable) 場合は「E」を、転送しない (Disable) 場合は「D」を入力してください。入力が完了し、設定が変更されると上部の表示も自動的に変更されます。																
Q	上位のメニューに戻ります。																

ご注意: この画面はポートの状態を表示していますが、自動的に更新されません。最新の状態を表示するには何らかのキー入力を行なってください。

4.6.5. アクセス条件の設定(System Security Configuration)

「Basic Switch Configuration Menu」でコマンド「s」を選択すると、図4-6-9のような「System Security Configuration」の画面になります。この画面では、設定・管理時に本機器にアクセスする際の諸設定を行います。

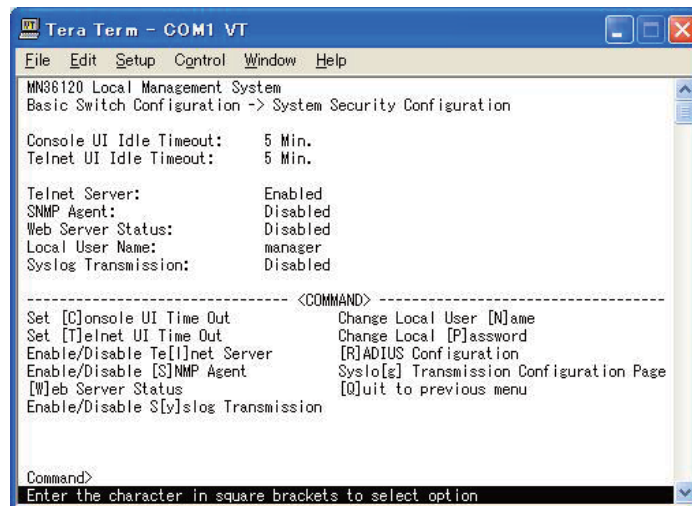


図4-6-9 アクセス条件の設定

画面の説明

Console UI Idle Time Out:	コンソールで接続しているときに、何も入力があった場合のセッションが切れるまでに設定されている時間を分単位で表示します。出荷時は5分に設定されています。	
Telnet UI Idle Time Out:	Telnetでリモート接続しているときに、何も入力があった場合のセッションが切れるまでに設定されている時間を分単位で表示します。出荷時は5分に設定されています。	
Telnet Server:	Telnetでのアクセスを可能にするかどうかを表示します。出荷時は「Enable」に設定されています。	
	Enable:	アクセス可
	Disable:	アクセス不可
SNMP Agent:	SNMPでのアクセスを可能にするかどうかを表示します。出荷時は「Enable」に設定されています。	
	Enable:	アクセス可
	Disable:	アクセス不可
Web:	Webでのアクセスを可能にするかどうかを表示します。出荷時はDisabledに設定されています。	
	Enabled:	アクセス可
	Disabled:	アクセス不可
Local User Name:	現在設定されているログインする際のユーザー名を表示します。出荷時は「manager」に設定されています。	
Syslog Transmission:	Syslogサーバへシステムログを送信することが可能かどうかを表示します。出荷時は「Disabled」に設定されています。	
	Enabled:	Syslogサーバへシステムログを送信する。
	Disabled:	Syslogサーバへシステムログを送信しない。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです。

C	コンソールで接続しているときの何も入力がなかった場合に自動的に接続が切断されるまでの時間を設定します。
	「C」と入力するとプロンプトが「Enter console idle timeout>」と変わります。ここで0~60(分)までの値を設定してください。0と設定した場合は自動切断しくなくなります。
T	Telnetで接続しているときの何も入力がなかった場合に自動的に接続が切断されるまでの時間を設定します。
	「T」と入力するとプロンプトが「Enter telnet idle timeout>」と変わります。ここで1~60(分)までの値を設定してください。
N	ログインする際のユーザー名を変更します。
	「N」と入力するとプロンプトが「Enter current password>」と変わりますので、現在のパスワードを入力してください。パスワードが正しい場合、プロンプトが「Enter new name>」と変わりますので、新しいユーザー名を半角12文字で入力してください。
P	ログインする際のパスワードを変更します。
	「P」と入力するとプロンプトが「Enter old password>」と変わりますので、現在のパスワードを入力してください。パスワードが正しい場合、プロンプトが「Enter new password>」と変わりますので、新しいパスワードを半角12文字で入力してください。入力すると確認のためプロンプトが「Retype new password>」となりますので新しいパスワードを再入力してください。
L	Telnetでのアクセスを可能にするかどうかを設定します。
	「L」と入力するとプロンプトが「Enable or Disable telnet server (E/D)>」と変わります。アクセス可能にするには「E」を、アクセスできなくするには「D」を入力してください。
S	SNMPでのアクセスを可能にするかどうかを設定します。
	「S」と入力するとプロンプトが「Enable or Disable SNMP Agent (E/D)>」と変わります。アクセス可能にするには「E」を、アクセスできなくするには「D」を入力してください。
W	Webでのアクセスを可能にするかどうかを設定します。
	「W」と入力するとプロンプトが「Enable or Disable web server (E/D)>」と変わります。アクセス可能にするには「E」を、アクセスできなくするには「D」を入力してください。
Y	Syslogサーバへシステムログを送信するかどうかを設定します。
	「Y」と入力するとプロンプトが「Enable/Disable S[y]slog Transmission」と変わります。Syslogサーバへシステムログを送信する設定にするならば「E」を、送信しないならば「D」を入力してください。
R	802.1xポートベース認証で使用するRADIUS(Remote Authentication Dial In User Service)サーバのアクセス設定を行います。
	「R」と入力するとRADIUS Configuration Pageに移動します。ここでの設定については次項(4.6.5.a)を参照してください。
G	Syslogサーバへシステムログを送信する条件の設定を行いません。
	「G」と入力するとSyslog Transmission Configuration Pageに移動します。ここでの設定については次項(4.6.5.b)を参照してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.6.5.a. RADIUSの設定(RADIUS Configuration)

「System Security Configuration」でコマンド「R」を選択すると、**図4-6-10**のような「RADIUS Configuration Page」の画面になります。この画面では、802.1xポートベース認証で使用するRADIUSサーバへのアクセス設定を行います。

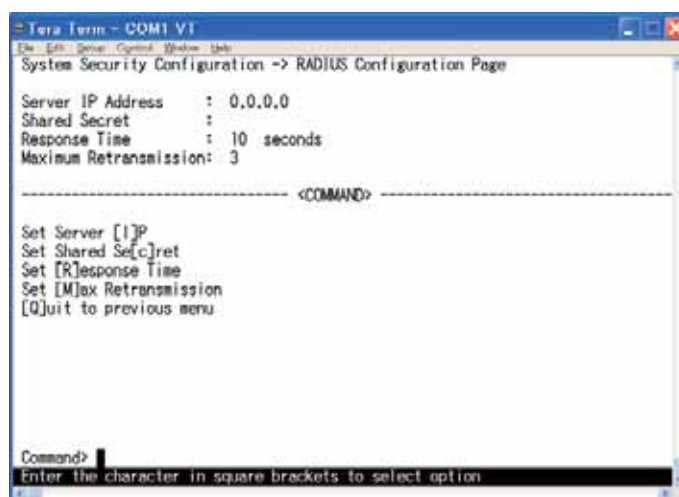


図4-6-10 RADIUSの設定

画面の説明

Server IP Address:	RADIUSサーバのIPアドレスを表示します。
Shared Secret:	認証の際に用いる共通鍵(Shared Secret)を表示します。サーバ側とクライアント側で同じ設定にする必要があり、通常システム管理者が設定します。
Response Time:	RADIUSサーバへの認証要求に対する最大待機時間を表示します。出荷時は10秒に設定されています。
Maximum Retransmission:	RADIUSサーバへの認証要求が再送される回数を表示します。出荷時は3回に設定されています。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです。

I	RADIUSサーバのIPアドレスを設定します。 「A」と入力すると表示が「Enter IP Address for radius server>」となりますので、IPアドレスを入力してください。
C	RADIUSサーバの共通鍵を設定します。 「C」と入力するとプロンプトが「Enter secret string for server>」に替わりますので、半角20文字以内で入力してください。
R	認証要求に対してRADIUSサーバが応答するまでの待機時間を設定します。 「R」と入力するとプロンプトが「Enter response time>」に替わりますので、1~120(秒)までの値を入力してください。
M	認証要求が再送される最高回数を設定します。 「M」と入力するとプロンプトが「Enter maximum retransmission>」に替わりますので、1~254までの整数を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.6.5.b. Syslog Transmissionの設定(Syslog Transmission Configuration)

「System Security Configuration」でコマンド「G」を選択すると、**図4-6-11**のような「Syslog Transmission Configuration Page」の画面になります。この画面では、システムログを送信するSyslogサーバ情報の設定を行います。

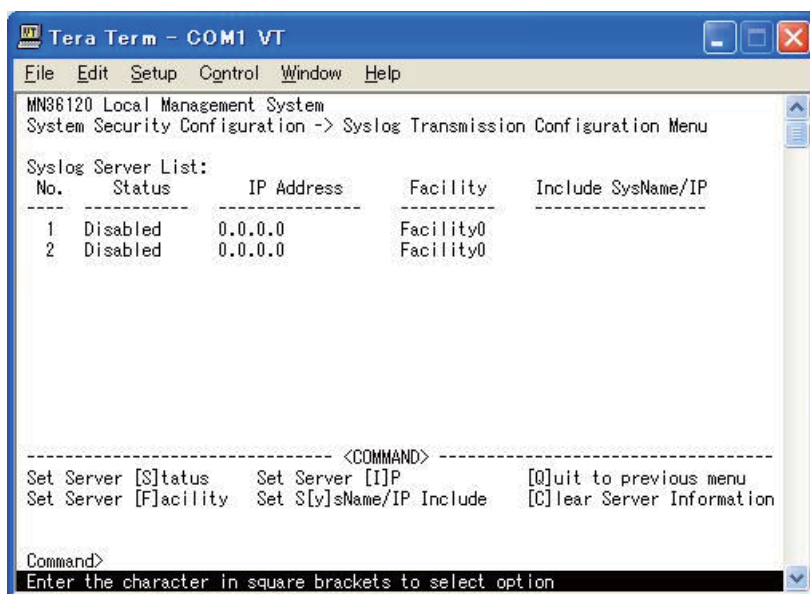


図4-6-11 Syslog Transmissionの設定

画面の説明

Status:	Syslog Transmissionの状態を表示します。	
IP Address:	SyslogサーバのIPアドレスを表示します。	
Facility:	Facilityの値を表示します。	
Include SysName/IP:	追加する情報を表示します。	
	SysName	送信するシステムログに本機器のSysNameを追加します。
	IP address	送信するシステムログに本機器のIP Addressを追加します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです。

S	Syslog Transmissionの状態を設定します。 「S」と入力すると表示が「Enter manager entry number>」となりますので、設定したいNo.を入力してください。するとプロンプトが「Enable or Disable Server (E/D)>」と替わりますので、有効にする場合は「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
F	Facillityを設定します。 「F」と入力すると表示が「Enter manager entry number>」となりますので、設定したいNo.を入力してください。するとプロンプトが「Enter Server Facility>」と替わりますので、0~7(Local0~Local7)までの値を入力してください。
I	SyslogサーバのIPアドレスを設定します。 「I」と入力すると表示が「Enter manager entry number>」となりますので、設定したいNo.を入力してください。するとプロンプトが「Enter IP address for manager>」と替わりますので、SyslogサーバのIPアドレスを入力してください。
Y	送信するシステムログに追加する情報を設定します。 「Y」と入力すると表示が「Enter manager entry number>」となりますので、設定したいNo.を入力してください。するとプロンプトが「Enter Include Information>」と替わりますので、本機器のSysNameを追加する場合は「S」を、IPアドレスを追加する場合は「I」を、追加しない場合は「N」を入力してください。
C	Syslog Transmissionの設定情報を初期化します。 「C」と入力すると表示が「Enter manager entry number>」となりますので、初期化したいNo.を入力してください。するとプロンプトが「Clear Syslog Server information>」と替わりますので、初期化する場合は「Y」を、初期化しない場合は「N」を加しない場合は「N」を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.6.6. MACアドレステーブルの参照(Forwarding Database)

「Basic Switch Configuration Menu」でコマンド「F」を選択すると、図4-6-12のような「Forwarding Database Information Menu」の画面になります。この画面では、パケットの転送に必要な学習され記憶されているMACアドレスのリストを表示します。また、静的にMACアドレスの追加・削除を行えます。



図4-6-12 MACアドレステーブルの参照

画面の説明

Static Address Table	フォワーディングデータベースのMACアドレスの追加・削除を行います。
Display MAC Address by Port	ポート毎のMACアドレステーブルを表示します。
Display MAC Address by MAC	登録されている全てのMACアドレスを表示します。
Display MAC Address by VID	VLAN毎のMACアドレステーブルを表示します。
Quit to previous menu	上位のメニューに戻ります。

4.6.6.a. MACアドレスの追加・削除

「Forwarding Database Information Menu」でコマンド「S」を選択すると、**図4-6-13**のような「Static Address Table Menu」の画面になります。この画面では、静的にMACアドレスの追加・削除を行えます。

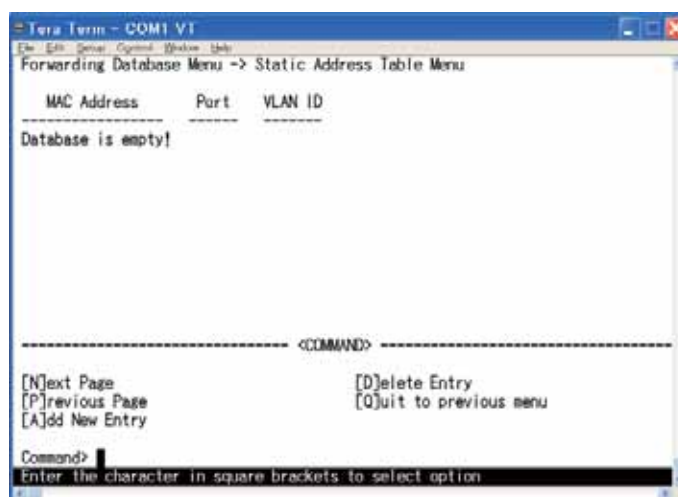


図4-6-13 MACアドレスの追加・削除

画面の説明

MAC Address	MACアドレステーブル内のMACアドレスを表示します。
Port	MACアドレスの属するポートを表示します。
VLAN ID	MACアドレスの属するVLAN IDを表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです。

N	次のページを表示します。 「N」と入力すると次のページを表示します。
P	前のページを表示します。 「P」と入力すると前のページを表示します。
A	MACアドレスを追加登録します。 「A」と入力すると表示が「Enter MAC Address(xx:xx:xx:xx:xx:xx)」となりますので、追加するアドレスを入力してください。
D	登録されたMACアドレスを削除します。 「D」と入力すると表示が「Enter MAC Address(xx:xx:xx:xx:xx:xx)」となりますので、削除するアドレスを入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.6.6.b. ポート毎のMACアドレステーブルの表示

「Forwarding Database Information Menu」でコマンド「P」を選択すると、プロンプトが「Enter Port Number>」に切り替わりますので、ここでポート番号を指定することにより、**図4-6-14**のような「Display MAC Address by Port」の画面になります。この画面では、ポート毎のMACアドレステーブルの表示を行えます。

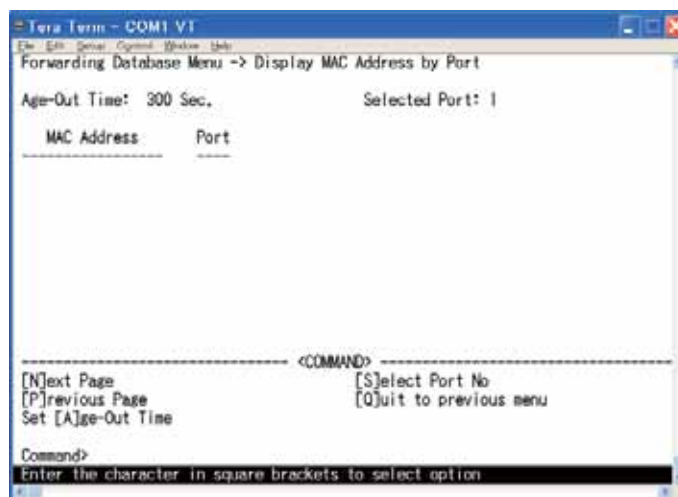


図4-6-14 ポート毎のMACアドレステーブルの表示

画面の説明

Age-Out Time:	MACアドレステーブルを保存する時間を表示します。最後にパケットを受信してからの時間となります。出荷時は300秒（5分）に設定されています。
Select Port:	選択したポート番号を表示します。
MAC Address	MACアドレステーブル内のMACアドレスを表示します。
Port	MACアドレスの属していたポートを表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです。

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると次のポートを表示します。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると前のポートを表示します。
A	MACアドレスの保管時間を設定します。
	「A」と入力するとプロンプトが「Enter Age-Out time>」と変わりますので、時間を秒単位で10～1000000の間で設定してください。
S	表示するポートを切り替えます。
	「S」と入力するとプロンプトが「Enter Port Number>」に替わりますので、表示したいポート番号を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.6.6.c. 全てのMACアドレスの表示

「Forwarding Database Information Menu」でコマンド「M」を選択すると、**図4-6-15**のような「Display MAC Address by MAC」の画面になります。この画面では、本装置の全てのMACアドレステーブルの表示を行えます。

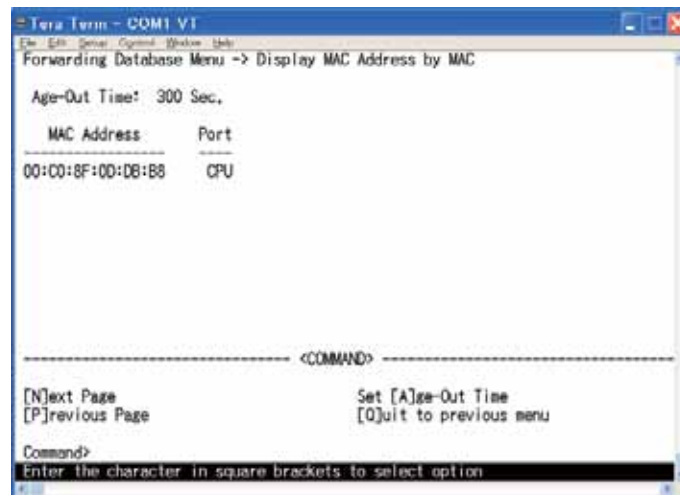


図4-6-15 全てのMACアドレスの表示

画面の説明

Age-Out Time:	MACアドレステーブルを保存する時間を表示します。最後にパケットを受信してからの時間となります。出荷時は300秒（5分）に設定されています。
MAC Address	MACアドレステーブル内のMACアドレスを表示します。
Port	MACアドレスの属していたポートを表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです。

N	次のページを表示します。 「N」と入力すると次のポートを表示します。
P	前のページを表示します。 「P」と入力すると前のポートを表示します。
A	MACアドレスの保管時間を設定します。 「A」と入力するとプロンプトが「Enter Age-Out time>」と変わりますので、時間を秒単位で10～1000000の間で設定してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.6.6.d. VLAN毎のMACアドレステーブルの表示

「Forwarding Database Information Menu」でコマンド「V」を選択すると、プロンプトが「Enter VLAN ID>」に切り替わりますので、ここでポート番号を指定することにより、**図4-6-16**のような「Display MAC Address by VLAN ID」の画面になります。この画面では、VLAN毎のMACアドレステーブルの表示を行えます。

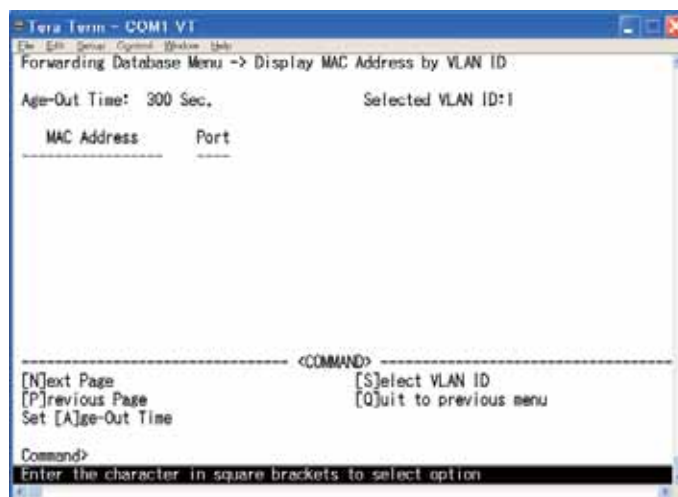


図4-6-16 VLAN毎のMACアドレステーブルの表示

画面の説明

Age-Out Time:	MACアドレステーブルを保存する時間を表示します。最後にパケットを受信してからの時間となります。出荷時は300秒（5分）に設定されています。
Select VLAN ID:	選択したVLAN IDを表示します。
MAC Address	MACアドレステーブル内のMACアドレスを表示します。
Port	MACアドレスの属していたポートを表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです。

N	次のページを表示します。 「N」と入力すると次のポートを表示します。
P	前のページを表示します。 「P」と入力すると前のポートを表示します。
A	MACアドレスの保管時間を設定します。 「A」と入力するとプロンプトが「Enter Age-out time>」と変わりますので、時間を秒単位で10～1000000の間で設定してください。
S	表示するVLANを切り替えます。 「S」と入力するとプロンプトが「Enter VLAN ID>」に替わりますので、表示したいVLAN IDを入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.6.7. 時刻同期機能の設定(SNTP Configuration)

本機器では、SNTP(Simple Network Time Protocol)のサポートにより、外部のNTPサーバと内蔵時計の同期による正確な時刻設定が可能です。

「Basic Switch Configuration Menu」でコマンド「T」を選択すると、**図4-6-17**のような「SNTP Configuration Menu」の画面になります。この画面では、SNTPによる時刻同期の設定を行います。

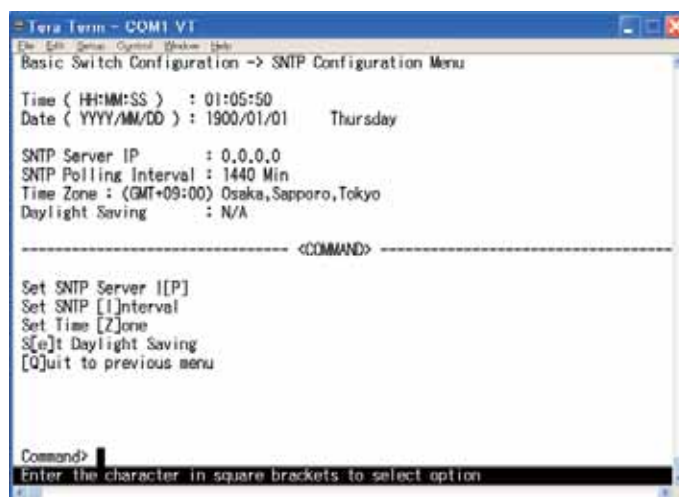


図4-6-17 時刻同期機能の設定：設定前

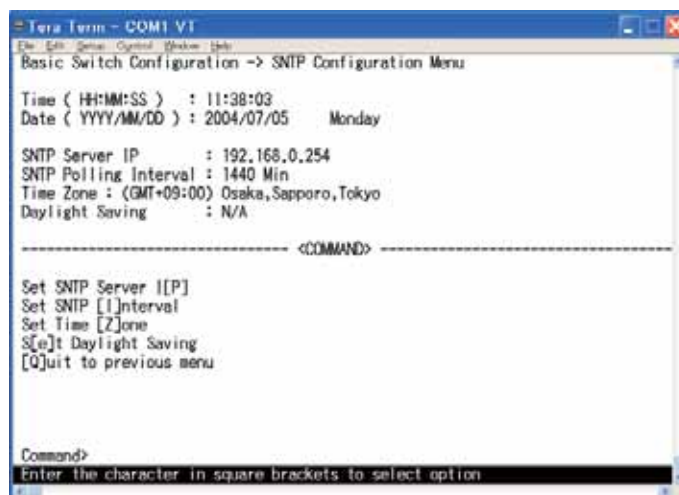


図4-6-18 時刻同期機能の設定：設定後

画面の説明

Time(HH:MM:SS):	内蔵時計の時刻を表示します。
Date(YYYY/MM/DD):	内蔵時計の日付を設定します。
SNTP Server IP	時刻同期を行うSNTPサーバのIPアドレスを表示します。
SNTP Polling Interval	SNTPサーバとの時刻同期間隔を表示します。
Time Zone:	タイムゾーンを表示します。
Daylight Saving:	Daylight Saving(夏時間)の適用状況を表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです。

P	外部NTPサーバのIPアドレスを設定します。 「P」と入力するとプロンプトが「Enter new IP address>」と変わりますので、NTPサーバのIPアドレスを入力してください。
I	NTPサーバとの時刻同期間隔を設定します。 「I」と入力するとプロンプトが「Enter Interval Time>」と変わりますので、NTPサーバとの時刻同期の間隔を1~1440(分)の範囲で入力してください。出荷時は1440分(1日)に設定されています。
E	Daylight Saving(夏時間)の適用を設定します。 「E」と入力するとプロンプトが「Enable or Disable Daylight Saving (E/D)>」と変わりますので、夏時間を適用する場合は「E」、しない場合は「D」を入力してください。 但し、夏時間が適用されないタイムゾーンに設定されている場合は切替ができません。 通常、国内で使用する場合は設定は不要です。
Z	タイムゾーンを設定します。 「Z」と入力するとタイムゾーンの一覧が表示されますので、該当するタイムゾーンを指定してください。通常、国内で使用する場合は、工場出荷時設定の「(GMT+09:00)Osaka, Sapporo, Tokyo」からの変更は不要です。
Q	上位のメニューに戻ります。

ご注意：NTPサーバがファイアウォールの外部にある場合、システム管理者の設定によってはNTPサーバと接続できない場合があります。
詳しくはシステム管理者にお問い合わせください。
また、NTP機能を無効にしたい場合は、SNTP Server IPを0.0.0.0に設定して再起動してください。

4.6.8. ARP table

「Basic Switch Configuration Menu」でコマンド「R」を選択すると、**図4-6-19**のような「ARP Table」の画面になります。この画面では、ARP Tableの参照、及び設定を行います。

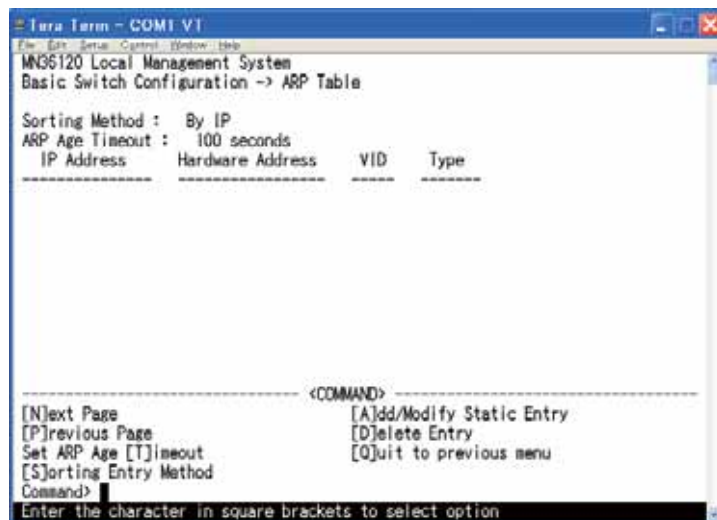


図4-6-19 ARP Table

画面の説明

Sorting Method	表示する並び順の方法を表示します。
ARP Age Timeout	ARP Tableのエイジングタイムアウトを表示します。
IP Address	ARP Table上にあるIP Addressを表示します。
Hardware Address	ARP Table上にあるHardware Addressを表示します。
VID	ARP Table上にあるVLAN IDを表示します。
Type	ARP Table上にあるTypeを表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです。

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
T	ARP Tableのエージングタイムアウトを設定します。
	「T」と入力するとプロンプトが「Enter ARP age timeout value >」と変わりますので、ARP Tableのエージングタイムアウトを30～86400(秒)で設定してください。
S	ARP Tableの表示する順番を選択します。
	「S」と入力するとプロンプトが「Select method for sorting entry to display (I/M/V/T) >」と変わりますので、IP Addressの順番で表示する場合は「I」を、Hardware Addressの順番で表示する場合は「M」を、VLAN IDの順番で表示する場合は「V」を、Typeの順番で表示する場合は「T」を選択してください。
A	ARP Tableのエントリを追加/修正します。
	「A」と入力するとプロンプトが「Enter IP address >」と変わりますので、IPアドレスを入力してください。入力後、「Enter Hardware address >」と変わりますので、MACアドレスを「**:**:**:**:**:**」のように入力してください。入力後、「Enter VLAN ID >」と変わりますので、1～4094の間でVLAN IDを入力してください。
D	ARP Tableのエントリを削除します。
	「D」と入力するとプロンプトが「Enter IP address >」と変わりますので、「Enter IP address >」と変わりますので、IPアドレスを入力してください。入力後、「Enter VLAN ID >」と変わりますので、1～4094の間でVLAN IDを入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7. 拡張機能の設定(Advanced Switch Configuration)

「Main Menu」から「A」を選択すると図4-7-1のような「Advanced Switch Configuration Menu」の画面になります。この画面では本装置がもつ、VLAN、トランキング、ポートモニタリング、スパニングツリー、QoS、802.1x認証機能の設定を行ないます。

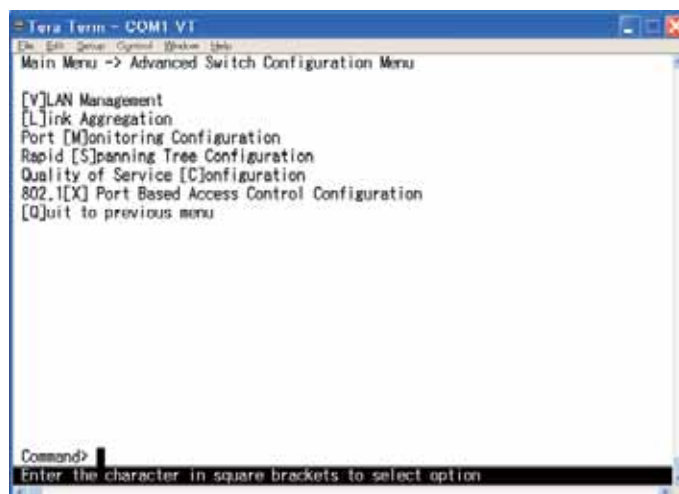


図4-7-1 拡張機能の設定

画面の説明

VLAN Management	VLANに関する設定を行ないます。
Link Aggregation	トランキングの設定を行ないます。
Port Monitoring Configuration	パケットモニタ等を使用する場合のモニタポートの設定を行います。
Rapid Spanning Tree Configuration	スパニングツリーに関する設定を行います。
Quality of Service Configuration	QoSに関する設定を行います。
802.1x Port Base Access Control Configuration	802.1xポートベース認証機能の設定を行います。
Quit to previous menu	Advanced Switch Configuration Menuを終了し、メインメニューに戻ります。

4.7.1.VLANの設定(VLAN Management)

4.7.1.a. 特徴

- 本装置のVLAN機能はポートベースVLANです。
- IEEE802.1Qに準拠したタギングに対応し、タグのついたパケットの取扱いができ、またパケットにタグをつけて送信することが可能で、ポートごとにタグをつけるかどうか設定可能です。
- VLAN ID、PVIDの2つの異なるパラメータをもっています。このパラメータを組み合わせることによりタグなしのパケットの送信先を制御することができます。

VLAN ID・・・タグ付きのパケットを取り扱う際のタグにつけられるVLAN IDです。
またタグなしのパケットの場合にもこのIDでポートがグループ化され、このIDを参照しパケットの送信先が決定されます。
各ポートに複数設定することが可能です。

PVID・・・ポートVLAN ID(PVID)は各ポートにひとつだけ設定することができ、タグなしのパケットを受信した場合にどのVLAN IDに送信するかをこのIDによって決定します。タグ付きのパケットの場合はこのIDは参照されず、パケットについているタグのVLAN IDが使用されます。

4.7.1.b. VLAN設定の操作(VLAN Management Menu)

「Advanced Switch Configuration Menu」でコマンド「V」を選択すると、**図4-7-3**のような「VLAN Management Menu」の画面になります。この画面で、VLANに関する設定を行います。

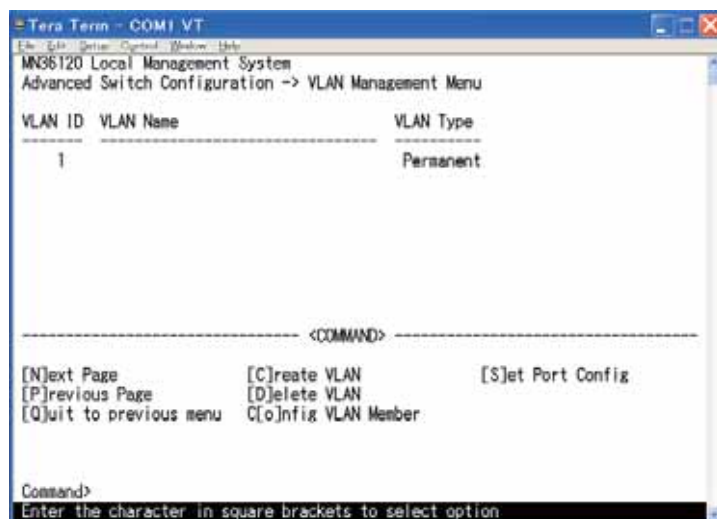


図4-7-3 VLAN設定メニュー

画面の説明

VLAN ID	インデックス番号に対応するVLANのVLAN IDを表示します。	
VLAN Name	設定されているVLANの名前を表示します。	
VLAN Type		VLANの種類を表示します。
	Permanent	初期設定のVLANであることを表します。VLANは最低1つなくてはならず、このVLANは削除できません。
	Static	新たに設定されたVLANであることを表します。

ご注意： 出荷時はVLAN ID=1が設定され、全てのポートがこのVLANに属しています。

また、管理VLANはVLAN ID1(Default VLAN)に設定されています。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
C	新たなVLANを作成します。
	「C」と入力すると画面が「VLAN Create Menu」へ替わります。内容については次項(4.7.1.c)を参照してください。
D	設定されているVLANを削除します。
	「D」と入力するとプロンプトが「Enter VLAN ID >」となりますので、削除したいVLAN ID(2~4094)を入力してください。
O	VLAN内のポート構成を設定します。
	「O」と入力するとプロンプトが「Enter VLAN ID>」となりますので、設定を行いたいVLAN ID(1~4094)を入力してください。すると画面が「VLAN modification Menu」に替わります。内容については次項(4.7.1.d)を参照してください。
S	ポートごとのPVID設定および確認を行ないます。
	「S」と入力すると画面が「VLAN Port Configuration Menu」に替わります。内容については次項(4.7.1.e)を参照してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

ご注意：新たにVLANを作成する場合、後述のPVIDは連動して変更されません。

必ずこの画面で登録した後、**図4-7-5**、**図4-7-6**の設定画面での設定操作、または設定内容の確認を行なってください。

VLANを削除する際も、削除しようとするVLANのVLAN IDがPVIDとして設定が残っていると削除できません。PVIDを別のIDに変更してから削除してください。

4.7.1.c. VLANの作成(VLAN Creation Menu)

「VLAN Management Menu」でコマンド「C」を選択すると、**図4-7-4**のような「VLAN Creation Menu」の画面になります。この画面で、VLANの新規作成に関する設定を行います。



図4-7-4 VLANの作成

画面の説明

VLAN ID:	作成したいVLANのVLAN IDを表します。
VLAN Name:	作成したいVLANのVLAN名を表します。
IP Address	VLANのIPアドレスを入力してください。
Subnet Mask	VLANのサブネットマスクを入力してください。
Port Member:	作成したいVLANのメンバーのポート番号を表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

V	VLAN IDを設定します。 「V」と入力するとプロンプトが「Set VLAN ID->Enter VLAN ID >」となりますので、新しいVLAN IDを入力してください。
N	VLANの名前を設定します。 「N」と入力するとプロンプトが「Set VLAN name->Enter VLAN name >」となりますので、新しいVLAN名を半角30文字以内で入力してください。
I	このVLANのIPアドレスを設定します。 「I」と入力するとプロンプトが「Enter an IP address>」となりますので、このVLANのIPアドレスを入力してください。
M	このVLANのサブネットマスクを設定します。 「M」と入力するとプロンプトが「Enter a subnet mask>」となりますので、このVLANのサブネットマスクを入力してください。
P	VLANのメンバーを設定します。 「P」と入力するとプロンプトが「Enter egress port number >」となりますので、ポート番号を入力してください。ポート番号を複数入力する場合はスペースなしで、カンマで区切るか、連続した数字の場合はハイフンで指定してください。
A	VLANを設定します。 「A」と入力すると作成したVLANが反映されます。
Q	上位のメニューに戻ります。

ご注意: VLAN作成後、「Q」ではなく「A」を入力してください。

「A」を入力しなければVLANは作成されません。

4.7.1.d. VLAN設定の変更(VLAN Modification Menu)

「VLAN Management Menu」でコマンド「o」を選択し、対象のVLAN IDを指定すると、図4-7-5のような「VLAN Modification Menu」の画面になります。この画面で、VLANの設定情報の変更を行います。

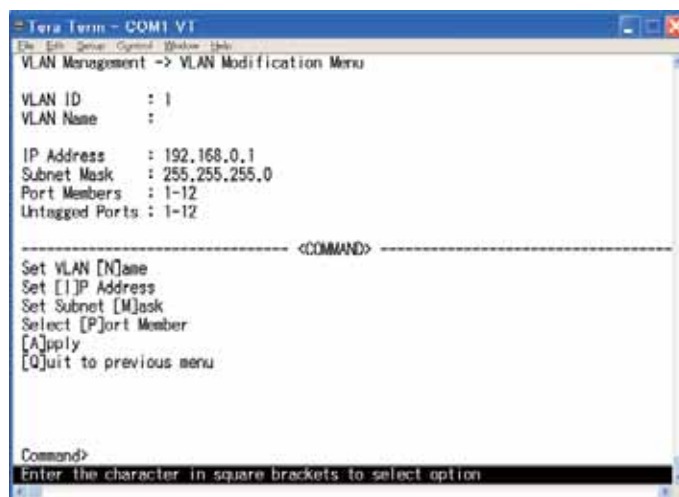


図4-7-5 VLAN設定の変更

画面の説明

VLAN ID:	設定の変更を行うVLANのVLAN IDを表します。
VLAN Name:	設定の変更を行うVLANのVLAN名を表します。
IP Address	設定の変更を行うVLANのIPアドレスを表します。
Subnet Mask	設定の変更を行うVLANのサブネットマスクを表します。
Port Member:	設定の変更を行うVLANのMemberのポート番号を表します。
Untagged Port:	タグを使用しないポートを表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	VLANの名前を設定します。 「N」と入力するとプロンプトが「Set VLAN name->Enter VLAN name >」となりますので、新しいVLAN名を半角30文字以内で入力してください。
I	このVLANのIPアドレスを設定します。 「I」と入力するとプロンプトが「Enter an IP address>」となりますので、このVLANのIPアドレスを入力してください。
M	このVLANのサブネットマスクを設定します。 「M」と入力するとプロンプトが「Enter a subnet mask>」となりますので、このVLANのサブネットマスクを入力してください。
P	VLANのメンバーを設定します。 「P」と入力するとプロンプトが「Enter egress port number >」となりますので、ポート番号を入力してください。ポート番号を複数入力する場合はスペースなしで、カンマで区切るか、連続した数字の場合はハイフンで指定してください。
A	VLANを設定します。 「A」と入力すると作成したVLANが反映されます。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.1.e. ポート毎の設定(VLAN Port Configuration Menu)

「VLAN Management Menu」でコマンド「S」を選択すると、図4-7-6のような「VLAN Port Configuration Menu」の画面になります。この画面で、VLANのポート毎の設定を行います。

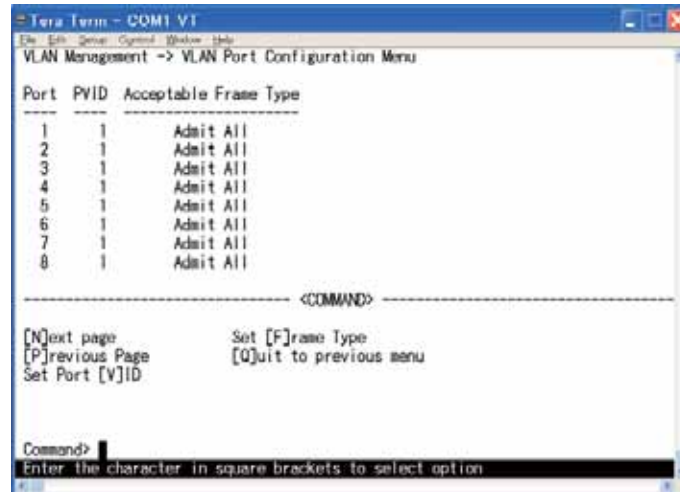


図4-7-6 ポート毎の設定

画面の説明

Port	ポート番号を表します。	
PVID:	現在そのポートに設定されているPVID (Port VLAN ID)を表示します。PVIDはタグなしの packetsを受信した場合にどのVLAN IDに送信するかを表します。出荷時は1に設定されています。タグ付きの packetsを受信した場合は、この値とは関係なくタグを参照し、送信先のポートを決定します。	
Acceptable Type:	受信フレームのタイプを表します。	
	Admit All	全てのフレームを受信します。
	Tagged Only	タグ付きフレームのみ受信します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
V	PVIDを設定します。
	「V」と入力するとプロンプトが「Enter port number>」となりますので、設定したいポート番号を入力してください。するとプロンプトが「Enter PVID for port #>」となりますので、すでに設定されているVLAN IDのうちから変更するVLAN IDを入力してください。
F	受信パケットの種別を設定します。
	「F」と入力するとプロンプトが「Enter port number>」となりますので、変更したいポート番号を入力してください。するとプロンプトが「Select port acceptable frame type (A/T)>」となりますので、全てのパケットを受信する場合は「A」を、タグ付きパケットのみを受信する場合は「T」を入力してください
Q	上位のメニューに戻ります。

ご注意：本装置はひとつのポートに複数のVLANを割り当てることができます。新たにVLANを設定した場合、それまでに属していたVLANと新しいVLANの両方に属することになります。したがって、ドメインを分割する場合には、今まで属していたVLANから必ず削除してください。

4.7.2. リンクアグリゲーションの設定(Link Aggregation)

4.7.2.a. トランキングについて

トランキングとはスイッチの複数のポートをグループ化し、グループ化したポート同士を接続することにより、スイッチ間の通信帯域を増やすことができる機能です。

本装置ではIEEE802.3adで規定されたLACP(Link Aggregation Control Protocol)をサポートしています。

これにより1グループ最大8ポートまでの構成が可能です。

図4-7-7、図4-7-8にトランキングを用いたネットワークの構成例を示します。

ご注意: トランキングは通信速度が1Gbpsの場合のみ可能です。対向機が10/100Mbpsの場合、トランキング接続はできません。また、スパニングツリーとの併用はできません。

図4-7-7は4つのポートを1グループとし、スイッチ間を1000Mb/s 全二重×4の8000Mb/sで接続した例です。

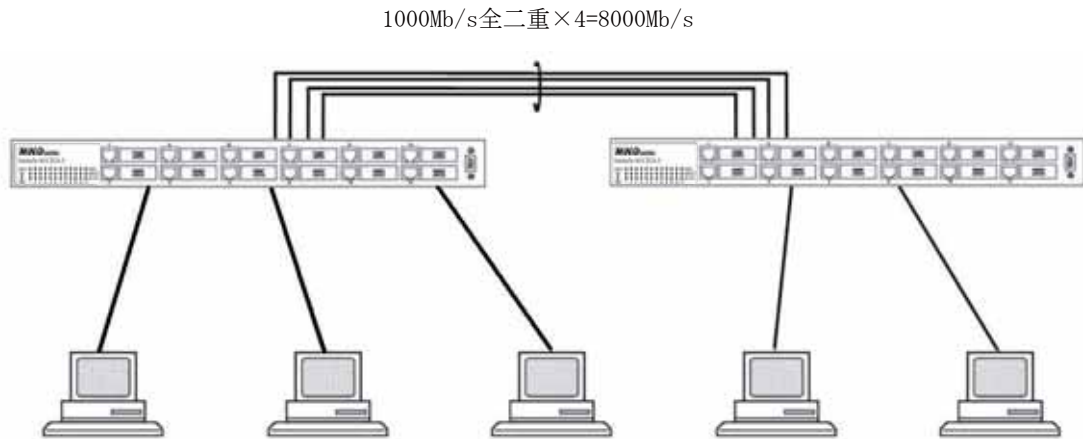


図4-7-7 トランキングを用いた構成例 1

図4-7-8は4つのポートをグループ化したものを2グループ、2つのポートをグループ化したものを1グループ作成し、スイッチ間のバックボーンとして構成した例です。

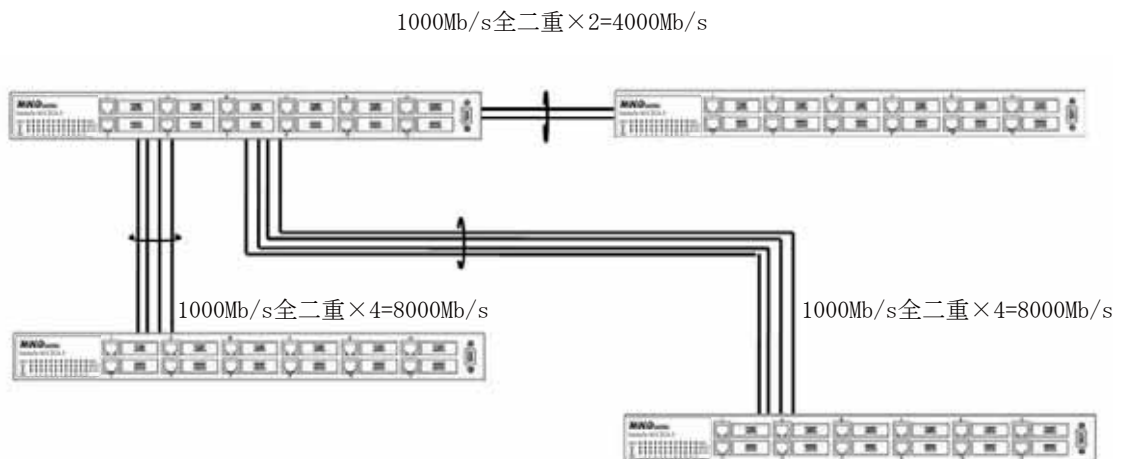


図4-7-8 トランキングを用いた構成例 2

4.7.2.b. 設定操作(Link Aggregation Menu)

「Advanced Switch Configuration Menu」でコマンド「L」を選択すると、**図4-7-9**のような「Link Aggregation Menu」の画面になります。この画面でトランキングの設定を行ないます。

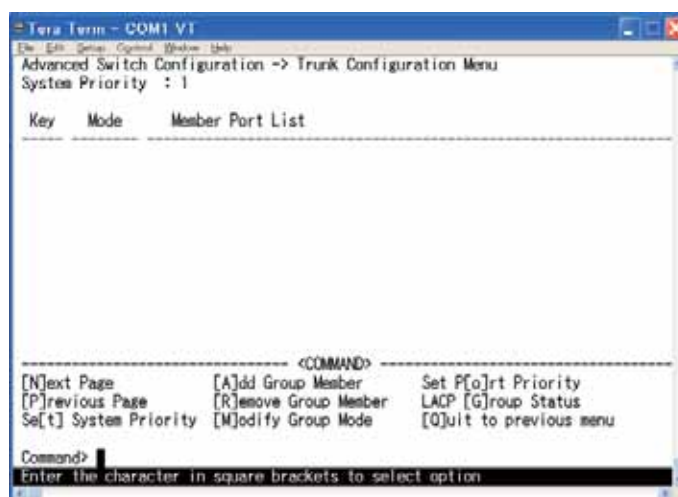


図4-7-9 トランキングの設定

画面の説明

System Priority	LACPを用いてネットワーク上でトランキングを構成する際に必要な本装置の優先順位です。数値が小さいほど優先順位が高くなります。出荷時は1に設定されています。	
Key	トランキングのグループ番号を表示します。	
Mode	トランキングの動作モードを表示します。	
	Active	本装置からLACPパケットを送出し、相手側とネゴシエーションを行うことでトランクを構成します。 相手側のモードがActive、またはPassiveである必要があります。
	Passive	本装置からはLACPパケットは送出せずに、相手側からのLACPパケットの受信でネゴシエーションを行った上でトランクを構成します。 相手側のモードがActiveである必要があります。
	Manual	LACPパケットを用いず、強制的にトランキングを構成します。相手側も同様の設定である必要があります。
Members Port List	トランキングのグループに属しているポートを表示します。	

ご注意: トランキングのモードがスイッチ同士で共にPassiveの場合、トランクのネゴシエーションが行われずに、ループが発生します。LACPを用いてトランキングを構成する場合は片側の設定を必ずActiveとしてください。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。 「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。 「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
T	LACPにおける本装置のSystem Priority値を設定します。 「T」と入力するとプロンプトが「Enter system priority for LACP>」となりますので、
A	新たにトランキングの設定を行います。 「A」と入力するとプロンプトが「Enter trunk group admin key>」となりますので、設定したいグループの番号を入力してください。プロンプトが「Enter port member for group key #>」となりますので、トランキングするポート番号を入力してください。ポート番号を複数入力する場合はスペースなしで、カンマ(,)で区切るか(例「1,2,3」)、連続した数字の場合はハイフン(-)で指定(例「8-12」)してください。その後、プロンプトが「Lacp Active, Lacp Passive or Manual trunk setting (A/P/M)>」に替わりますので、動作モードをActiveにする場合は「A」、Passiveの場合は「P」、Manualの場合は「M」を選択してください。
R	トランキングの設定を削除します。 「R」と入力するとプロンプトが「Enter trunk group admin key>」となりますので、削除したいグループの番号を入力してください。プロンプトが「Enter port member port for group key #>」となりますので、削除するポート番号を入力してください。ポート番号を複数入力する場合はスペースなしで、カンマで区切るか、連続した数字の場合はハイフンで指定してください。
M	トランキングの動作モードを変更します。 「M」と入力するとプロンプトが「Enter trunk group admin key>」となりますので、変更したいグループの番号を入力してください。その後、プロンプトが「Lacp Active, Lacp Passive or Manual trunk setting (A/P/M)>」に替わりますので、動作モードをActiveにする場合は「A」、Passiveの場合は「P」、Manualの場合は「M」を選択してください。
O	トランキングにおける本装置のポート毎のプライオリティ値を設定します。 「o」を入力すると画面が「Set port Priority」に替わります。詳細設定の方法は次項(4.7.2.c)を参照してください。
G	LACPグループの状態を表示します。 「G」と入力するとプロンプトが「Enter trunk group number >」となりますので、表示したいグループのkeyを入力してください。(ここで入力できるのはmodeが「Active」または「Passive」のグループのみです。)その後、画面が「LACP Status」に替わります。これについては次項(4.7.2.d)を参照してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

ご注意: 本装置では1グループに最大12ポートまでのメンバーを設定可能ですが、トランク動作するのは8ポートまでとなります。そのグループの9ポート目以降のメンバーはバックアップモードとなり、8ポート目までのリンクに障害が発生した際、そのポートに替わってトランクを構成するメンバーとなります。この場合、メンバーとなる優先順位は次項(4.7.2.c)で設定されるPort Priority値により決定され、全て同じPriority値の場合はポート番号が小さい順からトランクを構成します。

4.7.2.c. ポート毎の優先値設定(Set Port Priority)

「Link Aggregation Menu」でコマンド「o」を選択すると、図4-7-10のような「Set Port Priority」の画面になります。この画面でトランキングの優先設定を行ないます。

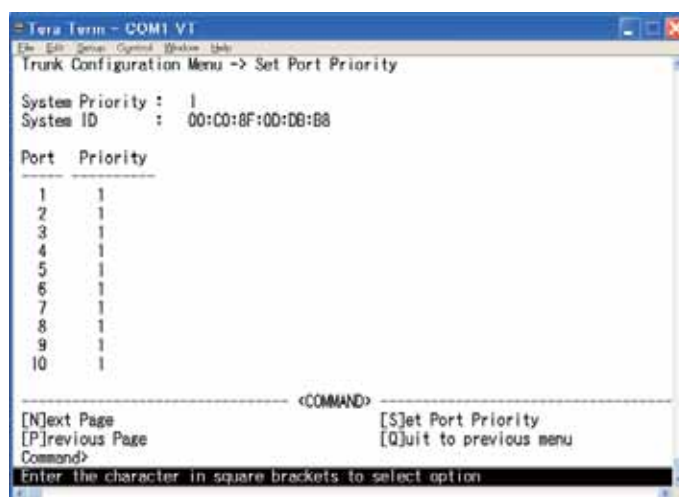


図4-7-9 トランキングの設定

画面の説明

System Priority	LACPを用いてネットワーク上でトランキングを構成する際に必要な本装置の優先順位です。数値が小さいほど優先順位が高くなります。出荷時は1に設定されています。
System ID	LACPを用いてネットワーク上でトランキングを構成する際に必要な本装置のIDです。本装置のMACアドレスがIDとなり、変更はできません。System Priority値とSystem IDの組み合わせがLACPにおけるシステムIDとなります。
Port	本装置のポート番号です。
Priority	トランキングにおける本装置のポート別の優先順位です。数字が小さいほど優先順位が高くなります。9ポート以上のトランキンググループを設定した際に有効です。出荷時は全て1に設定されています。この数値に差異がない場合、ポート番号が小さい方のプライオリティが高くなります。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
S	ポート毎のプライオリティ値（優先順位）を設定します。
	「S」を入力すると
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.2.d. LACPグループの状態表示(LACP Group Status)

「Link Aggregation Menu」でコマンド「G」を選択し、LACPグループとなっているKeyを指定すると、**図4-7-10**のような「LACP Group Status」の画面になります。この画面でLACPグループの状態が確認できます。(状態表示はモードが「Active」、または「Passive」のkeyのみ行えます。)

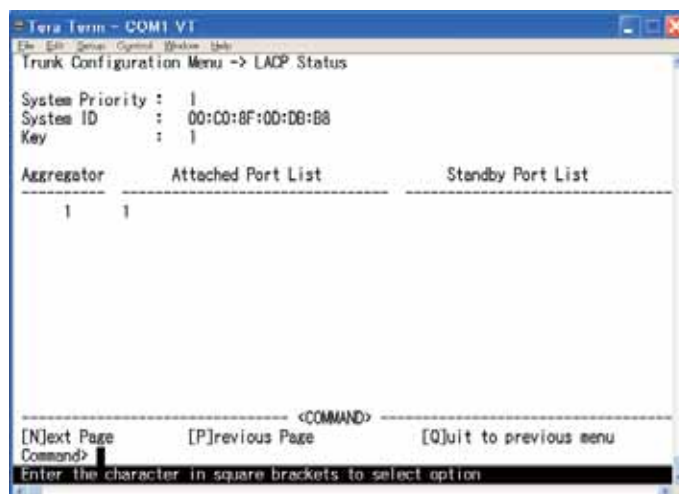


図4-7-10 LACPグループの状態表示

画面の説明

System Priority	LACPを用いてネットワーク上でトランキングを構成する際に必要な本装置の優先順位です。数値が小さいほど優先順位が高くなります。出荷時は1に設定されています。
System ID	LACPを用いてネットワーク上でトランキングを構成する際に必要な本装置のIDです。本装置のMACアドレスがIDとなり、変更はできません。System Priority値とSystem IDの組み合わせがLACPにおけるシステムIDとなります。
key	トランキングのグループ番号を表示します。
Aggregator	トランキングの論理的インタフェース番号です。トランキングを構成するポートの中でもっともPort Priority値の高いポート番号と同一になります。
Attached Port List	論理的インタフェース(Aggregator)に接続される物理的インタフェース(ポート)の番号です。1グループ最大8ポートの接続が可能です。
Standby Port List	9ポートを越えるトランキンググループを設定した場合、Port Priority値が低いポートはバックアップモードとなります。該当ポートが本欄に表示されます。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.3. 他ポートのモニタリング(Port Monitoring Configuration)

「Advanced Switch Configuration Menu」でコマンド「M」を選択すると、図4-7-12のような「Port Monitoring Configuration Menu」の画面になります。本機器ではプロトコルアナライザ等で通信の解析を行う場合に、フィルタリングされ通常では見ることのできない他ポートの packets をモニタすることができます。この画面ではモニタするポートの設定を行うことができます。

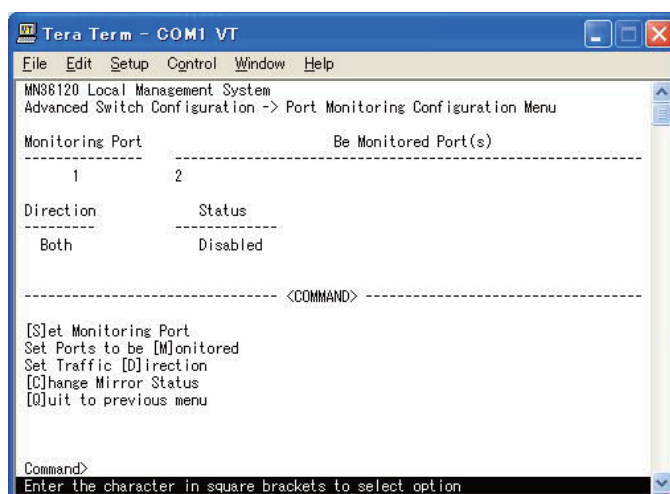


図4-7-12 ポートのモニタリング設定

画面の説明

Monitoring Port	他ポートの packets をモニタできるポートのポート番号を表します。	
Be Monitored Port(s)	モニタされるポートのポート番号を表します。	
Direction	モニタするポートの packets の送信 packets か受信 packets のどちらをモニタするかを表示します。	
	Tx	送信 packets をモニタします。
	Rx	受信 packets をモニタします。
	Both	送受信 packets ともモニタします。
Status	モニタを行っているかどうかを表します。	
	Enabled	packets をモニタしています。
	Disabled	packets をモニタしていません。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	モニタするポート（アナライザ等を接続するポート）を設定します。 「S」と入力するとプロンプトが「Enter port number>」となりますので、設定したいポート番号を入力してください。
M	モニタされるポートを設定します。 「M」と入力するとプロンプトが「Enter port number>」となりますので、設定したいポート番号を入力してください。（複数設定可能）
D	受信パケットをモニタするか送信パケットをモニタするかを設定します。 「D」と入力するとプロンプトが「Select port monitoring direction(R/T/B)>」となりますので、受信パケットをモニタする場合は「R」を、送信パケットをモニタする場合は「T」を、送受信ともにモニタする場合は「B」と入力してください。
C	モニタの開始または停止を行います。 「C」と入力するとプロンプトが「Enter the select(E/D)>」となりますので、開始する場合は「E」を入力してください。またモニタを行っているときに中止する場合は「D」を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

ご注意 : 各種パラメータを設定する時は、Port Monitoringの設定をDisableにして実施してください。設定を実施しても、そのパラメータが反映されません。
設定終了後、Port Monitoringの設定をEnableにしてください。

4.7.4. スパニングツリーの設定(Rapid Spanning Tree Configuration)

「Advanced Switch Configuration Menu」でコマンド「S」を選択すると、**図4-7-27**のような「Rapid Spanning Tree Configuration Menu」の画面になります。

本装置では、IEEE802.1d準拠のスパニングツリープロトコル(STP:**図4-7-28**)、及びIEEE802.1w準拠のラピッドスパニングツリープロトコル(RSTP:**図4-7-29**)の2つのモードをサポートしています。

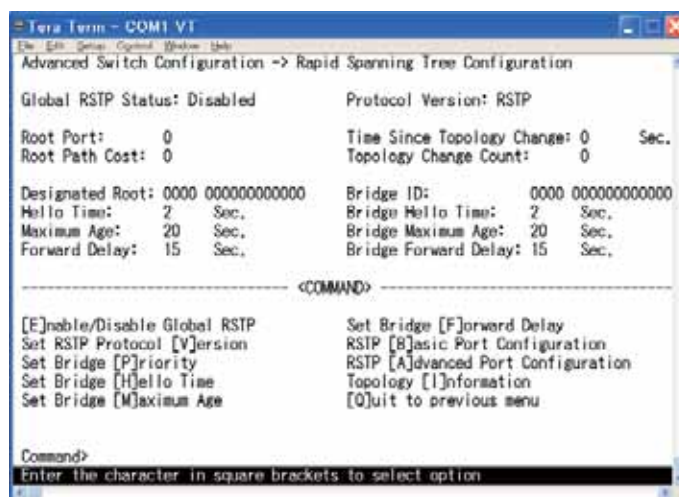


図4-7-27 スパニングツリーの設定

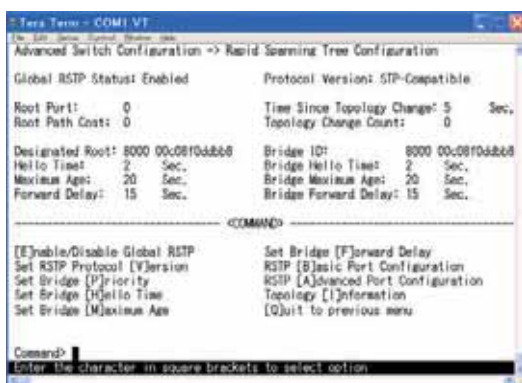


図4-7-28 STPモード動作時

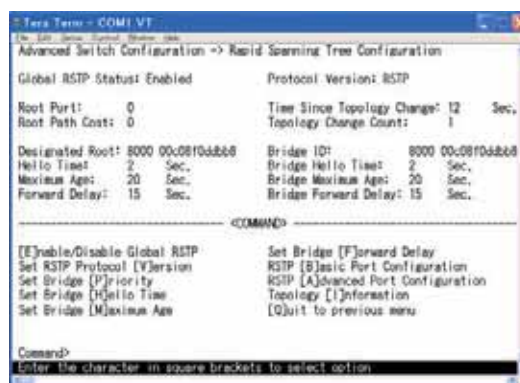


図4-7-29 RSTPモード動作時

画面の説明

Global RSTP Status:	スパニングツリーの動作状況を表示します。	
	Enabled	スパニングツリーが有効です。
	Disabled	スパニングツリーが無効です。(工場出荷時設定)
Protocol Version:	スパニングツリーのバージョンを表示します。	
	RSTP	IEEE802.1w準拠のラピッドスパニングツリープロトコルで動作します。
	STP-Compatible	IEEE802.1d準拠のスパニングツリープロトコルで動作します。
Root Port:	現在のルートポートを表示します。	
Root Path Cost:	ルートポートからルートブリッジへのコストを表示します。	
Time Since Topology Change:	スパニングツリーの構成変更を行ってからの経過時間(秒)を表示します。	
Topology Change Count:	スパニングツリーの構成変更を行った回数を表示します。	
Designated Root:	ルートブリッジのブリッジIDを表示します。	
Hello Time:	スパニングツリーの構成を確認するためのルートブリッジとのアクセス間隔を表示します。	
Maximum Age:	Helloメッセージのタイムアウト時間を表示します。	
Forward Delay:	「Listening」から「Learning」、または「Learning」から「Forwarding」のように、スパニングツリーの状態遷移の時間を表示します。	
Bridge ID:	本装置のブリッジIDを表示します。ブリッジIDはブリッジプライオリティとMACアドレスで構成され、出荷時のブリッジプライオリティは8000に設定されています。	
Bridge Hello Time:	本装置がルートブリッジになった際のHelloタイムを表示します。	
Bridge Maximum Age:	本装置がルートブリッジになった際のMaximum Ageを表示します。	
Bridge Forward Delay	本装置がルートブリッジになった際のForward Delayを表示します。	

ご注意 : 本製品ではトランッキング(Link Aggregation)機能とスパニングツリーの併用はできません。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

E	<p>スパニングツリープロトコルのON/OFFを設定します。</p> <p>「E」を入力するとプロンプトが「Enable or Disable STP (E/D)>」に替わりますので、使用する場合は「E」を、使用しない場合は「D」を入力してください。</p>
V	<p>スパニングツリープロトコルの動作モードを設定します。</p> <p>「V」を入力するとプロンプトが「Set RSTP protocol version (S/R)>」に替わりますので、IEEE802.1dスパニングツリープロトコルで動作させる場合は「S」を、IEEE802.1wラピッドスパニングツリープロトコルで動作させる場合は「R」を入力してください。</p>
B	<p>ポート毎の基本設定を行います。</p> <p>「B」を入力すると画面が「Basic Port Configuration」に替わり、ポート毎の基本設定が可能となります。ここでの設定方法については次項(4.7.4.a)を参照してください。</p>
A	<p>ポート毎の拡張設定を行います。</p> <p>「A」を入力すると画面が「Advanced Port Configuration」に替わり、ポート毎の拡張設定が可能となります。ここでの設定方法については次項(4.7.4.b)を参照してください。</p>
P	<p>ブリッジプライオリティを設定します。</p> <p>「P」を入力するとプロンプトが「Enter bridge priority>」に替わりますので、画面最下部の黒帯に指定された範囲で入力してください。</p>
H	<p>Bridge hello timeを設定します。</p> <p>「H」を入力するとプロンプトが「Enter bridge hello time>」に替わりますので、画面最下部の黒帯に指定された範囲で入力してください。</p>
M	<p>Bridge maximum ageを設定します。</p> <p>「M」を入力するとプロンプトが「Enter bridge maximum age>」に替わりますので、画面最下部の黒帯に指定された範囲で入力してください。</p>
F	<p>Bridge forward delayを設定します。</p> <p>「F」を入力するとプロンプトが「Enter bridge forward delay>」に替わりますので、画面最下部の黒帯に指定された範囲で入力してください。</p>
I	<p>ポート毎のトポロジー情報を表示します。</p> <p>「I」を入力すると画面が「Designated Topology Information」に替わり、ポート毎のトポロジー情報が参照できます。画面の内容については次項(4.7.4.c)を参照してください。</p>
Q	<p>上位のメニューに戻ります。</p>

ご注意 : 「Bridge Hello Time」、「Bridge Maximum Age」、「Bridge Forward Delay」の各値は互いに関連しています。ある一つのパラメータを変更すると、それに伴い自動的に他のパラメータの設定可能な範囲が変わります。設定可能範囲は画面最下部の黒帯の説明欄に表示されますので参照してください。

4.7.4.a. ポート毎の基本設定(Basic Port Configuration)

「Rapid Spanning Tree Configuration Menu」でコマンド「B」を選択すると、図4-7-25のような「Basic Port Configuration」の画面になります。この画面ではスパンニングツリーに関するポート毎の設定を行ないます。

Port	Trunk	Link	State	Role	Priority	Path Cost	STP Status
1	1	Down	Discarding	Disabled	128	20000(A)	Enabled
2	2	Down	Discarding	Disabled	128	20000(A)	Enabled
3	2	Down	Discarding	Disabled	128	20000(A)	Enabled
4	---	Down	Discarding	Disabled	128	20000(A)	Enabled
5	---	Down	Discarding	Disabled	128	20000(A)	Enabled
6	---	Down	Discarding	Disabled	128	20000(A)	Enabled
7	---	Up	Forwarding	Designated	128	20000(A)	Enabled
8	---	Down	Discarding	Disabled	128	20000(A)	Enabled
9	---	Down	Discarding	Disabled	128	20000(A)	Enabled
10	---	Down	Discarding	Disabled	128	20000(A)	Enabled
11	---	Down	Discarding	Disabled	128	20000(A)	Enabled
12	---	Down	Discarding	Disabled	128	20000(A)	Enabled

<COMMAND>

Set Port Pr[i]ority
Set Port Path [C]ost

Set Port STP [S]tatus
[Q]uit to previous menu

Command>

Enter the character in square brackets to select option

図4-7-25 ポート毎の基本設定

画面の説明

Port	ポート番号を表します。	
Trunk	トランキングが設定されている場合、トランクのグループ番号(key)を表示します。	
Link	リンクの状態を表します。	
	UP	リンクが正常に確立している状態です。
	DOWN	リンクが確立されていない状態です。
State	現在のポートの状態を表します。	
	Forwarding	計算の結果、通常の通信を行っている状態を表します。
	Learning	情報をもとに計算を行っている状態を表します。
	Discarding	計算を行わない状態を表します。
Role	スパニングツリーにおけるポートの役割を表します。	
	Designated	指定ポートとして動作中です。
	Root	ルートポートとして動作中です。
	Alternate	オルタネイトポートとして動作中です。
	Backup	バックアップポートとして動作中です。
	Disabled	STPが動作していません。
Priority	スイッチ内での各ポートの優先順位を表します。数値が高いほど優先順位が高くなります。出荷時は全ポート128に設定されています。(値は16の倍数となります。)	
Path Cost	各ポートのコストを表します。出荷時は全ポート20000に設定されています。	
STP Status	各ポートのスパニングツリーの有効・無効を表示します。	
	Enabled	スパニングツリーが有効です。
	Disabled	スパニングツリーが無効です。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

I	スイッチ内でのポートの優先順位を設定します。 「I」と入力するとプロンプトが「Select port number to be changed>」に替わりますので、対象のポート番号を入力してください。その後、その後、「Enter priority for port #>」となりますので、0から255の範囲で16の倍数を入力してください。
C	各ポートのコストを設定します。 「C」と入力するとプロンプトが「Select port number to be changed>」に替わりますので、対象のポート番号を入力してください。その後、その後、「Enter path cost for port #>」となりますので、1から200000000の範囲で入力してください。
S	各ポートのスパニングツリーの有効・無効を設定します。 「S」と入力するとプロンプトが「Select port number to be changed>」に替わりますので、対象のポート番号を入力してください。その後、「Enable or Disable STP for port # (E/D)>」となりますので、スパニングツリーを使用する場合は「E」を、使用しない場合は「D」を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.4.b. ポート毎の拡張設定(Advanced Port Configuration)

「Rapid Spanning Tree Configuration Menu」でコマンド「A」を選択すると、図4-7-26のような「Advanced Port Configuration」の画面になります。この画面ではスパンニングツリーに関するポート毎の拡張設定を行ないます。

Port	Trunk	Link	State	Role	Admin/OperEdge	Admin/OperPtoP	Migrat
1	1	Down	Discarding	Disabled	False/False	Auto /True	Init.
2	2	Down	Discarding	Disabled	False/False	Auto /True	Init.
3	2	Down	Discarding	Disabled	False/False	Auto /True	Init.
4	---	Down	Discarding	Disabled	False/False	Auto /False	Init.
5	---	Down	Discarding	Disabled	False/False	Auto /False	Init.
6	---	Down	Discarding	Disabled	False/False	Auto /False	Init.
7	---	Up	Forwarding	Designated	False/False	Auto /True	STP
8	---	Down	Discarding	Disabled	False/False	Auto /False	Init.
9	---	Down	Discarding	Disabled	False/False	Auto /False	Init.
10	---	Down	Discarding	Disabled	False/False	Auto /False	Init.
11	---	Down	Discarding	Disabled	False/False	Auto /False	Init.
12	---	Down	Discarding	Disabled	False/False	Auto /False	Init.

Command>

Set Port [E]dge Status Restart Port [M]igration
Set Port P-[t]o-P Status [Q]uit to previous menu

Enter the character in square brackets to select option

図4-7-26 ポート毎の拡張設定

画面の説明

Port	ポート番号を表します。	
Trunk	トランキングが設定されている場合、トランクのグループ番号(key)を表示します。	
Link	リンクの状態を表します。	
	UP	リンクが正常に確立している状態です。
	DOWN	リンクが確立されていない状態です。
State	現在のポートの状態を表します。	
	Forwarding	計算の結果、通常の通信を行っている状態を表します。
	Learning	情報をもとに計算を行っている状態を表します。
	Discarding	計算を行わない状態を表します。
Role	スパニングツリーにおけるポートの役割を表します。	
	Designated	指定ポートとして動作中です。
	Root	ルートポートとして動作中です。
	Alternate	オルタネイトポートとして動作中です。
	Backup	バックアップポートとして動作中です。
	Disabled	スパニングツリーが動作していません。
Admin/OperEdge	エッジポート(即座にForwardingに移行可能なポート)の設定状態を表示します。前半(Admin:Administration)は設定した状態、後半(Oper:Operation)は実際の状態を表します。	
	True	エッジポートに設定可能です。
	False	エッジポートに設定不可です。
Admin/OperPtoP	本装置がPoint-to-pointで接続されているかを表します。前半(Admin:Administration)は設定した状態、後半(Oper:Operation)は実際の状態を表します。	
	Auto	ポートの状態により自動認識します。(Adminのみ)
	True	P-to-P接続されています。
	False	P-to-P接続されていません。
Migrat	現状のスパニングツリーの動作状況を表します。	
	STP	STPが動作中です。
	RSTP	RSTPが動作中です。
	Init.	STPが動作していません。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

E	各ポートのEdge Statusを設定します。 「E」と入力するとプロンプトが「Select port number to be changed>」に替わりますので、対象のポート番号を入力してください。その後、「Set edge port for port # (T/F)>」となりますので、Trueの場合は「T」を、Falseの場合は「F」を入力してください。
T	各ポートのP-to-P Statusを設定します。 「T」と入力するとプロンプトが「Select port number to be changed>」に替わりますので、対象のポート番号を入力してください。その後、「Set point-to-point for port # (A/T/F)>」となりますので、Autoの場合は「A」を、Trueの場合は「T」を、Falseの場合は「F」を入力してください。
M	スパニングツリーの動作を再起動します。 「M」と入力するとプロンプトが「Select port number to be changed>」に替わりますので、対象のポート番号を入力してください。その後、「Restart the protocol migration process for port # ? (Y/N)>」となりますので、再起動する場合は「Y」を、しない場合は「N」を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.4.c. 構成情報の表示(Designated Topology Information)

「Rapid Spanning Tree Configuration Menu」でコマンド「I」を選択すると、**図4-7-26**のような「Designated Topology Information」の画面になります。この画面ではポート毎のSpanningツリーの構成情報の表示を行います。

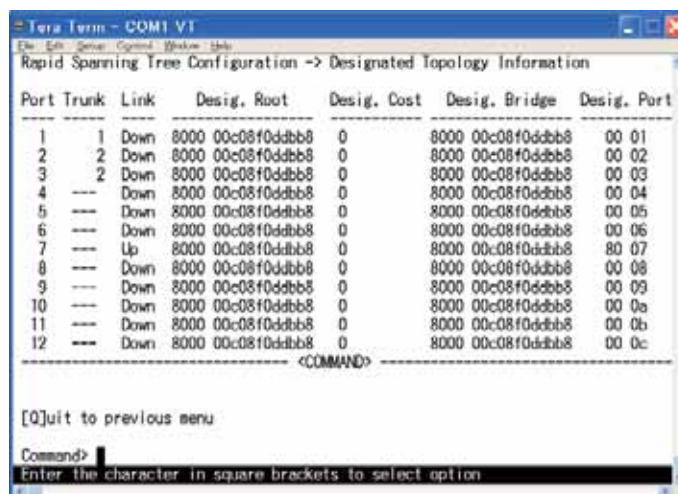


図4-7-26 構成情報の表示

画面の説明

Port	ポート番号を表します。	
Trunk	トランキングが設定されている場合、トランクのグループ番号(key)を表示します。	
Link		リンクの状態を表します。
	UP	リンクが正常に確立している状態です。
	DOWN	リンクが確立されていない状態です。
Desig. Root	ルートブリッジのIDを表します。	
Desig. Cost	送信しているコストを表します。	
Desig. Bridge	指定ブリッジのブリッジIDを表します。	
Desig. Port	指定ポートのポートIDを表します。(ポートIDはポートプライオリティ値とポート番号の組合せです。)	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

Q	上位のメニューに戻ります。
---	---------------

4.7.5. QoSの設定(Quality of Service Configuration)

「Advanced Switch Configuration Menu」でコマンド「S」を選択すると、**図4-7-27**のような「Quality of Service Configuration Menu」の画面になります。ここでは本装置のQoS(Quality of Service)に関する設定が可能です。



図4-7-27 QoSの設定

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

T	パケットによるQoSの設定画面に移動します。 「T」と入力すると画面が「Traffic Class Configuration Menu」に替わります。ここでの設定内容については次項(4.7.5.a)を参照してください。
D	DiffsevによるQoSの設定画面に移動します。 「D」と入力すると画面が「Differentiated Service Configuration」に替わります。ここでの設定内容については次項(4.7.6.)を参照してください。
E	帯域幅の制御の設定画面に移動します。 「E」と入力すると画面が「Egress Rate Limiting」に替わります。ここでの設定内容については次項(4.7.7.)を参照してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.5.a. パケットによるQoSの設定(Traffic Class Configuration Menu)

「Quality of Service Configuration Menu」でコマンド「T」を選択すると、図4-7-28のような「Traffic Class Configuration」の画面になります。この画面ではパケットによるQoSの設定を行ないます。

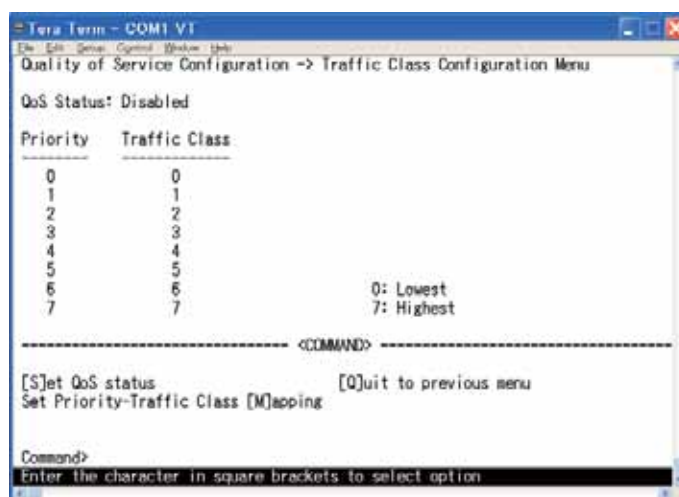


図4-7-28 パケットによるQoSの設定

画面の説明

QoS Status:	IEEE802.1pを使ったQoS機能のステータスを表示します。	
	Enabled	QoSが有効です。
	Disabled	QoSが無効です。(工場出荷時設定)
Priority	パケットのTagの中のPriorityの値を表示します。	
Traffic Class	パケットの優先順位を表示します。数字が大きいかほど優先順位が高くなります。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	QoS機能の有効/無効を切り替えます。
	「S」と入力するとプロンプトが「Enable or Disable QoS (E/D)>」となりますので、使用する場合は「E」を、使用しない場合は「D」を入力してください。
M	IEEE802.1pのPriority値に優先順位(Traffic Class)を割り当てます。
	「M」と入力するとプロンプトが「Enter Priority (E/D)>」となりますので、割り当てを行うPriority値(0~7)を入力してください。その後、プロンプトが「Enter traffic class for priority #>」に替わりますので、Traffic Class(0~7)を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.6. Access Controlの設定(AccessControl Configuration Menu)

「Access Control Configuration Menu」でコマンド「A」を選択すると、**図4-7-29**のような「Access Control Configuration Menu」の画面になります。この画面ではAccess Controlの設定を行いません。

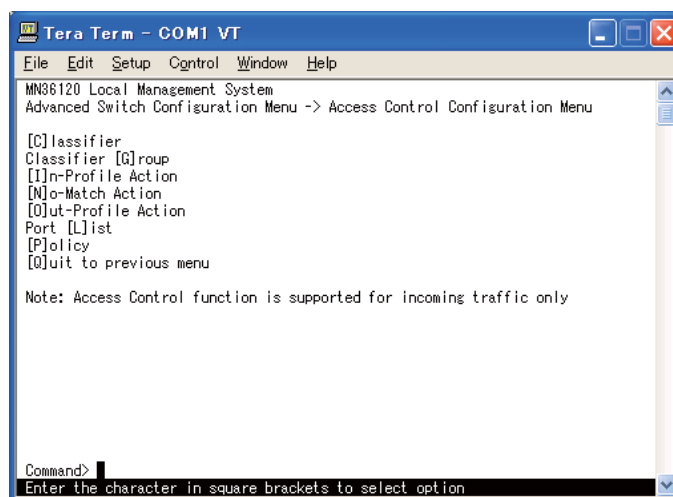


図4-7-29 Access Controlの設定

画面の説明

Classifier	トラフィックの分類を行うクラスの設定を行います。
Classifier Group	クラスを集約するグループの設定を行います。
In-profile action	コミットレートのアクションを設定します。
No-match action	No-matchの設定を行います。
Out-profile action	コミットレートを越えたアクションを設定します。
Port list	Port listの設定を行います。
Policy	Policyの設定を行います。
Quit to previous menu	上位のメニュー画面に戻ります。

4.7.6.a. クラスの設定(Classifier Configuration Menu)

「Access Control Configuration Menu」の画面でコマンド「C」を選択すると図4-7-30のような「Classifier Configuration Menu」の画面になります。この画面ではAccess Controlのクラスの設定を行います。

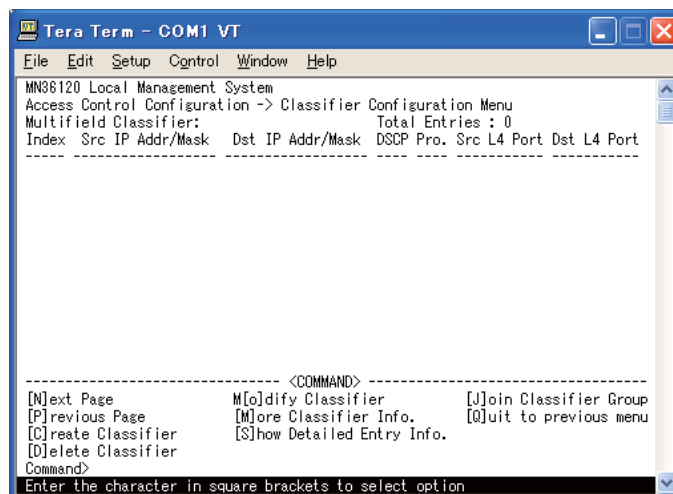


図4-7-30 Classifierの設定

画面の説明

Multi field classifier	クラスの多分野にわたる情報を以下に表示します。
Total Entries	作成されているクラスの数(indexの数)を表示します。
Index	ClassifierのIndex番号を表示します。
Scr IP Addr	送信元IPアドレスを表示します。
Dst IP Addr	宛先IPアドレスを表示します。
DSCP	優先度情報DSCP (AccessControl Code Point) 値を表します。
Protocol	プロトコルを表します。
Scr L4 Port	L4の送信元のポート番号を表します。
Dst L4 Port	L4の宛先のポート番号を表します。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
C	新しいクラスを作成を行います。
	「C」と入力すると、「Create Classifier Configuration Menu」に変わります。Create Classifier Configuration Menuに関しては、「79ページ」を参照してください。
D	クラスの削除を行います。
	「D」と入力するとプロンプトが「Please enter classifier index>」と変わりますので、削除するクラスのindexを1~65535の範囲で入力してください。
O	クラスの設定の修正を行います。
	「O」と入力すると、プロンプトが「Modify Classifier Menu」に変わりますので、「Create Classifier Configuration Menu」と同じように設定（修正）してください。
M	詳細なクラスの情報を表示します。
	「M」と入力すると、送信元MACアドレス、宛先MACアドレス、VLAN IDの情報を表示します。
S	より詳細なクラスの情報を表示します。
	「S」と入力すると、送信元MACアドレス、宛先MACアドレス、VLAN ID、送信元IPアドレス、宛先IPアドレス、DSCP、プロトコルの種類、送信元レイヤー4ポート、宛先レイヤー4ポートの情報を表示します。
J	クラスグループに追加する設定を行います。 (※事前にクラスグループの設定が必要になります。)
	「J」と入力すると、プロンプトが「Select a group index >」に変わりますので、グループにあるIndex番号を入力してください。その後、プロンプトが、「Select classifier list e.g. : 1, 3, 5-16>」に変わりますのでグループに所属させるクラスのIndex番号を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.6.b. クラスの詳細な設定(Create Classifier Configuration Menu)

「Classifier Configuration Menu」の画面でコマンド「C」を選択すると図4-7-31のような「Create Classifier Configuration Menu」の画面になります。この画面ではAccess Controlのクラスの詳細な設定を行います。

```

MN36120 Remote Management System
Classifier Configuration -> Create Classifier Configuration Menu
Classifier Index      :
Source MAC Address   :
Destination MAC Address :
VLAN ID              :
DSCP                 :
Source IP Address    :
Destination IP Address :
Source Layer 4 Port  :
Destination Layer 4 Port:
802.1p Priority      :
Protocol             :
Source IP Mask Length :
Destination IP Mask Length:
TCP SYN Flag        :
ICMP Type           :

----- <COMMAND> -----
[C]lassifier Index      S[o]urce IP Address
[S]ource MAC Address    D[e]stination IP Address
[D]estination MAC Address
[V]LAN ID               So[u]rce Layer 4 Port
802.1p Pr[i]ority      Des[t]ination Layer 4 Port
DSC[P]                 IC[M]P Type
P[r]otocol             TCP S[Y]N Flag
                        [A]pply
                        [Q]uit to previous menu

Command>
Enter the character in square brackets to select option

```

図4-7-31 Classifierの作成

画面の説明

Classifier Index	クラスのIndexを表示します。
Source MAC Address	送信元のMACアドレスを表示します。
Destination MAC Address	宛先のMACアドレスを表示します。
VLAN ID	VLAN IDの設定を表示します。
DSCP	優先度設定DSCPを表示します。
Protocol	プロトコルの種類の設定を表示します。
Source IP Address	送信元のIPアドレスを表示します。
Source Mask length	送信元のマスクの長さを表示します。
Destination IP Address	宛先のIPアドレスを表示します。
Destination Mask length	宛先のマスクの長さを表示します。
Source L4 Port	L4の送信元のポート番号を表示します。
Destination L4 Port	L4の宛先のポート番号を表示します。
802.1p Priority	IEEE802.1pのプライオリティを表示します。
TCP SYN Flag	TCPでの SYN Flagでのフィルターの有無を表示します。
ICMP Type	ICMPのタイプを表示します。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

C	クラスのIndexを設定します。
	「C」と入力すると、「Enter Classifier Index>」に変わりますので、1～65535の範囲でクラスのIndexを入力してください。
S	フィルターをかける送信元のMACアドレスを設定します。
	「S」と入力すると、「Enter Source MAC Address >」に変わりますので、送信元のMACアドレスをxx:xx:xx:xx:xx:xxのように入力してください。
D	フィルターをかける宛先のMACアドレスを設定します。
	「D」と入力すると、「Enter Destination MAC Address >」に変わりますので、宛先のMACアドレスをxx:xx:xx:xx:xx:xxのように入力してください。
V	フィルターをかけるVLAN IDの設定を行います。
	「V」と入力するとプロンプトが「Enter VLAN ID >」と変わりますので、VLAN IDを1～4095の範囲で入力してください。
P	フィルターをかける優先度設定DSCP値の設定を行います。
	「P」と入力すると、プロンプトが「Enter DSCP value(0-63)>」と変わりますので、DSCP値を0～63の範囲で入力してください。
R	フィルターをかけるプロトコルの設定を行います。
	「R」と入力すると、プロンプトが「Select protocol >」と変わりますので、TCPの場合は「1」を、UDPの場合は「2」を、ICMPの場合は「3」を、IGMPの場合は「4」を、RSVPの場合は「5」を、Other Protocolsの場合は「6」を入力してください。
O	フィルターをかける送信元のIPアドレスを設定します。
	「O」と入力すると、プロンプトが「Enter Source IP Address >」と変わりますので、送信元のIPアドレスを入力してください。
E	フィルターをかける宛先のIPアドレスを設定します。
	「E」と入力すると、プロンプトが「Enter Destination IP Address >」と変わりますので、宛先のIPアドレスを入力してください。
U	フィルターをかけるL4の送信元のポート番号を設定します。
	「U」と入力すると、プロンプトが「Enter source port>」と変わりますので、送信元のポート番号を入力してください。
T	フィルターをかけるL4の宛先のポート番号を設定します。
	「T」と入力すると、プロンプトが「Enter destination port>」と変わりますので、宛先のポート番号を入力してください。
I	フィルターをかける802.1Pのプライオリティを設定します。
	「I」と入力すると、プロンプトが「Enter 802.1p priority >」と変わりますので、802.1Pのプライオリティを0-7の範囲で入力してください。
M	フィルターをかけるICMPのタイプを設定します。 (※プロトコルをICMPにする必要があります。)
	「M」と入力すると、プロンプトが「Enter ICMP type>」と変わりますので、ICMPのタイプを0～18の間で入力してください。
Y	フィルターをかけるTCP SYN Flagを設定します。 (※プロトコルをTCPにする必要があります。)
	「Y」と入力すると、プロンプトが「Set TCP SYN flag (Y/N)>」と変わりますので、TCP SYN flagでフィルターをかける場合は「Y」を、フィルターをかけない場合、またはフィルターを外す場合は「N」を入力してください。表示はフィルターをかけた場合は「True」、かけない場合は「False」と表示されます。
A	設定した内容を適用します。ここで適用しないと、設定した内容は有効になりません。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.6.c. クラスの簡易情報の参照(Classifier Configuration Menu)

「Classifier Configuration Menu」の画面でコマンド「M」を選択すると図4-7-32のような「More Classifier Information」の画面になります。この画面ではAccess Controlのクラスの簡易の情報を参照できます。

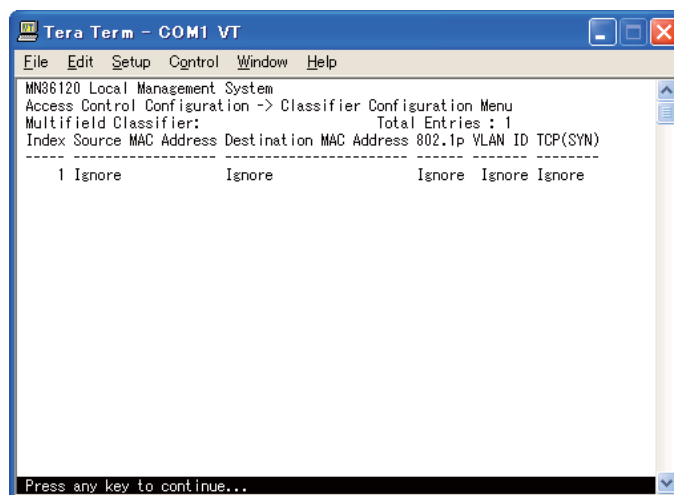


図4-7-32 クラスの簡易情報の参照

画面の説明

Multi field classifier	クラスの多分野にわたる情報を以下に表示します。
Total Entries	作成されているクラスの数(indexの数)を表示します。
Classifier Index	クラスのIndexを表示します。
Source MAC Address	送信元のMACアドレスを表示します。
Destination MAC Address	宛先のMACアドレスを表示します。
VLAN ID	VLAN IDの設定を表示します。

4.7.6.d. クラスの詳細な情報の参照(Show Deleted Entries Information Menu)

「Classifier Configuration Menu」の画面でコマンド「S」を選択すると図4-7-33のような「Show Detailed Entries Information Menu」の画面になります。この画面ではAccess Controlのクラスの詳細な情報の参照ができます。参照を行うには、Classifierの作成が必要となります。

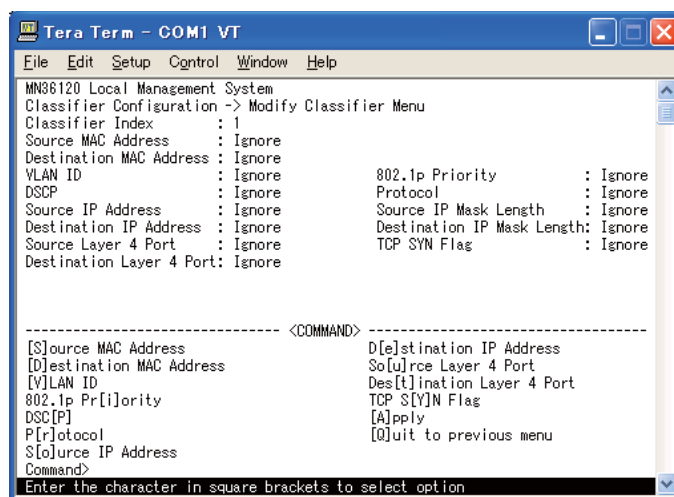


図4-7-33 Access Controlの詳細情報の参照

画面の説明

Classifier Index	クラスのIndexを表示します。
Source MAC Address	送信元のMACアドレスを表示します。
Destination MAC Address	宛先のMACアドレスを表示します。
VLAN ID	VLAN IDの設定を表示します。
DSCP	優先度設定DSCPを表示します。
Protocol	プロトコルの種類の設定を表示します。
Source IP Address	送信元のIPアドレスを表示します。
Source Mask length	送信元のマスクの長さを表します。
Destination IP Address	宛先のIPアドレスを表示します。
Destination Mask length	宛先のマスクの長さを表します。
Source L4 Port	L4の送信元のポート番号を表示します。
Destination L4 Port	L4の宛先のポート番号を表示します。
802.1p Priority	IEEE802.1pのプライオリティを表示します。
TCP SYN Flag	TCPでの SYN Flagでのフィルターの有無を表示します。

4.7.6.e. クラスグループの設定(Classifier Group Configuration Menu)

「Access Control Configuration Menu」の画面でコマンド「G」を選択すると図4-7-34のような「Classifier Group Configuration Menu」の画面になります。この画面ではAccess Controlのクラスグループの設定を行います。

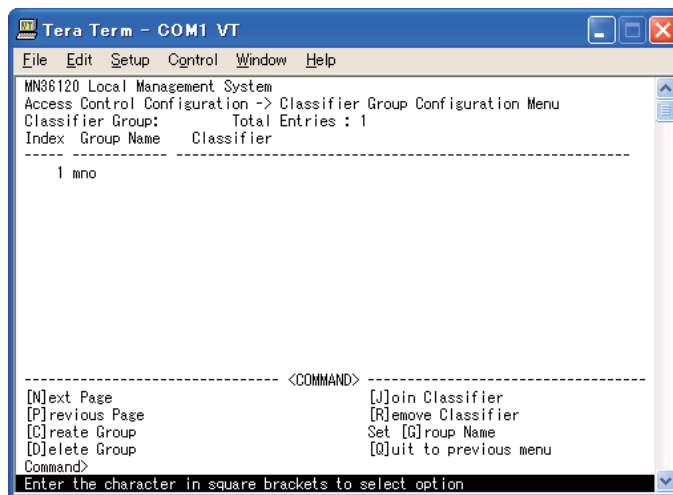


図4-7-34 クラスグループの設定

画面の説明

Total Entries	作成されているクラスの数(indexの数)を表示します。
Index	ClassifierのIndex番号を表示します。
Group Name	グループ名を表示します。
Classifier	所属しているクラスを表示します。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
C	新しいクラスグループの作成を行います。
	「C」と入力すると、プロンプトが「Enter group index>」に変わりますので、クラスグループのIndex番号を入力してください。その後、プロンプトが「Enter group name >」に変わりますのでグループ名を入力してください。
D	クラスグループの削除を行います。
	「D」と入力するとプロンプトが「Enter group index >」と変わりますので、削除するクラスグループのindex番号を入力してください。
J	クラスグループでのクラスの追加設定を行います。
	「J」と入力すると、プロンプトが「Select a group index >」に変わりますので、クラスグループのIndex番号を入力してください。その後、プロンプトが「Select classifier list e.g. : 1, 3, 5-16>」に変わりますので、所属させるクラスを入力してください。
R	クラスグループでのクラスの削除設定を行います。
	「R」と入力すると、プロンプトが「Select a group index >」に変わりますので、クラスグループのIndex番号を入力してください。その後、プロンプトが「Select classifier list e.g. : 1, 3, 5-16>」に変わりますので、削除させるクラスを入力してください。
G	クラスグループ名の設定を行います。
	「G」と入力すると、プロンプトが「Select a group index >」に変わりますので、グループにあるIndex番号を入力してください。その後、プロンプトが「Enter group name >」に変わりますのでグループ名を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.6.f. In-Profileの設定(In-Profile Action Configuration Menu)

「Access Control Configuration Menu」の画面でコマンド「I」を選択すると図4-7-35のような「In-Profile Action Configuration Menu」の画面になります。この画面ではIn-Profileの設定を行います。

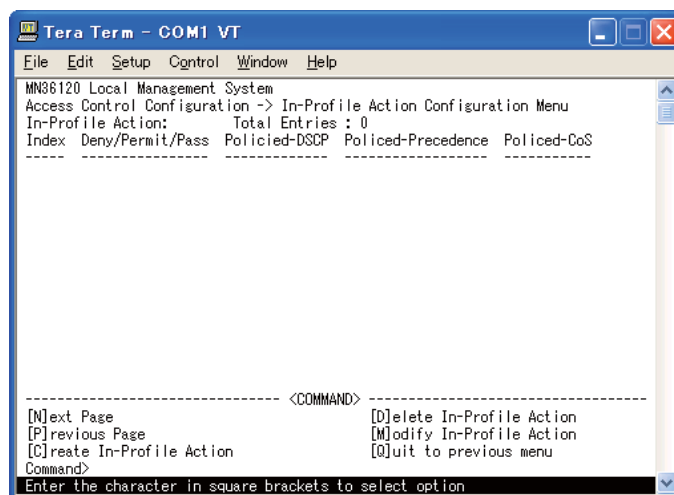


図4-7-35 In-Profileの設定

画面の説明

Total Entries	作成されているクラスの数(indexの数)を表示します。	
Index	In-profileのIndex番号を表示します。	
Deny/permit/pass	パケットの拒否/許可/通過を表示します。	
Action	In-profileにおける実行モードを表示します。	
	Policed-dscp	DSCPをマーキングします。
	Policed-Precedence	Precedenceをマーキングします。
	Policed-CoS	CoSをマーキングします。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

N	次のページを表示します。	
		「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。	
		「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
C	In-profileを作成します。	
	「C」と入力すると、「Create In-Profile Action Menu」に変わりますので、4.7.6fを参照してください。	
	policed-dscp	DSCPをマーキングします。
	policed-precedence	Precedenceをマーキングします。
	policed-cos	CoSをマーキングします。
D	In-profileを削除します	
		「D」と入力するとプロンプトが「Please enter in-profile action Index>」と変わりますので、削除するIn-profileのIndex番号を入力してください。
M	In-profileを修正します。	
		「M」と入力するとプロンプトが「Please enter in-profile action Index>」と変わりますので、修正するIn-profileのIndex番号を入力し、修正箇所をIn-profileの作成時と同様な操作で修正してください。
Q	上位のメニューに戻ります。	

4.7.6.g. In-Profileの作成(Create In-Profile Action Menu)

「In-Profile Action Configuration」の画面でコマンド「C」を選択すると図4-7-36のような「Create In-Profile Action Menu」の画面になります。この画面ではIn-Profileの作成を行います。

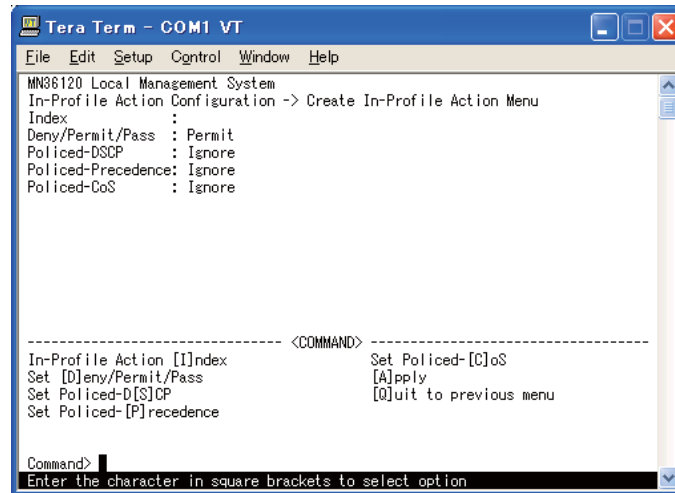


図4-7-36 In-Profileの作成

画面の説明

Index	In-profileのIndex番号を表示します。	
Deny/permit/pass	パケットの拒否/許可/通過を表示します。	
Action	Policed-dscp	DSCPをマーキングします。
	Policed-Precedence	Precedenceをマーキングします。
	Policed-CoS	CoSをマーキングします。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

I	In-ProfileのIndex番号を設定します。 「I」と入力すると、プロンプトが「Enter in-profile action index>」に変わりますので、Index番号を1-65535の範囲で入力してください。
D	パケットの拒否/許可/通過の設定をします。 「D」と入力するとプロンプトが、「Select Deny/Permit/Pass (1-3) >」に変わりますので、拒否する場合は「1」を、許可する場合は「2」を、通過させる場合は「3」を入力してください。
S	マーキングするDSCP値の設定をします 「S」と入力するとプロンプトが「Enter DSCP value>」と変わりますので、DSCP値を0-63の範囲で入力してください。
P	マーキングするPrecedence値の設定をします 「P」と入力するとプロンプトが「Enter ToS precedence value>」と変わりますので、precedence値を0-7の範囲で入力してください。
C	マーキングするCos値の設定をします 「C」と入力するとプロンプトが「Enter CoS value>」と変わりますので、Cos値を0-7の範囲で入力してください。
A	設定した内容を適用します。ここで適用しないと、設定した内容は有効になりません。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.6.h. No-Matchの設定(No-Match Action Configuration Menu)

「AccessControl Configuration Menu」の画面でコマンド「N」を選択すると図4-7-37のような「No-Match Action Configuration Menu」の画面になります。この画面ではNo-Matchの設定を行います。

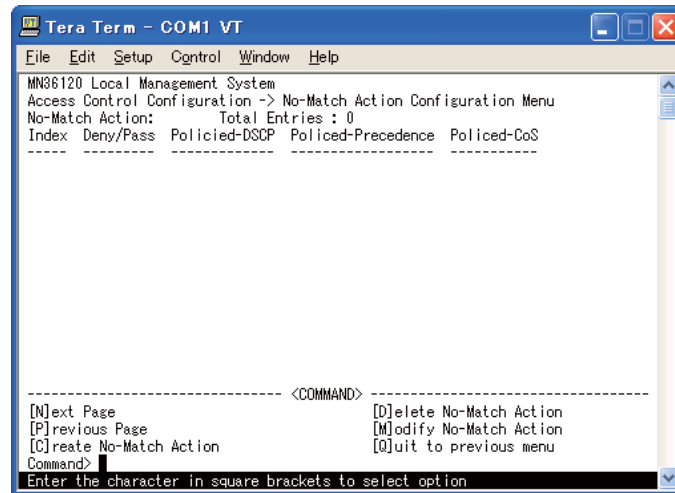


図4-7-37 No-Matchの設定

画面の説明

Total Entries	作成されているクラスの数(indexの数)を表示します。	
Index	No-MatchのIndex番号を表示します。	
Deny/pass	パケットの拒否/通過を表示します。	
Action	No-Matchにおける実行モードを表示します。	
	Policed-dscp	DSCPをマーキングします。
	Policed-Precedence	Precedenceをマーキングします。
	Policed-CoS	CoSをマーキングします。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

N	次のページを表示します。	
		「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。	
		「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
C	No-matchを作成します。	
	「C」と入力すると、「Create No-Match Action Menu」に変わりますので、4.7.6hを参照してください。	
	policed-dscp	DSCPをマーキングします。
	policed-precedence	Precedenceをマーキングします。
	policed-cos	CoSをマーキングします。
D	No-matchを削除します	
		「D」と入力するとプロンプトが「Please enter no-match action index>」と変わりますので、削除するNo-matchのIndex番号を入力してください。
M	No-matchを修正します。	
		「D」と入力するとプロンプトが「Enter no-match action index>」と変わりますので、修正するNo-matchのIndex番号を入力し、修正箇所をNo-matchの作成時と同様な操作で修正してください。
Q	上位のメニューに戻ります。	

4.7.6.i. No-Match Action Configuration Menuの作成

(No-Match Action Configuration Menu)

「No-Match Action Configuration」の画面でコマンド「N」を選択すると図4-7-38のような「Create No-Match Action Menu」の画面になります。この画面ではNo-Matchの作成を行います。

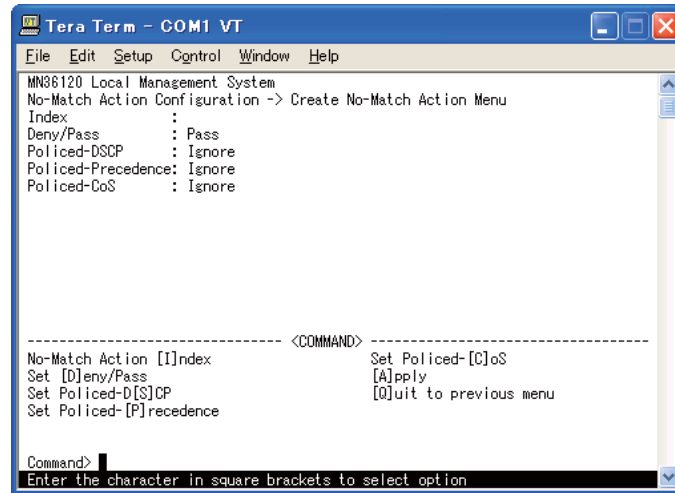


図4-7-38 No-Matchの作成

画面の説明

Index	In-profileのIndex番号を表示します。	
Deny/pass	パケットの拒否/通過を表示します。	
Action	Policed-dscp	DSCPをマーキングします。
	Policed-Precedence	Precedenceをマーキングします。
	Policed-CoS	CoSをマーキングします。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

I	In-ProfileのIndex番号を設定します。
	「I」と入力すると、プロンプトが「Enter in-profile action index>」に変わりますので、Index番号を1-65535の範囲で入力してください。
D	パケットの拒否/許可/通過の設定をします。
	「D」と入力するとプロンプトが、「Select Deny/Pass (1-2) >」に変わりますので、拒否する場合は「1」を、通過させる場合は「2」を入力してください。
S	マーキングするDSCP値の設定をします
	「S」と入力するとプロンプトが「Enter DSCP value>」と変わりますので、DSCP値を0-63の範囲で入力してください。
P	マーキングするPrecedence値の設定をします
	「P」と入力するとプロンプトが「Enter ToS precedence value>」と変わりますので、precedence値を0-7の範囲で入力してください。
C	マーキングするCos値の設定をします
	「C」と入力するとプロンプトが「Enter CoS value>」と変わりますので、Cos値を0-7の範囲で入力してください。
A	設定した内容を適用します。ここで適用しないと、設定した内容は有効になりません。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.6.j. Out-Profileの設定(Out-Profile Action Configuration Menu)

「AccessControl Configuration Menu」の画面でコマンド「0」を選択すると図4-7-39のような「Out-Profile Action Configuration Menu」の画面になります。この画面ではOut-Profileの設定を行います。

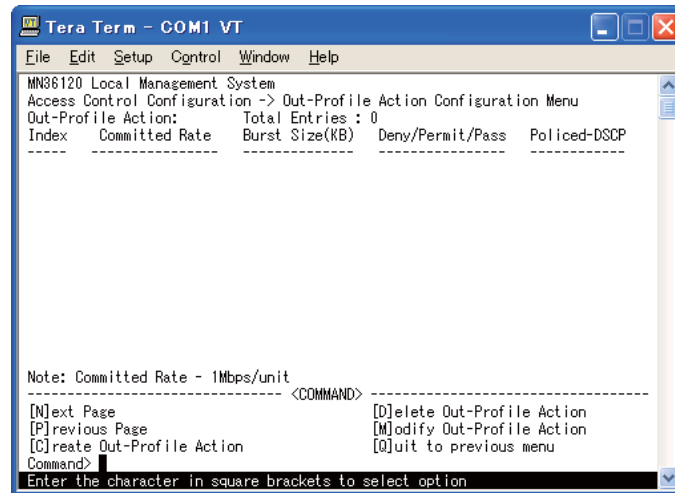


図4-7-39 Out-Profileの設定

画面の説明

Total Entries	作成されているクラスの数(indexの数)を表示します。	
Index	Out-ProfileのIndex番号を表示します。	
Committed Rate	Dataがバッファに入る速度を表示します。	
	1M(bps/unit)	コミットレートの保証サイズを表します。
Burst Size(KB)	コミットレートを超えて送ることができるトラフィックのバーストサイズを表示しています。Burst Sizeは16K, 20K, 32K, 44K, 76K, 140K, 268K, 524K中から使用します。	
Deny/permit/pass	パケットの拒否/許可/通過を表示します。	
Action	Out-Profileにおける実行モードを表示します。	
	Policed-dscp	DSCPをマーキングします。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
C	Out-Profileを作成します。
	「C」と入力すると、「Create Out-Profile Action Menu」に変わりますので、4.7.6iを参照してください。
D	Out-Profileを削除します
	「D」と入力するとプロンプトが「Please enter out-profile action Index>」と変わりますので、削除するOut-profileのIndex番号を入力してください。
M	Out-profileを修正します。
	「M」と入力するとプロンプトが「Enter out-profile action Index>」と変わりますので、修正するOut-profileのIndex番号を入力し、修正箇所をOut-profileの作成時と同様な操作で修正してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.6.k. Out-Profile Action Configuration Menuの作成

(Out-Profile Action Configuration Menu)

「Out-Profile Action Configuration」の画面でコマンド「C」を選択すると図4-7-40のような「Create Out-Profile Action Menu」の画面になります。この画面ではOut-Profileの作成を行います。

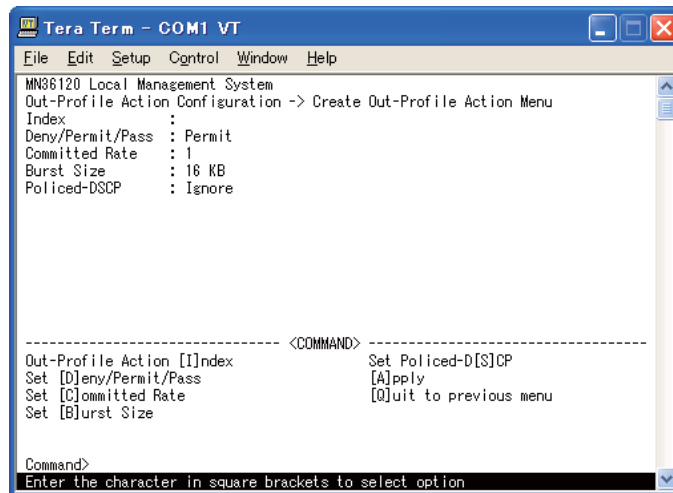


図4-7-40 Out-Profileの作成

画面の説明

Index	Out-ProfileのIndex番号を表示します。	
Committed Rate	Dataがバッファに入る速度を表示します。	
	1M(bps/unit)	コミットレートの保証サイズを表します。
Burst Size(KB)	コミットレートを超えて送ることができるトラフィックのバーストサイズを表示しています。Burst Sizeは16K, 20K, 32K, 44K, 76K, 140K, 268K, 524K中から使用します。	
Deny/permit/pass	パケットの拒否/許可/通過を表示します。	
Action	Out-Profileにおける実行モードを表示します。	
	Policed-dscp	DSCPをマーキングします。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

I	Out-ProfileのIndex番号を設定します。
	「I」と入力すると、プロンプトが「Enter Out-Profile action index>」に変わりますので、Index番号を1-65535の範囲で入力してください。
D	パケットの拒否/許可/通過の設定をします。
	「D」と入力するとプロンプトが、「Select Deny/Pass (1-2) >」に変わりますので、拒否する場合は「1」を、通過させる場合は「2」を入力してください。
C	コミットレートの設定をします。
	「C」と入力するとプロンプトが、「Enter committed rate>」に変わりますので、コミットレートを1-1023の範囲で入力してください。
B	バーストサイズの設定をします。
	「B」と入力するとプロンプトが、「Select burst size (1-8)>」に変わりますので、コミットレートを超えて送ることができるトラフィックのバーストサイズを16Kの場合は「1」を、20Kの場合は「2」を、32Kの場合は「3」を、44Kの場合は「4」を、76Kの場合は「5」、140Kの場合は「6」を、268Kの場合は「7」を、524Kの場合は「8」を入力してください。
S	マーキングするDSCP値の設定をします
	「S」と入力するとプロンプトが「Enter DSCP value>」と変わりますので、DSCP値を0-63の範囲で入力してください。
A	設定した内容を適用します。ここで適用しないと、設定した内容は有効になりません。
Q	上位のメニューに戻ります。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
C	ポートリストを作成します。
	「C」と入力するとプロンプトが「Enter port list index>」と変わりますので、実行するIndex番号を入力してください。入力後「Enter port list number e.g.: 1, 3, 5-12>」と変わりますので、ポートリストに設定するポート番号を入力してください。
D	ポートリストを削除します
	「D」と入力するとプロンプトが「Please enter index >」と変わりますので、削除するポートリストのIndex番号を入力してください。
M	ポートリストを修正します。
	「M」と入力するとプロンプトが「Enter port list index>」と変わりますので、修正するポートリストのIndex番号を入力し、修正箇所をポートリストの作成時と同様な操作で修正してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.6.m. Policyの設定(Policy Configuration Menu)

「Access Control Configuration Menu」の画面でコマンド「P」を選択すると図4-7-42のような「Policy Configuration Menu」の画面になります。この画面ではClassifier, In-Profile Action, No-Match Action, Out-Profile Action, Port Listの相互性を確立するPolicyの設定を行います。

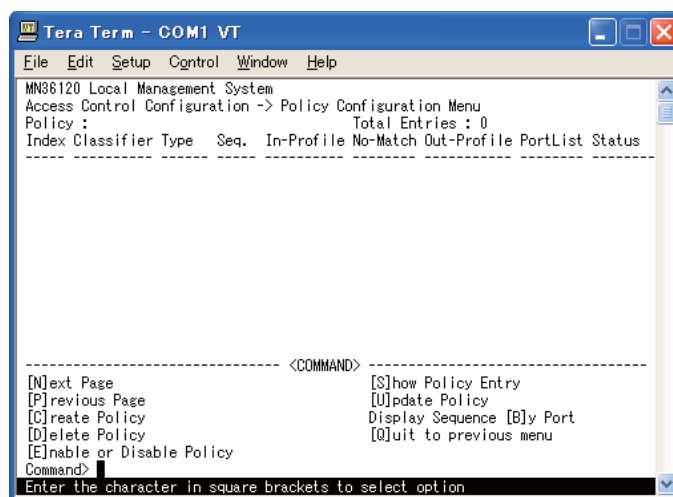


図4-7-42 Policyの設定

画面の説明

Total Entries	作成されているクラスの数(indexの数)を表示します。
Index	ポリシーのIndex番号を表示します。
Classifier	Classifier Configuration Menuで作成したクラスのIndex番号が適応していることを示します。
Type	タイプを表示します。
Seq.	シーケンス番号を表示します。
In-profile	In-Profile Action Configuration Menuで作成したIn-profileのIndex番号が適応していることを示します。
No-match	No-match Action Configuration Menuで作成したNo-match のIndex番号が適応していることを示します。
Out-profile	Out-Profile Action Configuration Menuで作成したOut-profileのIndex番号が適応していることを示します。
Port List	Port List Configuration Menuで作成したPort listのIndex番号が適応していることを示します。
Status	状態を表示します。Enable/Disableで表示します。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

N	次のページを表示します。	
		「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。	
		「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
C	policyを作成します。	
		「C」と入力すると「Create Policy Configuration Menu」の画面になります。「Create Policy Configuration Menu」に関しては、次ページで説明します。
D	policyを削除します	
		「D」と入力するとプロンプトが「Please enter a Policy index >」と変わりますので、削除するPolicyのIndex番号を入力してください。
E	Policyを有効/無効にします。	
		「E」と入力するとプロンプトが「Please select policy index>」と変わりますので、有効/無効にするPolicyのIndex番号を入力してください。入力後「Enable or disable policy Entries >」と変わりますので、有効にする場合は「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
	Enable	Policyが有効にします。
	Disable	Policyが無効にします。
S	Policyの情報を表示します。	
		「S」と入力するとPolicyとClassifier, In-Profile Action, No-Match Action, Out-Profile Action, Port Listの相互性を確認でき、各々の詳細な情報を表示します。
U	Policyのアップデートを行います。	
		「U」と入力するとプロンプトが「Enter policy index >」と変わりますので、アップデートするIndex番号を入力してください。入力後Policy作成時と同様の操作をしてください。またEnableの状態ではアップデートはできないことに注意してください。Enableの場合Disableの状態にしてからアップデートを行ってください。
B	ポート毎にシーケンスを表示します。	
		「B」と入力するとプロンプトが「Enter port number >」と変わりますので、表示するポート番号を入力してください。入力後「Policy index or policy sequence (I/P) >」に変わりますので、policy indexに対応するpolicy sequenceを見る場合は「I」を、policy sequenceに対応するpolicy index sequenceを見る場合は「P」を、入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。	

4.7.6.n. Policyの作成の設定(Create Policy Configuration Menu)

「Policy Configuration Menu」の画面でコマンド「C」を選択すると図4-7-43のような「Create Policy Configuration Menu」の画面になります。この画面ではPolicyの作成を行います。

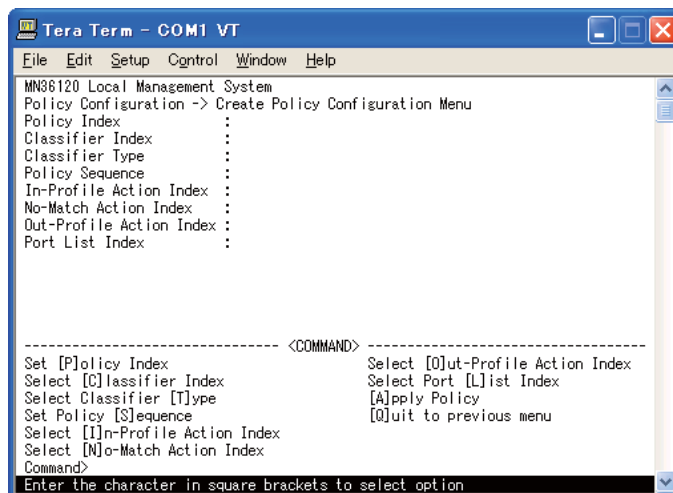


図4-7-43 Policyの作成

画面の説明

Policy Index	ポリシーのIndex番号を表示します。
Classifier Index	Classifier Configuration Menuで作成したクラスが適応するIndex番号を示します。
Classifier type	クラスのタイプを表示します。
Policy Sequence	シーケンス番号を表示します。
In-profile Index	In-Profile Action Configuration Menuで作成したIn-profileが適応するIndex番号を示します。
No-match Index	No-match Action Configuration Menuで作成したNo-match が適応するIndex番号を示します。
Out-profile Index	Out-Profile Action Configuration Menuで作成したOut-profileが適応するIndex番号を示します。
Port List Index	Port List Configuration Menuで作成したPort listが適応するIndex番号を示します。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

P	ポリシーのIndex番号を設定します。 「P」と入力するとプロンプトが「Enter policy index>」に変わりますので、ポリシーのIndex番号を入力してください。
C	適応させるClassifierのIndex番号を設定します。 「C」と入力するとプロンプトが「Enter classifier index>」に変わりますので、適応させるClassifierのIndex番号を入力してください。
T	Classifierのタイプを設定します。 「T」と入力するとプロンプトが「Select classifier type (S/G) >」に変わりますので、クラスの場合は「S」を、クラスグループの場合は「G」を入力してください。
S	シーケンス番号を設定します。 「S」と入力するとプロンプトが「Enter policy sequence>」に変わりますので、シーケンス番号を入力してください。
I	適応させるIn-ProfileのIndex番号を設定します。 「I」と入力するとプロンプトが「Enter in-profile index>」に変わりますので、適応させるIn-ProfileのIndex番号を入力してください。
N	適応させるNo-MatchのIndex番号を設定します。 「C」と入力するとプロンプトが「Enter no-match index>」に変わりますので、適応させるNo-MatchのIndex番号を入力してください。
O	適応させるOut-ProfileのIndex番号を設定します。 「C」と入力するとプロンプトが「Enter out-profile index>」に変わりますので、適応させるOut-ProfileのIndex番号を入力してください。
L	適応させるPort ListのIndex番号を設定します。 「C」と入力するとプロンプトが「Enter port list index>」に変わりますので、適応させるPort listのIndex番号を入力してください。
A	設定した内容を適用します。ここで適用しないと、設定した内容は有効になりません。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.7. 帯域幅の制御設定(Egress Rate Limiting Configuration Menu)

「Quality of Service Configuration Menu」の画面でコマンド「C」を選択すると図4-7-40のような「Egress Rate Limiting Configuration Menu」の画面になります。この画面では帯域幅の制御設定を行います。

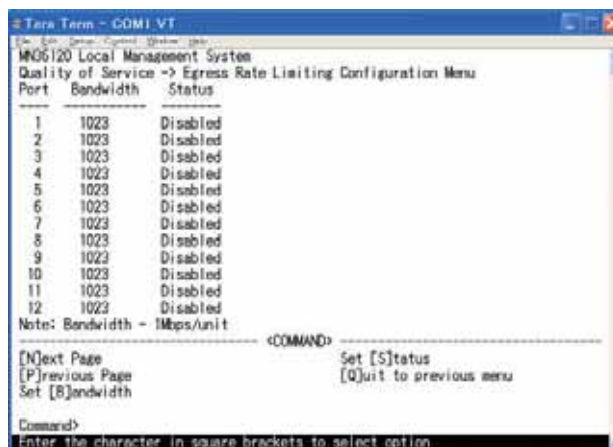


図4-7-40 帯域幅の制御設定

画面の説明

Port	ポート番号を表します。	
Bandwidth	帯域幅を表します。デフォルトでは1023です。単位は(Mbps)です。	
Status:	帯域幅の制御設定を有効/無効を表します。	
	Enabled	帯域幅の制御設定は有効です。
	Disabled	帯域幅の制御設定は無効です。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
B	帯域幅を設定します。
	「B」と入力するとプロンプトが「Enter port number e.g. : 1, 3, 5-12>」に変わりますので、指定するポート番号を入力してください。入力後、「Enter bandwidth >」に替わりますので、帯域幅を1~1023の間で入力してください。
S	帯域幅の制御設定を設定します。
	「S」と入力するとプロンプトが「Enter port number e.g. : 1, 3, 5-12>」に変わりますので、指定するポート番号を入力してください。入力後、「Enable or disable >」に替わりますので、帯域幅の制御設定を有効にする場合は「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.8. ストームコントロール設定(Storm Control Configuration Menu)

「Advanced Switch Configuration Menu」でコマンド「o」を選択すると、図4-7-41のような「Storm Control Configuration Menu」の画面になります。Unknown unicast、Broadcast、Multicastの各ストームコントロールの設定を行います。

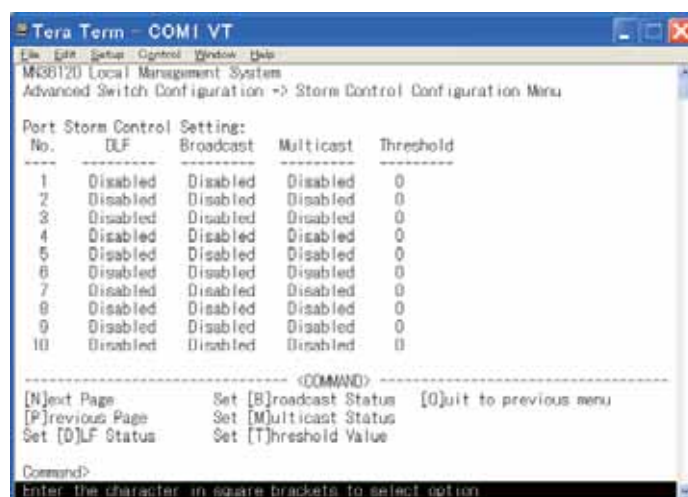


図4-7-41 ストームコントロールの設定

画面の説明

DLF:	Unknown unicastのストームコントロールを有効・無効にします。	
	Enabled	Unknown unicastのストームコントロールが有効です。
	Disabled	Unknown unicastのストームコントロールが無効です。(工場出荷時設定)
Broadcast:	Broadcastのストームコントロールを有効・無効にします。	
	Enabled	Broadcastのストームコントロールが有効です。
	Disabled	Broadcastのストームコントロールが無効です。(工場出荷時設定)
Multicast:	Multicastのストームコントロールを有効・無効にします。	
	Enabled	Multicastのストームコントロールが有効です。
	Disabled	Multicastのストームコントロールが無効です。(工場出荷時設定)
Threshold:	設定されているストームコントロールの閾値をパケット数(Packet Per Second)で表示します。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

D	Unknown unicastのストームコントロールを有効・無効に設定します。 「D」と入力するとプロンプトが「Enable or Disable DLF storm control status (E/D)>」と替わりますので、Unknown unicastを有効にする場合は「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
B	Broadcast Stormのストームコントロールを有効・無効に設定します。 「B」と入力するとプロンプトが「Enable or Disable broadcast storm control status (E/D)>」と替わりますので、Broadcastを有効にする場合は、「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
M	Multicast Stormのストームコントロールを有効・無効に設定します。 「M」と入力するとプロンプトが「Enable or Disable multicast storm control status (E/D)>」と替わりますので、Multicastを有効にする場合は、「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
T	パケット数(Packet Per Second)の閾値を設定します。 「T」と入力するとプロンプトが「Enter threshold value>」と替わりますので、パケット数(Packet Per Second)の閾値を1~262143の間で入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.9. 802.1x認証機能の設定(802.1x Access Control Configuration)

「Advanced Switch Configuration Menu」でコマンド「x」を選択すると、**図4-7-42**のような「802.1X Access Control Configuration」の画面になります。この画面ではIEEE802.1x準拠の認証機能についての設定を行うことができます。

認証方式はEAP-MD5/TLS/PEAPをサポートしています。

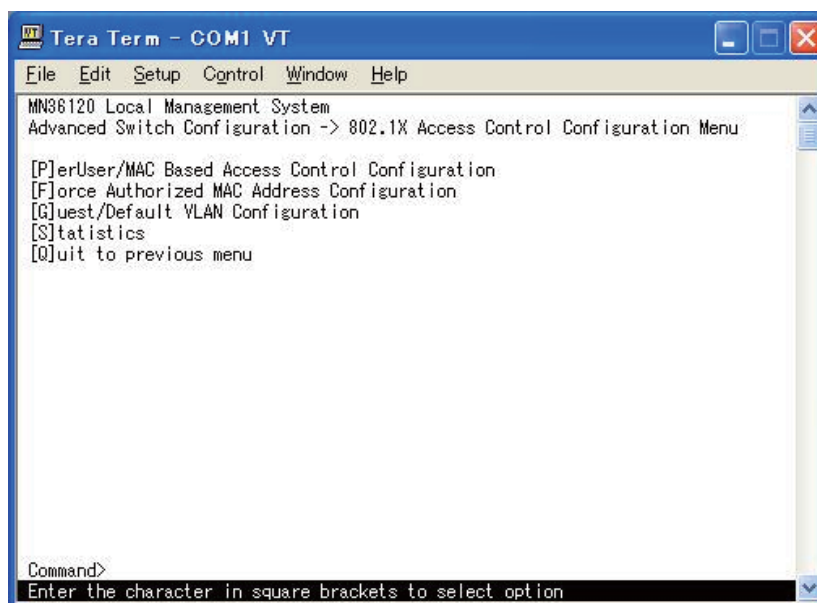


図4-7-42 802.1x認証機能

追加機能：

1. Dynamic VLAN機能
2. Guest Access機能
3. Force Authorized MAC Address機能
4. 802.1x統計情報表示機能

削除機能：

1. Special Security for MAC Based機能
※Guest Access機能で代替
-

4.7.9.a. 802.1xポートベース認証機能の設定

(802.1x Access Control Configuration)

「802.1x Access Control Configuration Menu」でコマンド「p」を選択すると、**図4-7-43**のような「802.1x Port Base Access Control Configuration」の画面になります。この画面ではIEEE802.1x準拠のポートベース認証機能についての設定を行うことができます。

認証方式はEAP-MD5/TLS/PEAPをサポートしています。

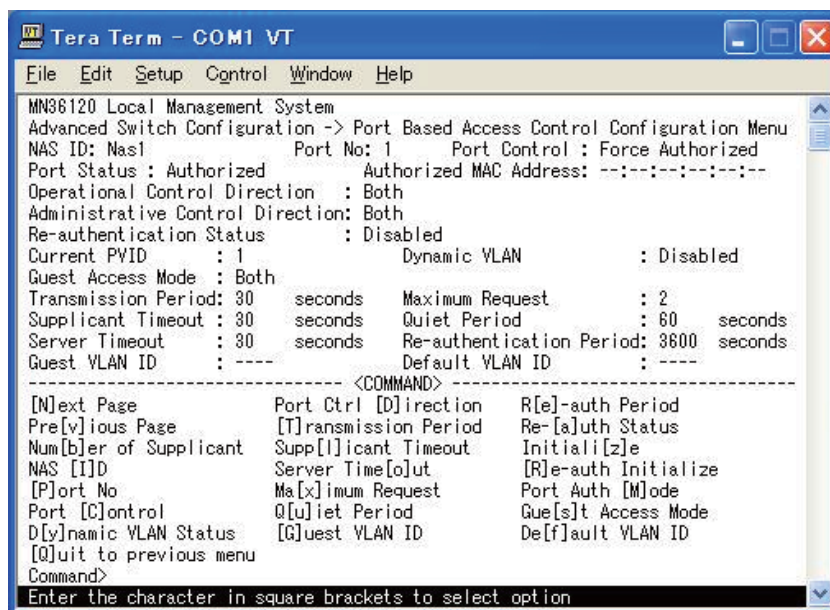


図4-7-43 802.1xポートベース認証機能の設定

画面の説明	NAS ID	認証ID (NAS Identifier)を表示します。
Port No		ポートの番号を表示します。
Port Control		認証要求の際の動作を表示します。
	Auto	認証機能を有効とし、クライアントと認証サーバ間の認証プロセスのリレーを行います。
	Force Unauthorized	認証機能を無効とし、クライアントからの認証要求をすべて無視します。
Port Status	Force Authorized	認証機能を無効とし、認証許可なしでポートを通信可能とします。(出荷時設定)
		認証の状態を表示します。下記のPort Control設定を反映します。
	Unauthorized	認証が不許可の状態です。
Authorized MAC Address	Authorized	認証が許可の状態です。
		認証に成功している端末、またはGuest Accessを使用している端末のMACアドレスを表示します。何も使用されていない場合は、---:---:---:---:---:---と表示します。
Operational Control Direction		認証要求時の動作状況を表示します。(下記のAdministrative Control Directionによる設定を反映します。)
	Both	認証されていない状態では、本装置は対象のポートからのパケットの送受信を行いません。
	In	認証されていない状態では、本装置は対象のポートからのパケットの受信を行いません。

Administrative Control Direction	認証要求時の動作方法を表示します。	
	Both	認証されていない状態では、本装置は対象のポートからのパケットの送受信を行いません。
	In	認証されていない状態では、本装置は対象のポートからのパケットの受信を行いません。
Current PVID	現在適用されているPVIDを表示します。	
Dynamic VLAN	Dynamic VLANの動作状況を表示します。	
	Disabled	Dynamic VLAN機能が無効の状態です。
	<VLAN ID>	Dyanmic VLAN機能を有効とし、動作しているVLAN IDを表示します。
Guest Access Mode	Guest Accessへの適用条件を表示します。	
	Timeout	Supplicant Timeoutが発生した際にGuest Accessを適用します。
	Auth Fail	認証に失敗した際にGuest Accessを適用します。
	Both	TimeoutとAuth Failのどちらかの条件に一致した際にGuest Accessを適用します。
Transmission Period	クライアントへ認証の再送信要求までの間隔です。出荷時は30秒に設定されています。	
Supplicant Timeout	クライアントのタイムアウト時間を表します。出荷時は30秒に設定されています。	
Server Timeout	認証サーバのタイムアウト時間を表します。出荷時は30秒に設定されています。	
Maximum Request	認証の最大再送信試行回数です。出荷時は2回に設定されています。	
Quiet Period	認証が失敗した際、次の認証要求を行うまでの時間です。出荷時は60秒に設定されています。	
Re-authentication Period	定期的再認証の試行間隔です。出荷時は3600秒に設定されています。	
Re-authentication Status	定期的再認証の有効・無効を表示します。	
	Enabled	定期的再認証を行います。
	Disabled	定期的再認証を行いません。(出荷時設定)
Guest VLAN ID	Guest Access時に適用されるVLAN IDを表示します。また、Guest Accessが無効のときは----と表示します。	
Default VLAN ID	Port ControlをAutoからForce Authorized、またはForce Unauthorizedに変更した際に適用されるVLAN IDを表示します。また、Dynamic VLANが有効で認証に成功したが、認証サーバからVLAN情報が得られなかった場合にもDefault VLAN IDが適用されます。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	Port Basedモードでは使用しません。
V	Port Basedモードでは使用しません。
B	Port Basedモードでは使用しません。
I	NAS IDを設定します。
	「I」を入力するとプロンプトが「Enter NAS ID>」に替わりますので、半角16文字以内で入力してください。
P	ポート番号を設定します。
	「P」を入力するとプロンプトが「Enter port number>」に替わりますので、設定を行うポート番号を入力してください。
C	認証要求の際の動作を設定します。
	「C」を入力するとプロンプトが「Select authenticator port control ?(A/U/F)>」に替わりますので、Autoの場合は「A」、Force Unauthorizedの場合は「U」、Force Authorizedの場合は「F」を入力してください。Default VLANが無効の場合にAutoに設定すると、Current PVIDの値がDefault VLAN IDに自動的に設定されます。
Y	Dynamic VLAN機能を有効・無効に設定します。
	「Y」を入力するとプロンプトが「Enable or Disable dynamic VLAN status? (E/D) >」に替わりますので、Dynamic VLAN機能を有効にする場合は、「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。

D	認証されていない状態での通信条件を設定します。
	「D」を入力するとプロンプトが「Select Administrative Control Direction, Both or IN? (B/I)>」に替わりますので、本装置にパケットの送受信を行なわせたくない場合は「B」を、本装置にパケットを受信させたくない場合は「I」を入力してください。
T	認証の再送信要求までの間隔を設定します。
	「T」を入力するとプロンプトが「Enter Transmission Period>」に替わりますので、1から65535(秒)の整数を入力してください。
L	クライアントのタイムアウト時間を設定します。
	「L」を入力するとプロンプトが「Enter Supplicant Timeout value>」に替わりますので、1から65535(秒)の整数を入力してください。
O	認証サーバのタイムアウト時間を設定します。
	「O」を入力するとプロンプトが「Enter Server Timeout>」に替わりますので、1から65535(秒)の整数を入力してください。
X	認証の最大再送信試行回数を設定します。
	「X」を入力するとプロンプトが「Enter Max request count>」に替わりますので、再試行回数を1から10(回)の整数を入力してください。
U	認証が失敗した際の待機時間を設定します。
	「U」を入力するとプロンプトが「Enter Quiet Period>」に替わりますので、1から65535(秒)の整数を入力してください。
G	認証に失敗した端末やサブリカントを持っていない端末が接続されたときに割当てるVLANを指定します。
	「G」を入力するとプロンプトが「Enter guest VLAN ID >」に替わりますので、1から4094の整数を入力してください。また、0を入力した際はGuest Access機能が無効となります。
E	定期的再認証の試行間隔を設定します。
	「E」を入力するとプロンプトが「Enter re-authentication Period>」に替わりますので、1から65535(秒)の整数を入力してください。
A	定期的再認証の有効・無効を設定します。
	「A」を入力するとプロンプトが「Enable or Disable re-authentication?(E/D)>」に替わりますので、有効にする場合は「E」、無効にする場合は「D」を入力してください。
Z	認証状態を初期化します。
	「Z」を入力するとプロンプトが「Would you initialize authenticator?(Y/N)>」に替わりますので、初期化する場合は「Y」、しない場合は「N」を入力してください。
R	再認証の状態を初期化します。
	「R」を入力するとプロンプトが「Would you want to initialize re-authenticator?(Y/N)>」に替わりますので、初期化する場合は「Y」、しない場合は「N」を入力してください。
M	MACベース認証メニューに移ります。
	プロンプトが「Select the Port based or MAC based auth mode (P/M) >」に替わりますので、「M」を選択してください。「MAC Based Access Control Configuration Menu」の画面になります。
S	Guest Accessへの適用条件を設定します。
	「S」を入力するとプロンプトが「Select the guest access mode (T/B/A) >」に替わりますので、Supplicant Timeoutの場合は「T」、Auth Failの場合は「A」、両方の場合は「B」を入力してください。
F	Default VLAN IDを設定します。
	「F」を入力するとプロンプトが「Enter default VLAN ID >」に替わりますので、1から4094の整数を入力してください。また、0を入力した際はDefault VLAN機能が無効となります。
Q	上位のメニューに戻ります。

ご注意 : 弊社スイッチは、RADIUSサーバからのRADIUSパケットに含まれる、
Attribute 81 : Tunnel Private Group Idの値を参照してVLAN IDを割当てます。

4.7.9.b. 802.1xMACベース認証機能の設定

(802.1x MAC Base Access Control Configuration)

「802.1x Port Base Access Control Configuration」でコマンド「M」を選択すると、プロンプトが「Select the Port based or MAC based auth mode (P/M) >」に変わりますので、「M」を選択してください。図4-7-44のような「MAC Based Access Control Configuration Menu」の画面になります。この画面ではIEEE802.1x準拠のMACベース認証機能についての設定を行うことができます。認証方式はEAP-MD5/TLS/PEAPをサポートしています。

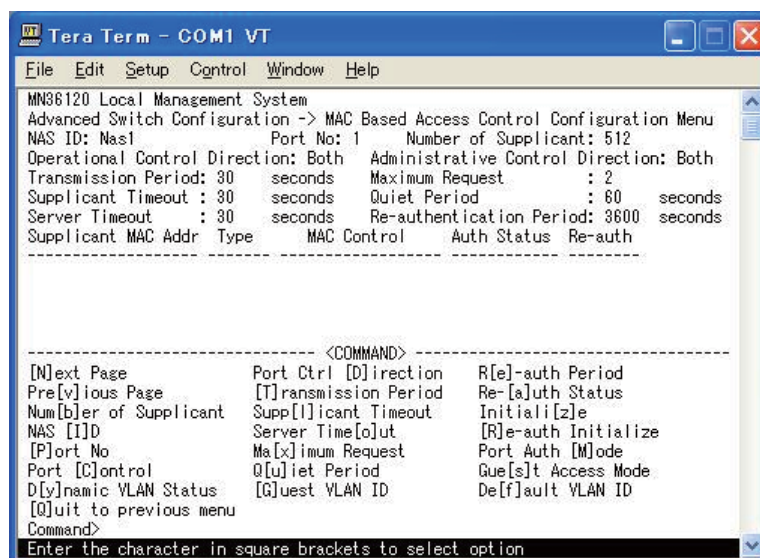


図4-7-44 802.1xMACベース認証機能の設定

画面の説明

NAS ID	認証ID(NAS Identifier)を表示します。	
Port No	ポートの番号を表示します。	
Number of Supplicant	ポートに認証できるSupplicantの数を表示します。出荷時は512に設定されています。	
Transmission Period	クライアントへの認証の再送信要求までの間隔です。出荷時は30秒に設定されています。	
Supplicant Timeout	クライアントのタイムアウト時間を表します。出荷時は30秒に設定されています。	
Server Timeout	認証サーバのタイムアウト時間を表します。出荷時は30秒に設定されています。	
Maximum Request	認証の最大再送信試行回数です。出荷時は2回に設定されています。	
Quiet Period	認証が失敗した際、次の認証要求を行うまでの時間です。出荷時は60秒に設定されています。	
Re-authentication Period	定期的再認証の試行間隔です。出荷時は3600秒に設定されています。	
Supplicant MAC Addr	認証に成功している端末のMACアドレスを表示します。また、Force Authorized MAC Addressで登録されている端末が通信している場合、そのMACアドレスを表示します。	
Type	認証のTypeを表示します。	
	Dynamic	802.1x認証により、認証に成功した端末を意味します。
	Static	Force Authorized MAC Address Configurationで設定した端末を意味します。

MAC Control	認証要求の際の動作を設定します。	
	Auto	認証機能を有効とし、クライアントと認証サーバ間の認証プロセスのリレーを行います。
	Force Unauthorized	認証機能を無効とし、クライアントからの認証要求をすべて無視します。
	Force Authorized	認証機能を無効とし、認証許可なしでポートを通信可能とします。(出荷時設定)
Auth Status	認証の状態を表示します。	
	Unauthorized	認証が不許可の状態です
	Authorized	認証が許可の状態です
Re-auth	定期的再認証の有効・無効を表示します。	
	Enabled	定期的再認証を行います。
	Disabled	定期的再認証を行いません。(出荷時設定)

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」を入力すると表示が次のページに切り替わります。
V	前のページを表示します。
	「V」を入力すると表示が前のページに切り替わります。
B	ポートに認証できる端末の数を設定します。
	「B」を入力するとプロンプトが「Enter the number of supplicant >」に替わりますので、1から512の整数を入力してください。
I	NAS IDを設定します。
	「I」を入力するとプロンプトが「Enter NAS ID>」に替わりますので、半角16文字以内で入力してください。
P	ポート番号を設定します。
	「P」を入力するとプロンプトが「Enter port number>」に替わりますので、設定を行うポート番号を入力してください。
C	認証要求の際の動作を設定します。
	「D」を入力するとプロンプトが「Select Administrative Control Direction, Both or IN? (B/I)>」に替わりますので、本装置にパケットの送受信を行なわせたくない場合は「B」を、本装置にパケットを受信させたくない場合は「I」を入力してください。
Y	MAC Basedモードでは使用しません。
D	認証されていない状態での通信条件を設定します。
	「D」を入力するとプロンプトが「Select Administrative Control Direction, Both or IN? (B/I)>」に替わりますので、本装置とのパケット送受信をともに認証要求を行う場合は「B」を、本装置からのパケット送出にのみ認証要求を行う場合は「I」を入力してください。
T	認証の再送信要求までの間隔を設定します。
	「T」を入力するとプロンプトが「Enter Transmission Period>」に替わりますので、1から65535(秒)の整数を入力してください。
L	クライアントのタイムアウト時間を設定します。
	「L」を入力するとプロンプトが「Enter Supplicant Timeout value>」に替わりますので、1から65535(秒)の整数を入力してください。
O	認証サーバのタイムアウト時間を設定します。
	「O」を入力するとプロンプトが「Enter Server Timeout>」に替わりますので、1から65535(秒)の整数を入力してください。
X	認証の最大再送信試行回数を設定します。
	「X」を入力するとプロンプトが「Enter Max request count>」に替わりますので、再試行回数を1から10(回)の整数を入力してください。

U	認証が失敗した際の待機時間を設定します。
	「U」を入力するとプロンプトが「Enter Quiet Period>」に替わりますので、1から65535(秒)の整数を入力してください。
G	MAC Basedモードでは使用しません。
E	定期的再認証の試行間隔を設定します。
	「E」を入力するとプロンプトが「Enter re-authentication Period>」に替わりますので、1から65535(秒)の整数を入力してください。
A	定期的再認証の有効・無効を設定します。
	「A」を入力するとプロンプトが「Enter supplicant MAC address >」に替わりますので、設定を行ないたいサブリカントのMACアドレスを入力してください。するとプロンプトが「Enable or Disable re-authentication?(E/D)>」に替わりますので、有効にする場合は「E」、無効にする場合は「D」を入力してください。
Z	認証状態を初期化します。
	「Z」を入力するとプロンプトが「Enter supplicant MAC address >」に替わりますので、初期化を行ないたいサブリカントのMACアドレスを入力してください。するとプロンプトが「Initialize MAC **:~::~~::~~::~~::~~::~ (Y/N) >」に替わりますので、初期化する場合は「Y」、しない場合は「N」を入力してください。
R	再認証の状態を初期化します。
	「R」を入力するとプロンプトが「Enter supplicant MAC address >」に替わりますので、初期化を行ないたいサブリカントのMACアドレスを入力してください。するとプロンプトが「Would you want to initialize re-authenticator?(Y/N)>」に替わりますので、初期化する場合は「Y」、しない場合は「N」を入力してください。
M	ポートベース認証メニューに移ります。
	プロンプトが「Select the Port based or MAC based auth mode (P/M) >」に替わりますので、「P」を選択してください。「Port Based Access Control Configuration Menu」の画面になります。
S	MAC Basedモードでは使用しません。
F	MAC Basedモードでは使用しません。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.9.c. Force Authorized MAC Addressの設定

(Force Authorized MAC Configuration Menu)

「802.1x Access Control Configuration」でコマンド「F」を選択すると、**図4-7-45**のような「Force Authorized MAC Configuration Menu」の画面になります。この画面ではIEEE802.1xによる認証なしに許可/不許可する機器のMACアドレスを設定することができます。

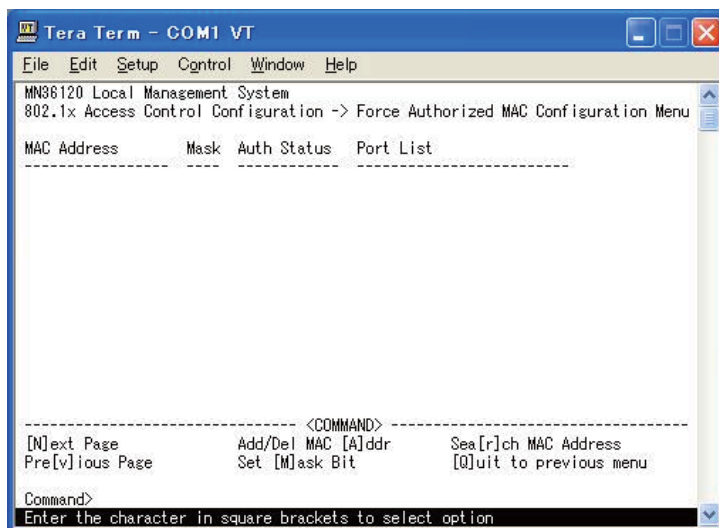


図4-7-45 Force Authorized MAC Addressの設定

画面の説明

MAC Address	認証なしにアクセスを許可/不許可する端末のMACアドレスを表示する。	
Mask	指定されているMACアドレスのマスクを表示する。	
Auth Status	Force Unauthorized	認証機能が無効とし、クライアントからの認証要求をすべて無視します。
	Force Authorized	認証機能が無効とし、認証許可なしでポートを通信可能とします。 (出荷時設定)
Port List	登録したMACアドレスが適用されているポートを表示する。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
V	前のページを表示します。
	「V」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
A	認証なしにアクセスを許可/不許可する端末のMACアドレスの追加と削除を行ないます。
	「A」と入力するとプロンプトが「Add or Delete MAC address (A/D)>」に替わりますので、認証なしにアクセスを許可/不許可する端末を登録する場合は「A」、削除する場合は「D」を入力してください。登録するために「A」を入力するとプロンプトが「Enter MAC Address (xx:xx:xx:xx:xx:xx) >」と替わりますので、MACアドレスを入力してください。するとプロンプトが「Enter mask length>」と替わりますので、マスクを指定してください。するとプロンプトが「Select auth status (A/U) >」と替わりますので、許可する場合は「A」、許可しない場合は「U」を選択してください。するとプロンプトが「Enter port number>」と替わりますので、適用するポートを指定してください。また、削除するために「D」を入力すると「Enter MAC Address (xx:xx:xx:xx:xx:xx) >」と替わりますので、MACアドレスを入力してください。
M	登録されているMACアドレスのMaskを変更します。
	「M」と入力するとプロンプトが「Enter MAC Address (xx:xx:xx:xx:xx:xx) >」に替わりますので、変更したいMACアドレスを入力してください。するとプロンプトが「Enter mask length>」に替わりますのでマスクを指定してください。
R	登録したMACアドレスを検索します。
	「R」と入力するとプロンプトが「Enter MAC Address (xx:xx:xx:xx:xx:xx) >」と替わりますので、検索したいMACアドレスを入力して下さい。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.9.d. Guest/Default VLANの設定(Guest/Default VLAN Configuration Menu)

「802.1x Access Control Configuration」でコマンド「G」を選択すると、図4-7-46のような「Guest/Default VLAN Configuration Menu」の画面になります。この画面ではGuest AccessとDefault VLANの設定を行なうことができます。Guest Accessとは認証に失敗した端末、またはサブリカントタイムアウトが発生した端末を特定のVLANに割り当てる機能のことです。Default VLANとは、Port ControlをAutoからForce Authorized、またはForce Unauthorizedに変更した際に割り当てるVLANを意味しています。

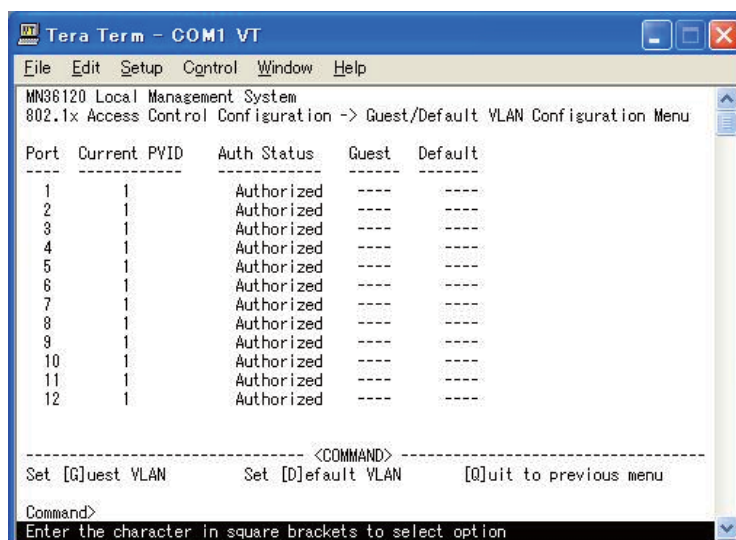


図4-7-46 Guest/Default VLANの設定

画面の説明

Current PVID	現在ポートに適用されているPVIDを表示する。	
Auth Status	認証の状態を表示します。	
	Unauthorized	認証が不許可の状態です
	Authorized	認証が許可の状態です
Guest	Guest Access時に適用されるVLAN IDを表示します。また、Guest Accessが無効のときは----と表示します。	
Default	Port ControlをAutoからForce Authorized、またはForce Unauthorizedに変更した際に適用されるVLAN IDを表示します。また、Dynamic VLANが有効で認証に成功したが、認証サーバからVLAN情報が得られなかった場合にもDefault VLAN IDが適用されます。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
V	前のページを表示します。
	「V」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
G	認証に失敗した端末やサブリカントを持っていない端末が接続されたときに割り当てるVLANを指定します。
	「G」を入力するとプロンプトが「Enter port number>」に替わりますので、設定を行うポートを入力してください。するとプロンプトが「Enter guest VLAN ID >」に替わりますので、1から4094の整数を入力してください。また、0を入力した際はGuest Access機能が無効となります。
D	Default VLAN IDを設定します。
	「D」を入力するとプロンプトが「Enter port number>」に替わりますので、設定を行うポートを入力してください。するとプロンプトが「Enter default VLAN ID >」に替わりますので、1から4094の整数を入力してください。また、0を入力した際はDefault VLAN機能が無効となります。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.9.e. 802.1x統計情報の表示

「802.1x Access Control Configuration」でコマンド「s」を選択すると図4-7-47のような「Statistics Menu」の画面になります。この画面ではスイッチの統計情報として、802.1xの packets 数を監視することができ、これによってネットワークの状態を把握することができます。また、エラー packets を監視することにより障害の切り分けの手助けになります。

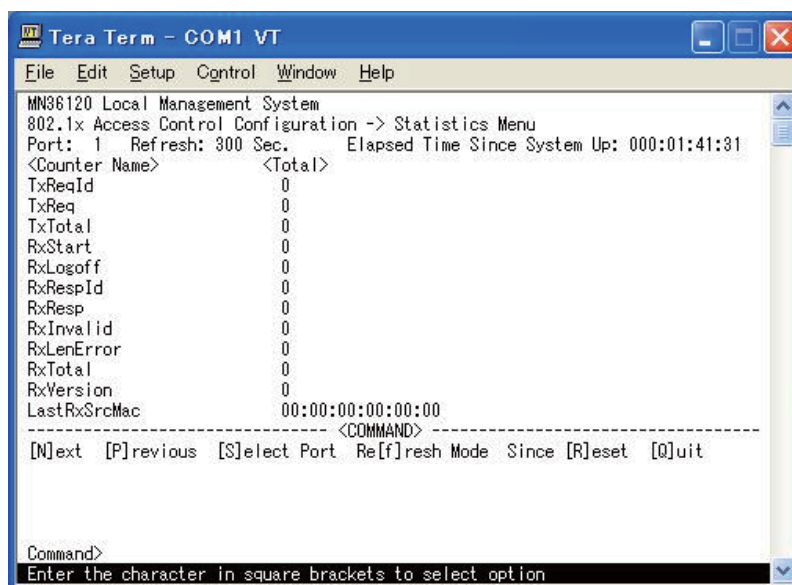


図4-7-47 802.1x統計情報の表示

画面の説明

Port	ポート番号を表します。
Refresh	更新間隔を表します。
Elapsed Time Since System Up	現在のカウンタの値が累積されている時間を表示します。起動または再起動からの時間を意味します。
Counter Name	各カウンタの名前を表示します。
Total	カウンタに累積された値を表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	値を表示するポートを切り替えます 「S」と入力するとプロンプトが「Select Port number>」と変わりますので表示したいポート番号を入力してください。
N	次のポートの値を表示します。 「N」と入力すると次のポートのカウンタを表示します。ポート26まで行くと次(ポート1)には移動しません。
P	前のポートの値を表示します。 「P」と入力すると前のポートのカウンタを表示します。ポート1では前のポートには戻れません。
R	カウンタの値をリセットしてからの値の表示に切り替えます。 「R」と入力すると、すぐにカウンタの値をresetしてからの値の表示に切り替わります。画面右上の時間表示が「Elapsed Time Since System Reset」に変わります
F	カウンタの更新モードを設定します。 「F」と入力すると、注釈行に「1 for start to refresh, 2 for set refresh rate」と表示されますので、更新を止めたい場合は「1」を入力すると、更新間隔が「STOP」と表示され、表示を更新しません。更新間隔を変更したい場合は「2」を入力すると「Input refresh time>」プロンプトが表示されますので、5から600(秒)の整数を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります

またこの画面では本装置が起動または電源OFF、リセットによる再起動されてからの累積値 (図4-7-47) とコマンドによりカウンタをクリアしてからの累積値 (図4-7-48) の2種類を表示することができます。コマンドによりカウンタの値をクリアしても起動時からの累積値は保存されています。

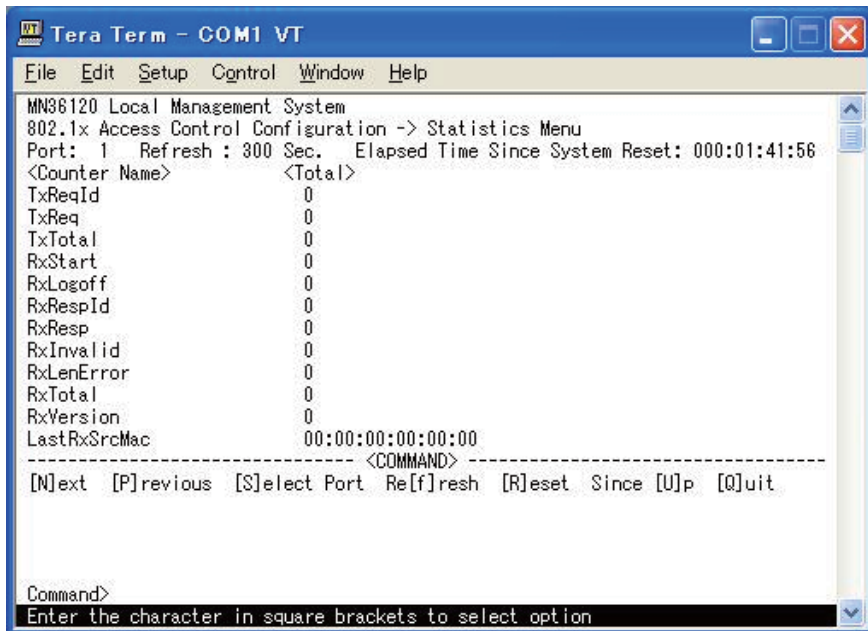


図4-7-48 カウンタクリアからの累積表示

画面の説明

Port	ポート番号を表します。
Refresh	再表示間隔を表します。
Elapsed Time Since Reset	カウンタをリセットしてからの時間を表します。
Counter Name	各カウンタの名前を表示します。
Total	カウンタに累積された値を表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	値を表示するポートを切り替えます
	「S」と入力するとプロンプトが「Select Port number>」と変わりますので表示したいポート番号を入力してください。
N	次のポートの値を表示します。
	「N」と入力すると次のポートのカウンタを表示します。ポート26まで行くと次(ポート1)には移動しません。
P	前のポートの値を表示します。
	「P」と入力すると前のポートのカウンタを表示します。ポート1では前のポートには戻れません。
U	起動時からのカウンタ表示に切り替えます。
	「U」と入力すると、瞬時にreset後のカウンタの表示から、システム起動時からのカウンタ表示に切り替わります。
R	カウンタの値をリセットしてからの値の表示に切り替えます。
	「R」と入力すると、すぐにカウンタの値をresetし、全ての値を0にして再表示させます。
F	カウンタの更新モードを設定します。
	「F」と入力すると、注釈行に「1 for start to refresh, 2 for set refresh rate」と表示されますので、更新を止めたい場合は「1」を入力すると、更新間隔が「STOP」と表示され、表示を更新しません。更新間隔を変更したい場合は「2」を入力すると「Input refresh time>」プロンプトが表示されますので、5から600(秒)の整数を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります

カウンタの内容は下記のとおりです。

TxReqId	本機器からの送信されたEAP Request Identityフレームの数を表示します。
TxReq	本機器からの送信されたEAP Requestフレームの数を表示します。
TxTotal	本機器からの送信された全てのタイプのEAPフレームの総数を表示します。
RxStart	サブリカントから受信したEAPOL Startフレームの数を表示します。
RxLogoff	サブリカントから受信したEAPOL Logoffフレームの数を表示します。。
RxRespId	サブリカントから受信したEAP Response Identityフレーム数を表示します。
RxResp	サブリカントから受信したEAP Responseフレーム数を表示します。
RxInvalid	サブリカントから受信したEAPOLフレームのうち、フレーム タイプを認識できないフレームの数を表示します。
RxLenError	サブリカントから受信したEAPOLフレームのうち、パケット本体の長さを示すフィールドが無効なフレームの数を表示します。
RxTotal	サブリカントから受信したEAPフレームのうち、有効なフレームの総数を表示します。
RxVersion	サブリカントから受信したEAPフレームのうち、802.1xバージョン1の形式で受信したフレームの数を表示します。
LastRxSrcMac	本機器が最後に受信したEAPOLフレームの送信元のMACアドレスを表示します。

4.7.10. IGMP Snoopingの設定(IGMP Snooping Configuration)

「Advanced Switch Configuration Menu」でコマンド「I」を選択すると、図4-7-49のような「IGMP Snooping Configuration Menu」の画面になります。TV会議システムや映像配信、音声配信のシステムのようなIPマルチキャストを用いたアプリケーションをご使用になる場合に、マルチキャストパケットが全ポートに送信され帯域を占有するのを防ぎます。

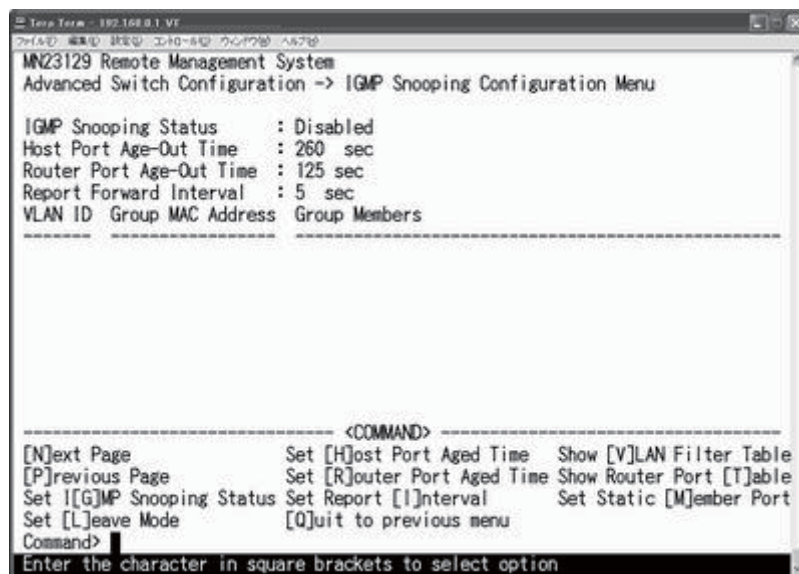


図4-7-49 IGMP Snoopingの設定

画面の説明

IGMP Snooping Status	IGMPスヌーピング機能が有効かどうかを表します。	
	Enabled	IGMPスヌーピング機能有効
	Disabled	IGMPスヌーピング機能無効
Host Port Age-Out Time	マルチキャストグループに参加しなくなってから自動的に開放されるまでの時間を表します。出荷時は260秒に設定されています。	
Router Port Age-Out Timer	ルータポートが自動的に開放されるまでの時間を表します。出荷時は125秒に設定されています。	
Report Forward Interval	Proxy Reportの待機時間を表します。出荷時は5秒に設定されています。	
VLAN ID	マルチキャストグループのVLAN IDを表します。	
Group MAC address	マルチキャストグループのMACアドレスを表します。	
Group members	マルチキャストグループに属しているポートを表します。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると次のページを表示します。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると前のページを表示します。
G	IGMP Snoopingを有効にします。
	「G」と入力するとプロンプトが「Enable or Disable IGMP snooping (E/D)>」となりますので、機能を有効にする場合は「E」を、使用しない場合は「D」を入力してください。
H	マルチキャストグループのメンバーのエイジング時間を設定します。
	「S」と入力するとプロンプトが「Enter age out time>」となりますので、時間を設定してください。設定可能な値の範囲は150～300秒です。
R	マルチキャストグループのルータポートのエイジング時間を設定します。
	「S」と入力するとプロンプトが「Enter age out time>」となりますので、時間を設定してください。設定可能な値の範囲は150～300秒です。
I	Proxy Reportの待機時間を設定します。
	「I」と入力するとプロンプトが「Enter forward interval>」となりますので、時間を設定してください。設定可能な値の範囲は0～25秒です。
V	フィルタをかけるVLANを設定する。
	「V」と入力すると図の画面に移動します。
T	ルータポートを表示します。
	「T」と入力するとVLAN IDとルータポートが表示されます。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.10.a. VLAN Filterの設定

「IGMP Snooping Configuration Menu」でコマンド「V」を選択すると、**図4-7-50**のような「Show IGMP Snooping VLAN Filter Table Menu」の画面になります。この画面ではIGMP Snooping機能の対象外（フィルタリング）にするVLANの設定を行います。

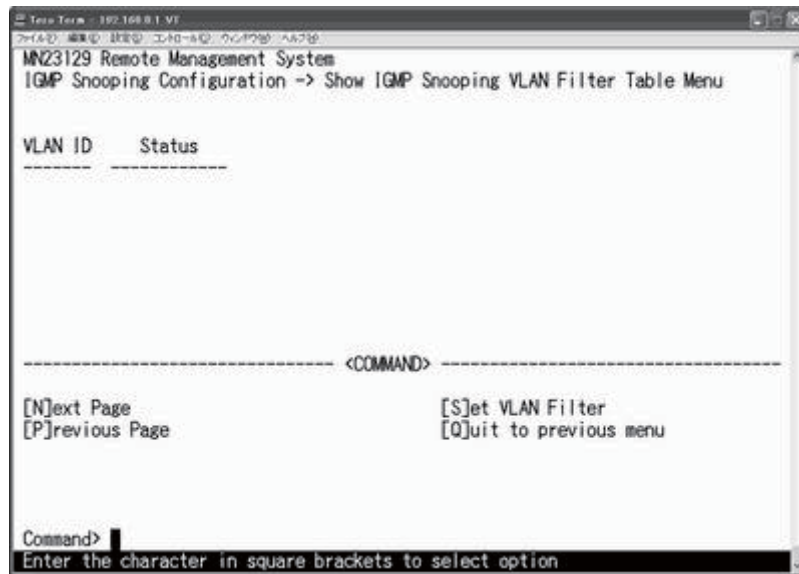


図4-7-50 VLAN Filterの設定

画面の説明

VLAN ID	VLAN IDを表示します。
Status	フィルタの状態を表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると次のページを表示します。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると前のページを表示します。
S	フィルタをかけるVLANを設定します。
	「S」と入力するとプロンプトが「Enter VLAN ID >」となりますので、VLAN IDを1~4095の間で入力してください。入力後、「Filter IGMP snooping for VLAN1 (F/N)>」に替わりますので、フィルターを使用する場合は「F」を、フィルターを使用しない場合は「N」を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.7.10.b. Show Router Port Tableの設定

「IGMP Configuration Menu」でコマンド「T」を選択すると、図4-7-51のような「Show Router Port Table Menu」の画面になります。

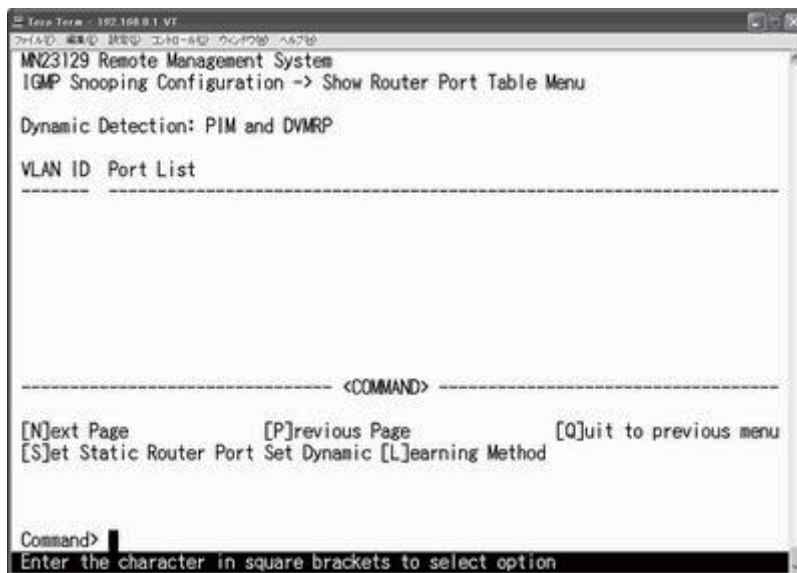


図4-7-51 ルータポートテーブル参照

画面の説明

Dynamic detection	ダイナミックでの習得(探知)方法を表示します。	
	PIM and DVMRP	習得(探知)方法はPIMとDVMRPです。
	IGMP Query	習得(探知)方法はIGMP Queryです。
	Both	習得(探知)方法は上記二つあわせたものとなります。
VLAN ID	VLAN IDを表示します。	
Port List	ポートリストを表示します。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると次のページを表示します。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると前のページを表示します。
S	スタティックでルータポートを設定します。
	「S」と入力するとプロンプトが「Add or Delete Static Multicast Router Port (A/D)>」となりますので、追加する場合は「A」を、削除する場合は「D」を入力してください。入力後、「Enter port number>」と変わりますので、1~26の間でポート番号を入力してください。
L	ダイナミックでルータポートを指定します。
	「L」と入力するとプロンプトが「Set dynamic learning method (P/I/B)>」となりますので、ダイナミック認識方法がPIMとDVMRPの場合は「P」を、IGMP Queryの場合は「I」を、両方の場合は「B」を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8. レイヤー3スイッチングの設定と参照 (Routing configuration and reference Menu)

「Main Menu」から「I」を選択すると図4-8-1のような「Routing configuration and reference Menu」の画面になります。この画面では本製品のサポートするレイヤー3スイッチとしての機能であるRIP、OSPFによるダイナミックルーティング、ルーティングテーブル、DHCPリレーエージェント機能の設定を行います。

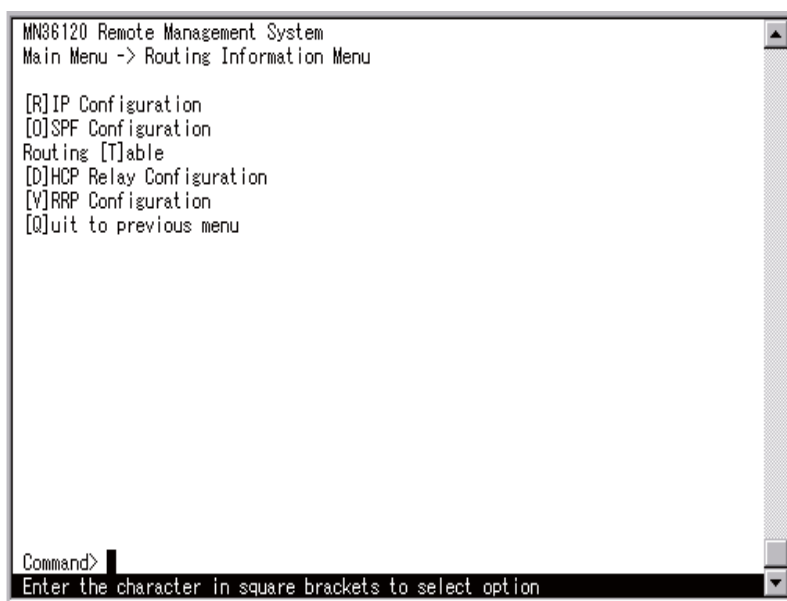


図4-8-1 レイヤー3スイッチングの設定

画面の説明

RIP Configuration	RIP(Routing Information Protocol)に関する設定を行います。
OSPF Configuration	OSPF(Open Shortest Path First)に関する設定を行います。
Routing Table	Routing Tableの情報を確認、設定を行います。
VRRP Configuration	VRRPの設定を行います。
DHCP Relay	DHCPリレーエージェント機能に関する設定を行います。
Quit to previous	上位のメニューに戻ります。

4.8.1. RIPの設定(RIP Configuration)

「Routing Information Menu」から「R」を選択すると図4-8-2のような「RIP Configuration Menu」の画面になります。この画面ではRIP(Routing Information Protocol)によるダイナミックルーティングの設定を行います。本製品ではRIP Version 1とVersion 2をサポートしております。

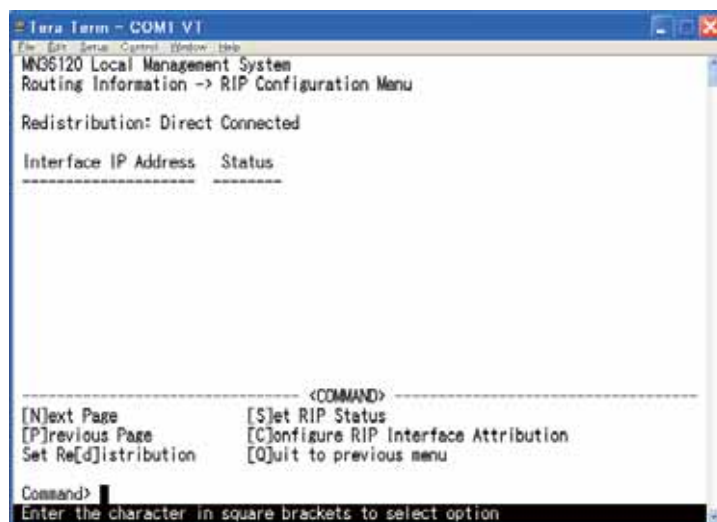


図4-8-2 RIPの設定

画面の説明

Redistribution:	RIPの通知条件を表します。	
	Direct Connected	直接接続でRIPを通知します。
	Static	スタティック経路でRIPを通知します。
	OSPF	OSPF経路でRIPを通知します。
	None	RIPの送信を行いません。
Interface IP Address	RIPインターフェース(VLAN)のIPアドレスを表します。	
Status	RIPインタフェースの有効・無効を表します。	
	Enabled	RIPインタフェースは有効です。
	Disabled	RIPインタフェースは無効です。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。 「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。 「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
D	RIPの通知条件を設定します。 「D」を入力するとプロンプトが「Add or Del Redistribute Method (a/d)>」に替わりますので、通知条件を付け加える場合は「a」を、通知条件を削除する場合は「d」を入力してください。「Set Receive Method (d/s/o/a)>」と替わりますので、直接接続でRIPを通知する場合は「d」を、スタティック経路でRIPを通知する場合は「s」を、OSPF経路でRIPを通知する場合は「o」を、全てのRIPの通知条件で扱う場合は、「a」を入力してください。
S	RIPのモードをセットします。 「S」を入力するとプロンプトが「Enter Interface IP address>」に替わりますので、「Enter Interface IP address>」に替わりますので、インタフェースのIPアドレスを入力してください。その後、「Enable or Disable RIP protocol (E/D)>」に替わりますので、RIPプロトコルを有効にする場合は「E」を、RIPプロトコルを無効にする場合は「D」を入力してください。
C	インタフェース毎にRIPを設定します。 「C」を入力するとプロンプトが「Enter interface IP address>」に替わりますので、IPアドレスを入力してください。入力後、次ページの「Configure RIP Interface Attribution Menu」に切り替わります。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.1.a. RIPのインタフェースの設定(Configure RIP Interface Attribution Menu)

「RIP Configuration Menu」から「C」を選択すると、プロンプトが「Enter interface IP Address>」に替わりますので、インタフェースIPアドレスを入力すると、**図4-8-3**のような「Configure RIP Interface Attribution Menu」の画面になります。この画面ではRIPインタフェースの動作に関する詳細設定を行います。

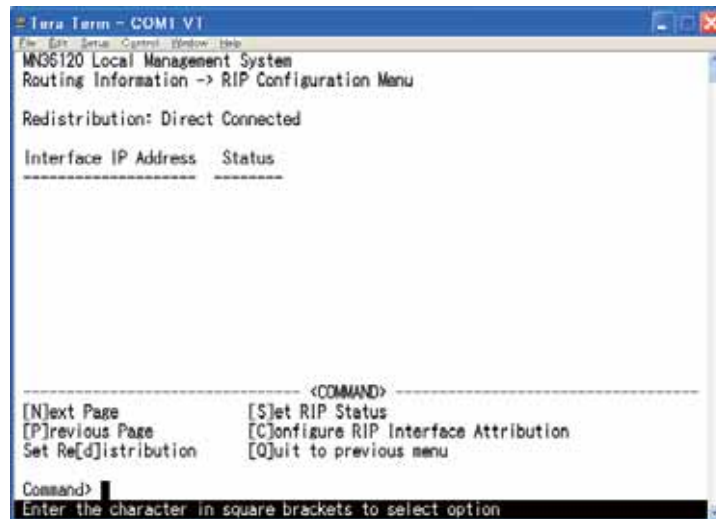


図4-8-3 RIPの設定

画面の説明

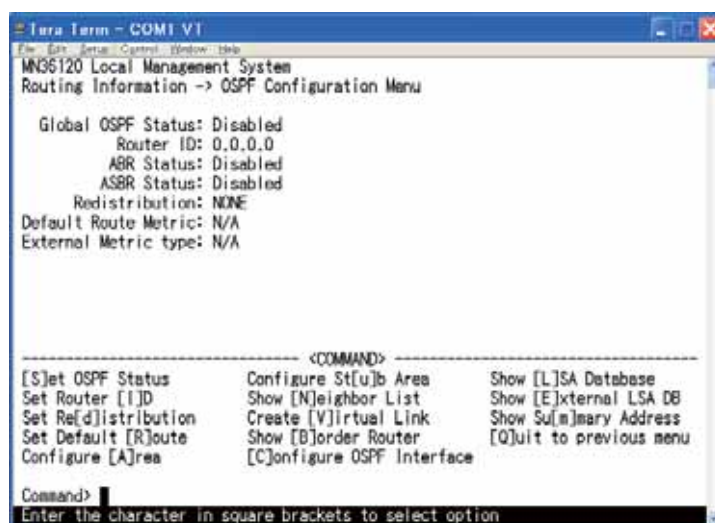
RIP Interface IP Address:	RIPインタフェースのIPアドレスを表します。	
Receive Method:	受信するRIPのバージョンを表します。	
	V1	RIP Version 1のみ受信します。
	V2	RIP Version 2のみ受信します。
	V1 or v2	RIP Version 1、Version 2ともに受信します。
	None	RIPパケットを受信しません。
Send Method:	送信するRIPのバージョンを表します。	
	V1	RIP Version 1を送信します。
	V1 Compatible	RIP Version 1との互換性を表します。
	V2	RIP Version 2を送信します。
	None	RIPパケットを送信しません。
Metric:	RIPのメトリックを表します。	
Authentication:	RIPの認証タイプを表します。	
	Simple	簡易認証を表します。
	MD5	暗号化認証を表します。
	None	認証なしを表します。
Key:	RIP用のキーを表します。	
Route Age Time	RIPによる経路時間を表します。	
Garbage collection Time:	ガーベジコレクションタイマーを表します。	
Split Horizon:	RIPによるルータ間でのスプリットホライズンの有効・無効を表します。	
	Enabled	スプリットホライズンの有効を表します。
	Disabled	スプリットホライズンの無効を表します。
Poison Reverse:	RIPによるルータ間でのポイズンリバースの有効・無効を表します。	
	Enabled	ポイズンリバースの有効を表します。
	Disabled	ポイズンリバースの無効を表します。
Passive Interface:	RIPによるルータ間での受動インタフェースの有効・無効を表します。	
	Enabled	受動インタフェースの有効を表します。
	Disabled	受動インタフェースの無効を表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

R	RIPの受信モードを設定します。 「R」を入力するとプロンプトが「Set Receive Method (1/2/b/n)>」に替わりますので、受信するRIPのVersionが、Version 1の場合は「1」を、Version 2の場合は「2」を、両方の場合は「b」を、受信しない場合は「n」を入力してください。
T	RIPの送信モードを設定します。 「T」を入力するとプロンプトが「Set Send Method (1/c/2/n)>」に替わりますので、送信するRIPのVersionが、Version 1の場合は「1」を、Version1との互換性がある場合は「c」を、Version 2の場合は「2」を、送信しない場合は「n」を入力してください。
C	送信コストを設定します。 「C」を入力するとプロンプトが「Enter metric>」に替わりますので、RIPにおけるメトリックを入力してください。
A	認証モードを設定します。 「A」を入力するとプロンプトが「Set Authentication Method (s/m/n)>」に替わりますので、認証方法が、簡易認証の場合は「s」を、暗号化認証の場合は「m」を、認証なしの場合は「n」を入力してください。
O	Route Age Timeを設定します。 「O」を入力するとプロンプトが「Enter route age time>」に替わりますので、Route Age Timeを30～500(秒)の間で入力してください。デフォルトでは、180(秒)に設定されています。
G	ガーベジコレクションタイマーを設定します。 「G」を入力するとプロンプトが「Enter garbage collect time>」に替わりますので、ガーベジコレクションタイマーを120～180(秒)の間で入力してください。
U	アップデートタイマーを設定します。 「U」を入力するとプロンプトが「Enter update time>」に替わりますので、アップデートタイマーを10～3600(秒)の間で入力してください。
S	スプリットホライズンの有効/無効の設定を行います。 「S」を入力するとプロンプトが「Enable or Disable Split Horizon (E/D)>」に替わりますので、スプリットホライズンを有効にする場合は「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
P	ポイズンリバースの有効/無効の設定を行います。 「P」を入力するとプロンプトが「Enable or Disable Poison Reverse (E/D)>」に替わりますので、ポイズンリバースを有効にする場合は「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
I	受動インタフェースの有効/無効の設定を行います。 「I」を入力するとプロンプトが「Enable or Disable Passive Interface (E/D)>」に替わりますので、受動インタフェースを有効にする場合は「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.2. OSPFの設定(OSPF Configuration)

「Routing Information Menu」から「0」を選択すると図4-8-4のような「OSPF Configuration Menu」の画面になります。この画面ではOSPF(Open Shortest Path First)によるダイナミックルーティングの設定を行います。OSPFはリンクステート型ルーティングプロトコルであり、LSA(Link State Advertisement)と呼ばれる全てのルータに共通するインタフェースの情報を交換し、最短パスツリーを計算して経路選択を行います。OSPFではネットワークをエリアと呼ばれる単位に分割し、このエリア毎に経路情報を管理しています。



```
Tera Term - COM1 V1
File Edit Setup Command Window Help
M36120 Local Management System
Routing Information -> OSPF Configuration Menu

Global OSPF Status: Disabled
Router ID: 0.0.0.0
ABR Status: Disabled
ASBR Status: Disabled
Redistribution: NONE
Default Route Metric: N/A
External Metric type: N/A

----- <COMMAND> -----
[S]et OSPF Status          Configure St[u]b Area      Show [L]SA Database
Set Router [I]D           Show [N]eighbor List     Show [E]xternal LSA DB
Set Re[d]istribution      Create [V]irtual Link     Show Su[m]mary Address
Set Default [R]oute       Show [B]order Router     [Q]uit to previous menu
Configure [A]rea          [C]onfigure OSPF Interface

Command>
Enter the character in square brackets to select option
```

図4-8-4 OSPFの設定

画面の説明

Global OSPF Status:	OSPFの有効・無効を表します。	
	Enabled	OSPFは有効です。
	Disabled	OSPFは無効です。
Router ID:	OSPFのルータIDを表します。	
ABR Status:	ABR(Area Border Router)の有効/無効を表します。	
	Enabled	ABRは有効です。
	Disabled	ABRは無効です。
ASBR Status:	ASBR(Autonomous System Boundary Router)の有効/無効を表します。	
	Enabled	ASBRは有効です。
	Disabled	ASBRは無効です。
Redistribution:	OSPFの通知条件を表します。	
	Direct Connected	直接接続をOSPFに通知します。
	Static	スタティック経路をOSPFに通知します。
	RIP	RIP経路でOSPFを通知します。
	NONE	OSPF以外の経路を通知しません。
Default Route Metric:	Default Routeのメトリックを表します。	
External Metric Type:	外部のメトリックタイプを表します。	
	Type 1 External Route	外部ルートのタイプ1を表します。
	Type 2 External Route	外部ルートのタイプ2を表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	OSPFを有効/無効にする設定を行います。
	「S」を入力するとプロンプトが「Enable or Disable OSPF protocol (E/D)>」に替わりますので、OSPFを有効にしたい場合は「E」を、無効にしたい場合は「D」を入力してください。
I	ルータIDの設定を行います。
	「I」を入力するとプロンプトが「Enter Router ID>」に替わりますので、ルータIDを入力してください。
D	OSPFの通知条件の追加/削除の設定を行います。
	「D」を入力するとプロンプトが「Add or Delete Redistribute Method (a/d)>」に替わりますので、OSPFの通知条件を付け加える場合は「a」を、通知条件を削除する場合は「d」を入力してください。入力後、「Set Receive Method (d/s/r/a)>」に替わりますので、直接接続での通知の場合は「d」を、スタティック経路での通知の場合は「s」を、RIP経路での通知の場合は「r」を、通知条件を設定しない場合は「n」を入力してください。
R	デフォルトルートの設定を行います。
	「R」を入力するとプロンプトが「Enter default route metric>」に替わりますので、OSPFのコスト値を1~65535150の間で入力してください。入力後、「Enter metric type>」に替わりますので、メトリックのタイプが外部ルート1の場合は「1」を、外部ルート2の場合は「2」を入力してください。
A	エリアの設定を行います。
	「A」を入力すると画面が「Configure Area Menu」に替わり、エリアの設定をします。画面の内容については次項(4.8.2.a)を参照してください。
U	スタブエリアの設定を行います。
	「U」を入力すると画面が「Configure Stub Area Menu」に替わり、スタブエリアの設定をします。画面の内容については次項(4.8.2.b)を参照してください。
N	近接関係にあるルータの優先性の設定を行います。
	「N」を入力すると画面が「Neighbor Priority Configuration Menu」に替わり、近接関係にあるルータの優先性を設定します。画面の内容については次項(4.8.2.c)を参照してください。
V	仮想インタフェースの設定をします。
	「V」を入力すると画面が「Virtual Interface Configuration Menu」に替わり、仮想インタフェースの設定をします。画面の内容については次項(4.8.2.d)を参照してください。
B	ABR(Area Border Router)の設定内容を表示します。
	「B」を入力すると画面が「Show Border Router Menu」に替わり、エリア境界ルータの設定内容を参照できます。画面の内容については次項(4.8.2.e)を参照してください。
C	OSPFのインタフェースのIPアドレスを設定します。
	「C」を入力するとプロンプトが「Enter OSPF Interface IP address>」に替わりますので、OSPFインタフェースのIPアドレスを入力してください。
L	LSA(Link State Advertisement)のデータベースを表示します。
	「L」を入力すると画面が「Show LSA Database Menu」に替わり、LSAのデータベースが参照できます。画面の内容については次項(4.8.2.g)を参照してください。
E	LSAのデータベースを表示します。
	「E」を入力すると画面が「Show External LSA Database Menu」に替わり、LSAのデータベースが参照できます。画面の内容については次項(4.8.2.h)を参照してください。
M	集約アドレスを表示します。
	「M」を入力すると画面が「Show Summary Address Menu」に替わり、集約アドレスが参照できます。画面の内容については次項(4.8.2.i)を参照してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.2.a. エリアの設定(Configure Area Menu)

「OSPF Configuration Menu」から「A」を選択すると図4-8-5のような「Configure Area Menu」の画面になります。この画面ではOSPFのエリアの設定を行います。大規模なネットワークになると、SPFアルゴリズムに多大な負荷がかかり、大量のメモリを消費します。また障害時にネットワークに流れるLSU(Link State Update)の増加に伴い、帯域に多大な負荷がかかります。この問題を解決するために、エリアの分割を行います。エリアの分割を行うことにより、障害の起きた場合でもLSUは、他のエリアにLSUを流しません。

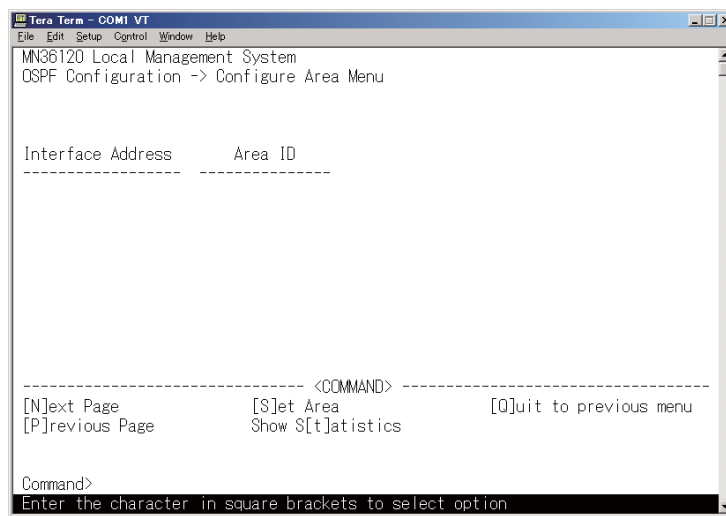


図4-8-5 エリアの設定

画面の説明

Interface address	OSPFにおけるインタフェースのIPアドレスを表します。
Area ID	OSPFにおけるエリアIDを表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
S	エリアの追加/削除の設定を行います。
	「S」を入力するとプロンプトが「Add or Delete Area (a/d)>」に替わりますので、エリアを追加したい場合は「a」を、エリアを削除したい場合は、「d」を入力してください。入力後、「Enter Interface IP Address>」に替わりますので、インタフェースのIPアドレスを入力してください。追加の場合、入力後「Enter Area ID>」に替わりますので、エリアIDを入力してください。
T	エリアの設定を表示します。
	「t」を入力するとプロンプトが「Show Statistics」の画面に替わり、エリアの設定を参照できます。画面の内容については次項(4.8.2.j)を参照してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.2.b. スタブエリアの設定(Configured Stub Area Menu)

「OSPF Configuration Menu」から「U」を選択すると図4-8-6のような「Configure Stub Area Menu」の画面になります。この画面ではスタブエリアの設定を行います。

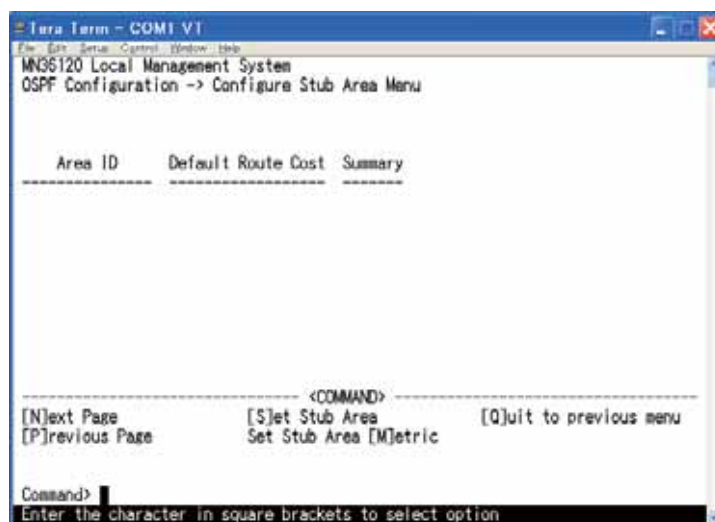


図4-8-6 スタブエリアの設定

画面の説明

Area ID	OSPFのエリアIDを表します。
Default Route Cost	デフォルトルートのコストを表します。
Summary	OSPFにおける集約アドレスを表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。 「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。 「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
S	スタブエリアの追加/削除の設定を行います。 「S」を入力するとプロンプトが「Add or Delete Stub Area (a/d)>」に替わりますので、エリアを追加したい場合は「a」を、エリアを削除したい場合は「d」を入力します。入力後「Enter Area ID>」に替わりますので、エリアIDを入力してください。追加の場合、入力後「Select summary (y/n)>」に替わりますので、集約アドレスを選択する場合は「y」を、集約アドレスを選択しない場合は「n」を入力してください。
M	スタブエリアのメトリックを設定します。 「M」を入力するとプロンプトが「Enter Area ID>」に替わりますので、OSPFのエリアIDを入力してください。「Enter Area Metric>」に替わりますので、メトリックをコスト値1～65535の間で入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.2.c. 近接関係にあるルータの優先性の設定

(Neighbor Priority Configuration Menu)

「OSPF Configuration Menu」から「N」を選択すると図4-8-7のような「Neighbor Priority Configuration Menu」の画面になります。この画面では近接関係にあるルータの優先性の設定を行います。

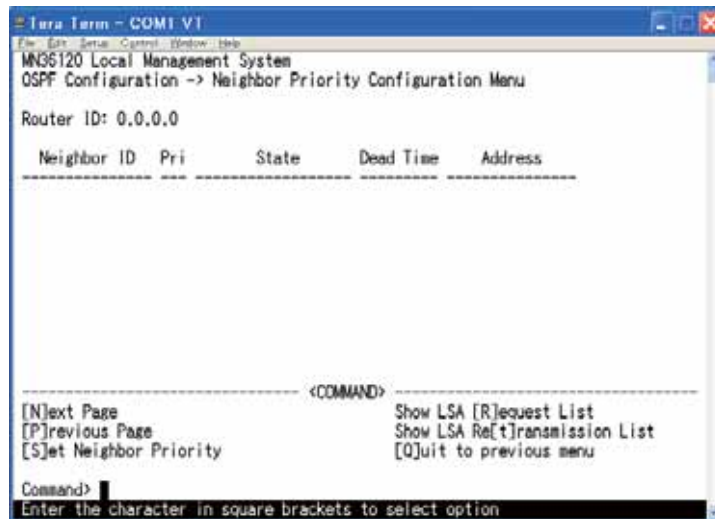


図4-8-7 近接関係にあるルータの優先性の設定画面

画面の説明

Router ID:	自ルータIDを表します。
Neighbor ID	近接関係にあるルータのIDを表します。
Pri	近接関係にあるルータの優先性を表します。
State	近接関係にあるルータの状態を表します。
Dead Time	近接関係にあるルータの切断までの時間を表します。
Address	近接関係にあるルータのIPアドレスを表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
S	近接関係にあるルータの優先性の設定を行います。
	「S」を入力するとプロンプトが「Enter Neighbor IP address>」に替わりますので、近接関係にあるルータのIPアドレスを入力すると、「Enter priority>」に替わりますので、0から255の範囲で優先性を入力してください。
R	LSA要求リストを参照します。
	「R」を入力するとプロンプトが「Enter Neighbor IP address>」に替わりますので、近接ルータのIPアドレスを入力してください。
T	LSA再送信リストを参照します。
	「T」を入力するとプロンプトが「Enter Neighbor IP address>」に替わりますので、近接ルータのIPアドレスを入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.2.d. 仮想インターフェースの設定(Virtual Interface Configuration Menu)

「OSPF Configuration Menu」から「V」を選択すると図4-8-8のような「Virtual Interface Configuration Menu」の画面になります。この画面ではOSPFの仮想インターフェースの設定を行います。

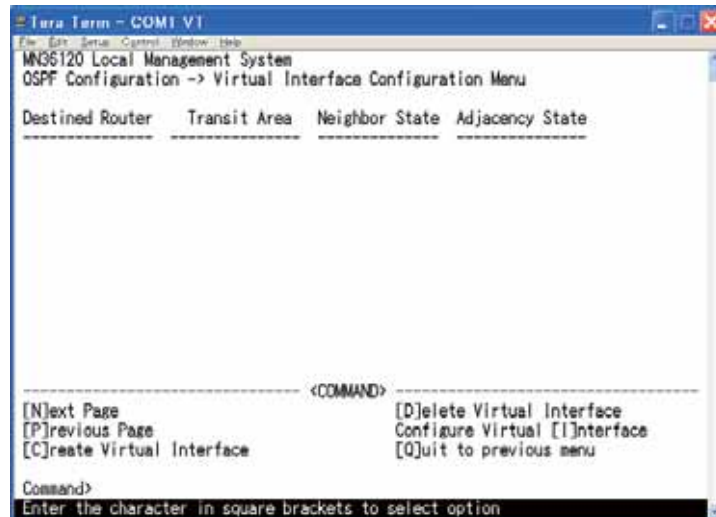


図4-8-8 仮想インターフェースの設定

画面の説明

Destined Router	宛先ルータを表します。
Transit Area	通過エリアを表します。
Neighbor State	近接関係にあるルータの状態を表します。
Adjacency State	ルータの隣接状態を表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
C	仮想インタフェースの作成を行います。
	「C」を入力するとプロンプトが「Enter destined router ID>」に替わりますので、作成する仮想インタフェースのルータIDを入力してください。
D	仮想インタフェースの削除を行います。
	「D」を入力するとプロンプトが「Enter destined router ID>」に替わりますので、削除する仮想インタフェースのルータIDを入力してください。
I	仮想インタフェースの設定を行います。
	「I」を入力するとプロンプトが「Enter destined router ID>」に替わりますので、設定する仮想インタフェースのルータIDを入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.2.e. エリア境界ルータの参照(Show Border Router Menu)

「OSPF Configuration Menu」から「B」を選択すると図4-8-9のような「Show Border Router Menu」の画面になります。この画面ではエリア境界ルータの参照ができます。

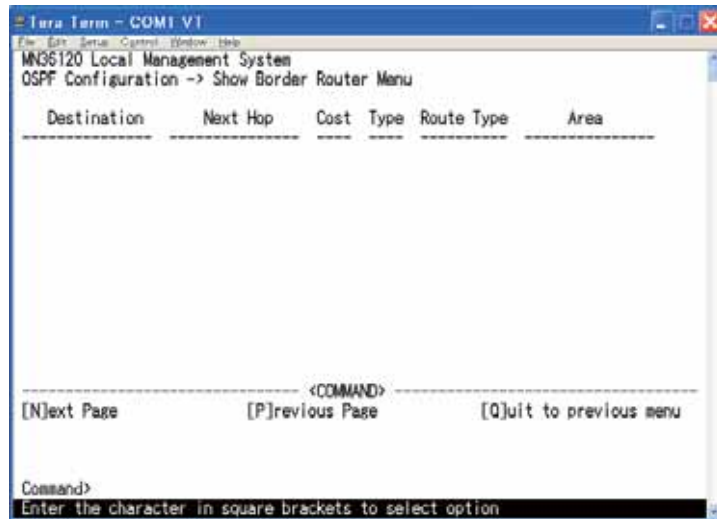


図4-8-9 エリア境界ルータの参照

画面の説明

Destination	目的地となるルータを表します。
Next Hop	次のホップ(ルータ)を表します。
Cost	ルータのコスト(帯域)を表します。
Type	ルータのタイプを表します。
Route Type	経路のタイプを表します。
Area	ルータにおけるエリアを表します。

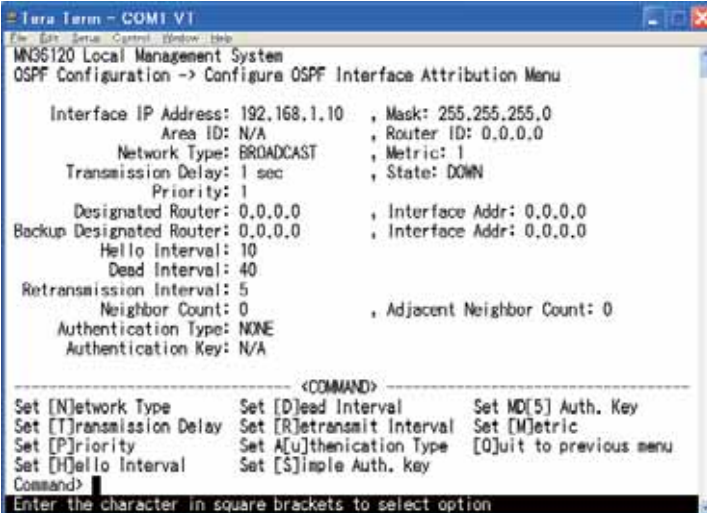
ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.2.f. OSPFのインタフェースの設定

(Configure OSPF Interface Attribution Menu)

「OSPF Configuration Menu」から「C」を選択すると図4-8-10のような「Configure OSPF Interface Attribution Menu」の画面になります。この画面ではOSPFのインタフェースの設定を行います。(OSPFの状態をEnableにする必要があります。)



```
Tera Term - COM1 V1
File Edit Setup Config Window Help
MN36120 Local Management System
OSPF Configuration -> Configure OSPF Interface Attribution Menu

Interface IP Address: 192.168.1.10 , Mask: 255.255.255.0
Area ID: N/A , Router ID: 0.0.0.0
Network Type: BROADCAST , Metric: 1
Transmission Delay: 1 sec , State: DOWN
Priority: 1
Designated Router: 0.0.0.0 , Interface Addr: 0.0.0.0
Backup Designated Router: 0.0.0.0 , Interface Addr: 0.0.0.0
Hello Interval: 10
Dead Interval: 40
Retransmission Interval: 5
Neighbor Count: 0 , Adjacent Neighbor Count: 0
Authentication Type: NONE
Authentication Key: N/A

-----<COMMAND>-----
Set [N]etwork Type Set [D]ead Interval Set MD[5] Auth. Key
Set [T]ransmission Delay Set [R]etransmit Interval Set [M]etric
Set [P]riority Set A[u]thentication Type [Q]uit to previous menu
Set [H]ello Interval Set [S]imple Auth. key
Command>
Enter the character in square brackets to select option
```

図4-8-10 OSPFのインタフェースの設定

画面の説明

Interface IP Address:	自インタフェースにおけるIPアドレスを表します。	
Mask:	自サブネットマスクを表します。	
Area ID:	自エリアのIDを表します。	
Router ID:	自ルータのIDを表します。	
Network Type:	ネットワークタイプを表します。	
	BROADCAST	ネットワークタイプが、ブロードキャストであることを表します。
	NBMA	ネットワークタイプが、NBMAであることを表します。
	Point-To-Point	ネットワークタイプがポイントツーポイントであることを表します。
Point-To-MultiPoint	ネットワークタイプがポイントツーマルチポイントであることを表します。	
Metric:	ルータ間におけるメトリック (OSPFの場合コスト) を表します。	
Transmission Delay:	ルータ間の送信遅れ時間を表します。	
State:	ルータ間の状態を表します。	
	UP	ルータ間の状態がアップしたことを表します。
	DOWN	ルータ間の状態がダウンしたことを表します。
Priority:	DRとBDRの選択基準に用いる優先性を表します。	
Designated Router:	代表ルータ (DR) を表します。0.0.0.0の場合DRは存在しません。	
Interface Addr:	DR、BDRのインターフェイスアドレスを表します。	
Backup Designated Router:	バックアップ代表ルータ (BDR) を表します。0.0.0.0の場合BDRは存在しません。	
Interface Addr:	インターフェイスアドレスを表します。	
Hello Interval:	Helloパケットを送信する間隔を表します。	
Dead Interval:	Helloパケットの送信切断までの間隔を表します。	
Retransmission Interval:	Helloパケットの再送信までの間隔を表します。	
Neighbor Count:	近接関係にあるルータの数を表します。	
Adjacent Neighbor Count:	隣接する近接関係にあるルータの数を表します。	
Authentication Type:	ルータにおける認証タイプを表します。	
	Simple	簡易認証を表します。
	MD5	暗号化認証を表します。
	None	認証しないことを表します。
Authentication Key:	認証用キーを表します。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	ネットワークタイプを設定します。 「N」を入力するとプロンプトが「Set Network Type (b/n/p/m)>」に替わりますので、Broadcastに設定する場合は「B」、NBMAの場合は「N」、Point To Pointの場合は「P」、Point To Multi Pointの場合は「M」を入力してください。
T	ルータ間の送信遅れ時間の設定を行います。 「T」を入力するとプロンプトが「Enter transmission delay time>」に替わりますので、ルータ間の送信遅れ時間を0～3600の間で入力してください。
P	DRとBDRの選択基準に用いる優先性の設定を行います。 「P」を入力するとプロンプトが「Enter priority>」に替わりますので、DRとBDRの選択基準に用いる優先性を0～255の間で優先性の入力をしてください。
H	Helloパケットを送信する間隔の設定を行います。 「H」を入力するとプロンプトが「Enter hello interval>」に替わりますので、Helloパケットを送信する間隔を1～65535の間で入力してください。
D	Helloパケットの送信切断までの間隔の設定を行います。 「D」を入力するとプロンプトが「Enter dead interval>」に替わりますので、Helloパケットの送信切断までの間隔を0～2147483647の間で入力してください。
R	Helloパケットの再送信までの間隔の設定を行います。 「R」を入力するとプロンプトが「Enter retransmission interval>」に替わりますので、Helloパケットの再送信までの間隔を0～3600の間で入力してください。
U	OSPFの認証タイプの設定を行います。 「U」を入力するとプロンプトが「Set Authentication Method (s/m/n)>」に替わりますので、OSPFの認証タイプが簡易認証の場合は「s」を、MD5の場合は「m」を、認証なしの場合は「n」を入力してください。デフォルトでは、認証なしに設定されています。
S	認証タイプが簡易認証の場合での認証キーの設定を行います。 Authentication TypeがSimpleの時に「S」を入力するとプロンプトが「Enter Authentication key>」に替わりますので、認証キーを8桁以内で入力してください。
5	認証タイプがMD5の場合での認証キーの設定を行います。 「5」を入力するとプロンプトが「Enter Authentication key ID>」に替わりますので、認証キーを0～255以内で入力してください。
M	メトリックの長さの設定を行います。OSPFの場合、メトリックはコストになります。 「M」を入力するとプロンプトが「Enter metric>」に替わりますので、メトリックの長さを1～65535の間で入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.2.g. LSAの参照(Show LSA Database Menu)

「OSPF Configuration Menu」から「L」を選択すると図4-8-11のような「Show LSA Database Menu」の画面になります。この画面ではLSA(Link State Advertisement)の参照ができます。

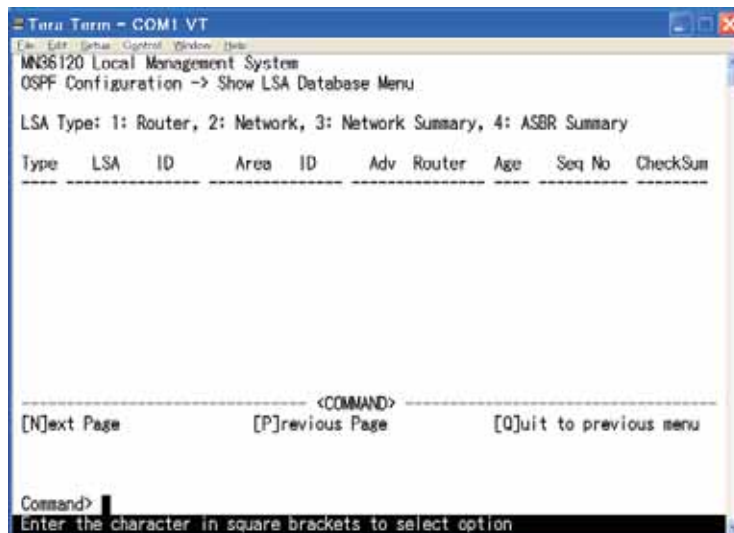


図4-8-11 LSAの参照

画面の説明

LSA Type:	LSAのタイプを表します。
Type	各々のタイプを表します。
LSA ID	LSAのIDを表します。
Area ID	LSAにおけるエリアIDを表します。
Adv Router	データを送信するルータを表します。
Age	各ルータとの通信時間を表します。
Seq No.	各ルータのシーケンス番号を表します。
CheckSum	OSPFのメッセージが正しく届いている確認するための情報を表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.2.h. 外部LSAの参照(Show External LSA Database Menu)

「OSPF Configuration Menu」から「E」を選択すると図4-8-12のような「Show External LSA Database Menu」の画面になります。この画面では外部LSAの参照ができます。

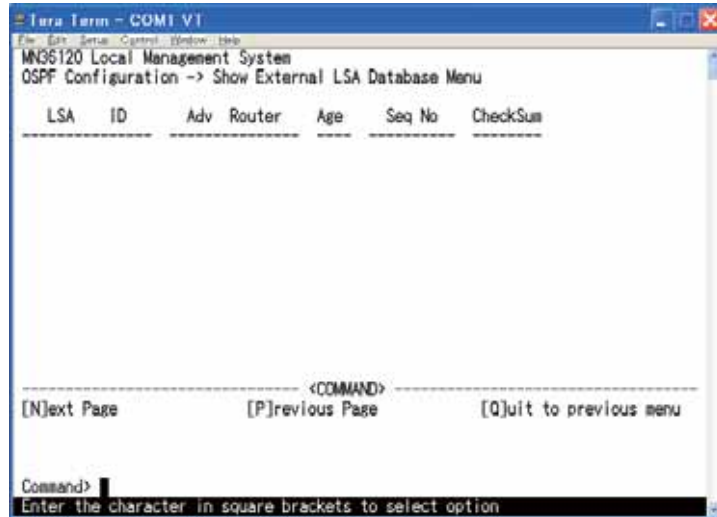


図4-8-12 外部LSAの参照

画面の説明

LSA ID	外部LSAのIDを表します。
Adv Router	データを送信するルータを表します。
Age	各ルータとの通信時間を表します。
Seq No.	各ルータのシーケンス番号を表します。
CheckSum	OSPFのメッセージが正しく届いている確認するための情報を表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.2.i. 集約アドレスの参照(Show Summary Address Menu)

「OSPF Configuration Menu」から「M」を選択すると図4-8-13のような「Show Summary Address Menu」の画面になります。この画面では集約アドレスの参照ができます。

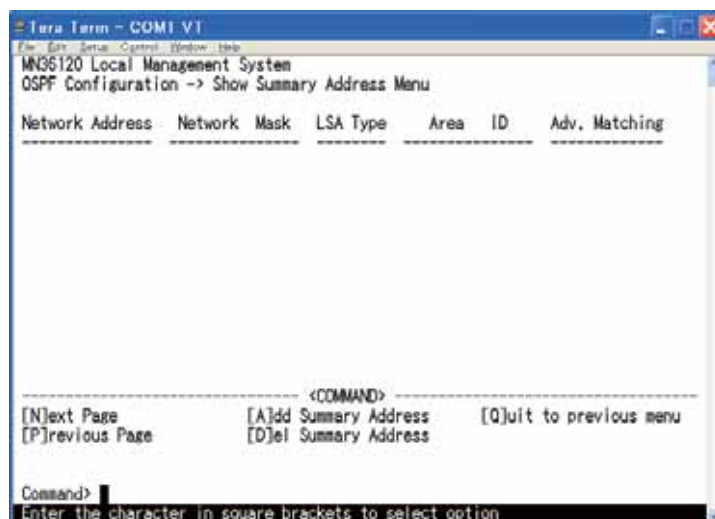


図4-8-13 集約アドレスの参照

画面の説明

Network Address	集約経路で行うクラスレスのネットワークアドレスを表示します。
Network Mask	集約経路で行うクラスレスのネットワークマスクを表示します。
LSA Type	LSAのタイプを表示します。
Area ID	エリアIDを表示します。バックボーンエリアのエリアIDは0です。
Adv. Matching	ロングストマッチングを行います。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。 「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。 「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
A	付け加える集約アドレスの設定を行います。 「A」を入力するとプロンプトが「Enter Network Address>」に替わりますので、付け加える集約アドレスをクラスレスで入力してください。入力後、「Enter Network Mask>」に替わりますので、ネットワークマスクを入力してください。入力後、「Enter Area Id>」に替わりますので、エリアIDを入力してください。入力後、「Select advertise matching effect (y/n)>」に替わりますので、
D	集約アドレスを削除する設定を行います。 「D」を入力するとプロンプトが「Enter Network Address>」に替わりますので、削除する集約アドレスを入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.2.j. エリアの設定の参照(Show Statistics)

「Configure Area Menu」の画面から「t」を選択すると図4-8-14のような「Show Statistics」の画面に替わります。この画面では、エリアの設定の参照ができます。

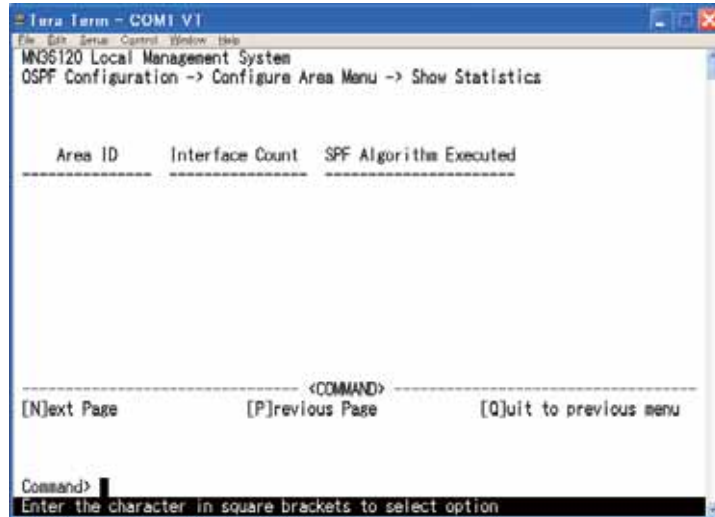


図4-8-14 エリアの設定の参照

画面の説明

Area ID	エリアIDを表します。
Interface Count	インタフェースカウントを表します。
SPF Algorithm Executed	SPFのアルゴリズムの実行結果を表します。

N	次のページを表示します。 「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。 「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.3. ルーティングテーブル情報(Routing Table Information Menu)

「Routing Information Menu」から「T」を選択すると図4-8-15のような「Routing Table Information Menu」の画面になります。この画面ではルーティングテーブルの設定を行います。

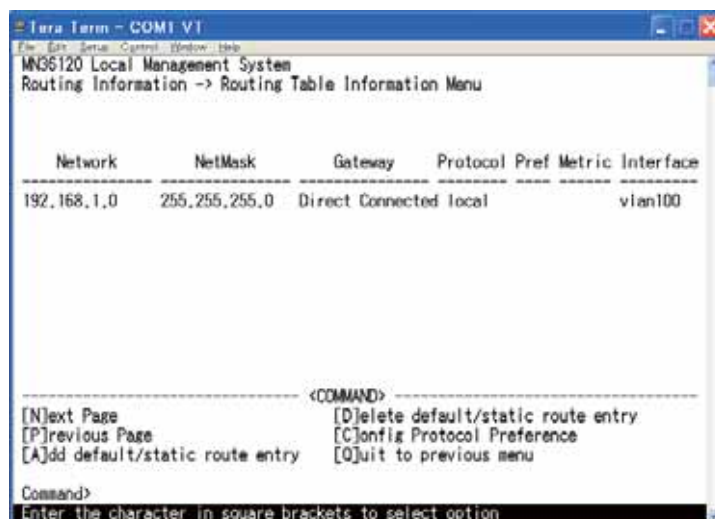


図4-8-15 ルーティングテーブル

画面の説明

Network	ルーティングテーブルにおけるネットワークアドレスを表します。
NetMask	ルーティングテーブルにおけるネットワークマスクを表します。
Gateway	ルーティングテーブルにおけるゲートウェイを表します。
Protocol	ルーティングテーブルにおけるプロトコルを表します。
Pref	ルーティングテーブルにおけるプロトコルの優先度を表します。
Metric	ルーティングテーブル間のメトリックを表します。
Interface	ルーティングテーブルにおけるインタフェースを表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。 「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。 「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
A	付け加える宛先のネットワークアドレスを設定してください。 「A」を入力するとプロンプトが「Enter destination net address>」に替わりますので、付け加える宛先のネットワークアドレスを入力してください。入力後、「Enter destination net mask>」に替わりますので、宛先のネットワークマスクを入力してください。入力後、「Enter gateway ip address>」に替わりますので、ゲートウェイのIPアドレスの入力してください。入力後、「Enter route preference>」に替わりますので、1~254の間で優先性を入力してください。
D	削除する宛先のネットワークアドレスを設定してください。 「D」を入力するとプロンプトが「Enter destination net address>」に替わりますので、削除するネットワークアドレスを入力してください。
C	OSPFとRIPのプロトコルの優先性を設定してください。 「C」を入力すると画面が「Configure Protocol Preference Menu」に替わりますので、OSPFとRIPの優先性の設定を変更する場合「S」を入力してください。(127ページ参照)
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.3.a. スタティックルーティングの設定 (Static route Entry)

「Routing Table Information Menu」から「A」を選択すると図4-8-16のような「Add Default /Static route Entry」になります。ここではスタティックルーティングの設定を行います。

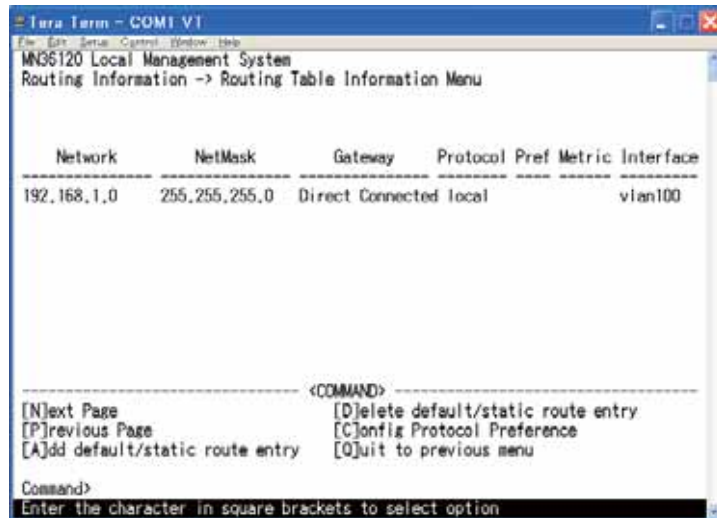


図4-8-16 スタティックルーティングの設定

A	付け加える宛先のネットワークアドレスを設定してください。
	1. 宛先ネットワークアドレス設定
	「A」を入力するとプロンプトが「Enter destination net address>」に替わりますので、付け加える宛先のネットワークアドレスを入力してください。
	2. 宛先ネットワークマスク設定
	宛先ネットワークアドレス入力後、「Enter destination net mask>」に替わりますので、宛先のネットワークマスクを入力してください。
	3. ゲートウェイIPアドレス設定
	宛先ネットワークマスク入力後、「Enter gateway ip address>」に替わりますので、ゲートウェイのIPアドレスの入力してください。
	4. 優先性の設定
	ゲートウェイIPアドレス入力後、「Enter route preference>」に替わりますので、1~254の間で優先性を入力してください。

4.8.3.b. プロトコルの優先性の設定(Configure Protocol Preference Menu)

「Routing Table Information Menu」から「C」を選択すると図4-8-17のような「Configure Protocol Preference Menu」の画面になります。この画面では、OSPF、RIPの優先性の設定を行います。

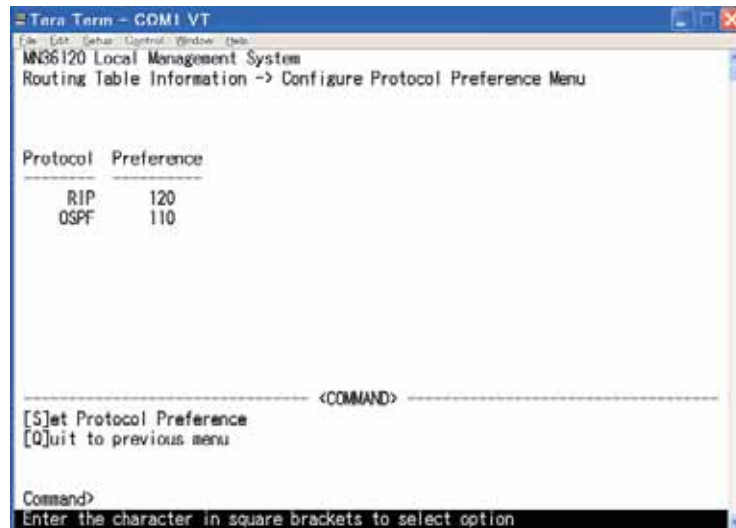


図4-8-17 OSPF、RIPの優先性の設定

画面の説明

Protocol	各プロトコルを表します。	
	RIP	RIPプロトコルを表します。
	OSPF	OSPFプロトコルを表します。
Preference	各プロトコルの優先性を表します。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	OSPFとRIPの優先性の変更を行います。
	「S」を入力するとプロンプトが「Select routing protocol (r/o)>」に替わりますので、RIPの優先性を変更する場合は「r」を、OSPFの優先性を変更する場合は「o」を入力してください。入力後、「Enter protocol preference>」に変わりますので、1～253まで優先性を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.4. VRRPの設定(VRRP Configuration Menu)

「Routing Information Configuration Menu」でコマンド「V」を選択すると、**図4-8-18**のような「VRRP Configuration Menu」の画面になります。この画面ではVRRPの設定を行ないます。

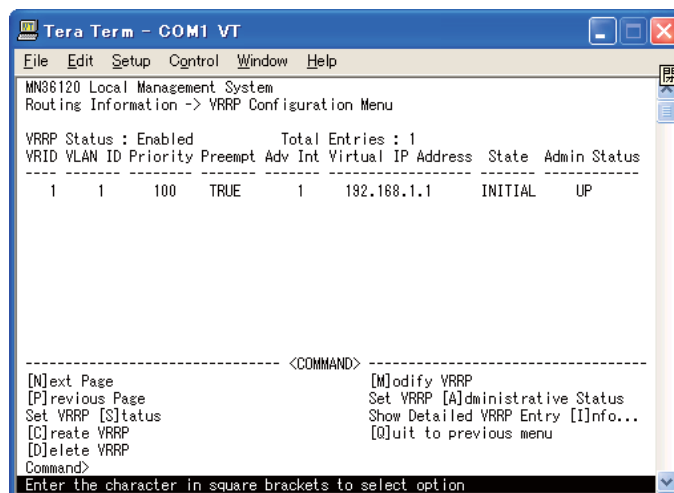


図4-8-18 VRRPの設定

画面の説明

VRID	VRIDを表示します。
VLAN ID	VLAN IDを表示します。
Priority	プライオリティを表示します。
Preempt	Preemptを表示します。
Adv Int	拡張インターバルを表示します。デフォルトでは1に設定されています。
Virtual IP Address	仮想IPアドレスを表示します。
State	状態を表示します。(マスター、バックアップ)
Admin Status	VRRPの有効・無効を表示します。

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると表示が次のページに切り替わります。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると表示が前のページに切り替わります。
S	VRRPのステータスの設定を行います。
	「V」と入力すると、「Enable or Disable VRRP status (E/D) >」に変わりますので、VRRPを有効にする場合は「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
C	VRRPの作成を行います。
	「C」と入力すると、「Create VRRP Menu」に変わります。「Create VRRP Menu」を参照してください。
D	VRRP削除を行います。
	「D」と入力するとプロンプトが「Enter VRID >」と変わりますので、削除するクラスのVRIDを入力してください。その後プロンプトが「Enter VLAN ID >」と変わりますのでVLAN IDを入力してください。
M	VRRPの設定の修正を行います。
	「M」と入力すると、「Modify VRRP Menu」に変わります。「Modify VRRP Menu」で「Create VRRP Menu」と同じように設定（修正）してください。
A	VRRPの管理状態をUP/DOWNにする設定を行います。
	「A」と入力すると、プロンプトが「Enter VRID >」変わりますので管理状態の変更を行うVRIDを入力してください。その後「Enter VLAN ID >」に変わりますのでVLAN IDを入力してください。その後、プロンプトが「VRID=1, VLANID=1, Administrative status up or down (U/D) >」に変わりますので管理状態をUPにする場合は「U」を、DOWNする場合は「D」を入力してください。
I	VRRPの設定情報の参照を行います。
	「I」と入力すると、プロンプトが「Enter VRID >」に変わりますので、VRIDを入力してください。その後、「Enter VLAN ID >」に変わりますので、VLAN IDを入力してください。その後、「Show Detailed VRRP Entry Information Menu」で設定情報を参照してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.4.a. VRRPの作成(Create VRRP Menu)

「VRRP Configuration Menu」の画面でコマンド「C」を選択すると図4-8-19のような「Create VRRP Menu」の画面になります。この画面ではVRRPの作成を行います。

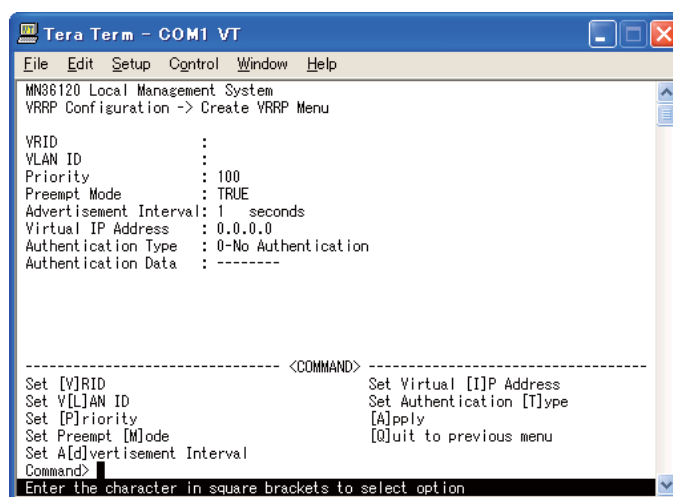


図4-8-19 VRRPの作成

画面の説明

VRID	VRIDを表示します。	
VLAN ID	VLAN IDを表示します。	
Priority	プライオリティを表示します。	
Preempt Mode	Preempt Modeを表示します。Preempt Modeが、有効の場合はTRUE、無効な場合はFALSEと表示されます。	
Advertisement Interval	拡張インターバルを表示します。デフォルトでは1に設定されています。	
Virtual IP Address	仮想IPアドレスを表示します。	
Authentication Type	認証タイプを表示します	
	0-No Authentication	認証しません。
	1-Simple Text Password	簡易パスワードにて認証します。
	2-IP Authentication Header	IP認証ヘッダにて認証します。
Authentication Data	簡易パスワードの認証データを表示します。	

ここで使用できるコマンドは次のとおりです。

V	VRIDの設定をします。
	「V」と入力すると、プロンプトが「Enter VRID >」に変わりますので、1-255の範囲でVRIDを入力してください。
L	VLAN IDを設定します。
	「L」と入力すると、プロンプトが「Enter VLAN ID >」に変わりますので、1-4096の範囲でVLAN IDを入力してください。
P	プライオリティを設定します。
	「P」と入力すると、「Enter priority >」に変わりますので、1-254の範囲でプライオリティを入力してください。
M	Preempt Modeの設定をします。
	「M」と入力するとプロンプトが「Set preempt mode true or false (T/F) >」と変わりますので、preemptを有効にする場合は「T」を、無効にする場合は「F」を入力してください。
D	拡張インターバルの設定を行います。
	「D」と入力すると、プロンプトが「Enter advertisement interval >」に変わりますので、1-255の範囲で拡張インターバルを入力してください。
I	仮想IPアドレスの設定を行います。
	「I」と入力すると、プロンプトが「Enter Virtual IP address >」に変わりますので、仮想IPアドレスを入力してください。
T	認証タイプの設定を行います。
	「T」と入力すると、プロンプトが「Select authentication type >」に変わりますので認証しない場合は「1」を、簡易パスワード認証の場合は「2」を、IP認証ヘッダの場合は「3」を入力してください。簡易認証パスワードでは「2」を入力後、プロンプトが「Enter Simple text password >」に変わりますので、8文字以内で簡易パスワードを入力してください。
A	設定した内容を適用します。ここで適用しないと、設定した内容は有効になりません。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.4.b. VRRP設定情報参照(Show Detailed VRRP Entry Information Menu)

「VRRP Configuration Menu」の画面でコマンド「I」を選択すると図4-8-20のような「Show Detailed VRRP Entry Information Menu」の画面になります。この画面ではVRRPの設定情報を参照できます。

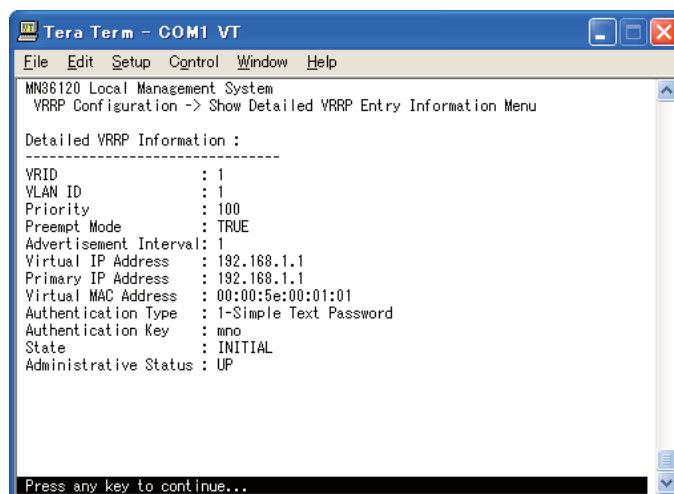


図4-8-20 VRRPの設定情報参照

画面の説明

VRID	VRIDを表示します。	
VLAN ID	VLAN IDを表示します。	
Priority	プライオリティを表示します。	
Preempt Mode	Preempt Modeを表示します。Preempt Modeが、有効の場合はTRUE、無効な場合はFALSEと表示されます。	
Advertisement Interval	拡張インターバルを表示します。デフォルトでは1に設定されています。	
Virtual IP Address	仮想IPアドレスを表示します。	
Primary IP address	実IPアドレスを表示します。	
Authentication Type	認証タイプを表示します	
	0-No Authentication	認証しません。
	1-Simple Text Password	簡易パスワードにて認証します。
	2-IP Authentication Header	IP認証ヘッダにて認証します。
Authentication Key	簡易パスワードの認証データ(キー)を表示します。	
Status	VRRPのステータスの表示をします。	
Administrative Status	管理ステータスの認証を表示します。	

4.8.5. DHCPリレー機能の設定(DHCP Relay)

「Routing Information Menu」から「D」を選択すると図4-8-21のような「DHCP Relay Configuration Menu」の画面になります。この画面ではDHCPリレーエージェント機能に関する設定を行います。

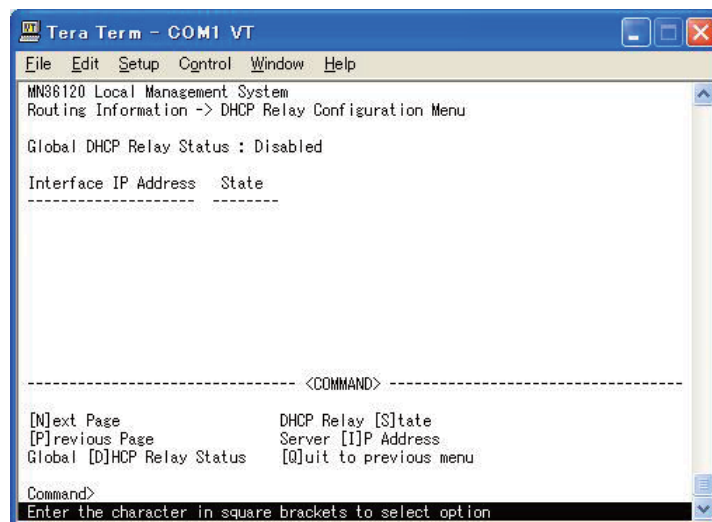


図4-8-21 DHCPリレー機能の設定

画面の説明

Global DHCP Relay Status:	DHCPリレー機能の状態を表します。	
	Enabled	DHCPリレー機能が有効の状態を表します。
	Disabled	DHCPリレー機能が無効の状態を表します。
Interface IP Address:	DHCPサーバとの中継を行なうインターフェースのIPアドレスを表します。	
State:	DHCPサーバとの中継を行なうインターフェースの状態を表します。	
	Enabled	DHCPサーバとの中継が有効の状態を表します。
	Disabled	DHCPサーバとの中継が無効の状態を表します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

D	DHCPリレーの状態を有効/無効にします。
	「D」を入力するとプロンプトが「Enable or disable DHCP relay status (E/D) >」に替わりますので、中継状態を有効にする場合は「E」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
S	DHCPサーバとの中継の設定を行います。
	「S」を入力するとプロンプトが「Enter interface IP address>」に替わりますので、DHCPサーバとの中継を行なうインターフェースのIPアドレスを入力してください。入力後、プロンプトが「Select DHCP relay state (B/U/D)>」と替わりますので、中継したパケットをブロードキャストで送信する場合は「B」を、指定したサーバへユニキャストで送信する場合は「U」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
I	DHCPサーバのIPアドレスを設定します。
	「I」を入力するとプロンプトが「Enter interface IP address>」に替わりますので、DHCPサーバとの中継を行なうインターフェースのIPアドレスを入力してください。入力後、DHCPサーバの設定メニューへ移動します。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.8.5.a. DHCPサーバの設定(DHCP Server IP Address Configuration Menu)

「DHCP Relay Configuration Menu」の画面でコマンド「I」を選択すると図4-8-22のような「DHCP Server IP Address Configuration Menu」の画面になります。この画面ではDHCPサーバの設定行ないます。

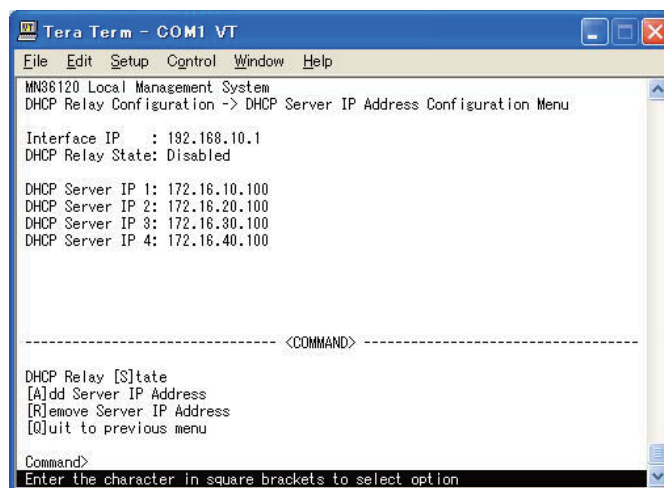


図4-8-22 DHCPサーバの設定

画面の説明

Interface IP	DHCPサーバとの中継を行なうインターフェースのIPアドレスを表示します。
DHCP Relay State	DHCPサーバとの中継の状態を表示します。
DHCP Server IP	DHCPサーバのIPアドレスを表示します。(最大4つまで設定可能)

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	DHCPサーバとの中継の設定を行います。 「S」を入力するとプロンプトが「Select DHCP relay state (B/U/D)」と替わりますので、中継したパケットをブロードキャストで送信する場合は「B」を、指定したサーバへユニキャストで送信する場合は「U」を、無効にする場合は「D」を入力してください。
A	DHCPサーバのIPアドレスを追加します。 「A」を入力するとプロンプトが「Enter DHCP server IP address」に替わりますので、追加を行なうDHCPサーバのIPアドレスを入力してください。
R	DHCPサーバのIPアドレスを削除します。 「R」を入力するとプロンプトが「Enter DHCP server IP address」に替わりますので、削除を行なうDHCPサーバのIPアドレスを入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.9. 統計情報の表示(Statistics)

「Main Menu」から「S」を選択すると図4-9-1のような「Statistics Menu」の画面になります。この画面ではスイッチの統計情報として、パケット数を監視することができ、これによってネットワークの状態を把握することができます。また、エラーパケットを監視することにより障害の切り分けの手助けになります。

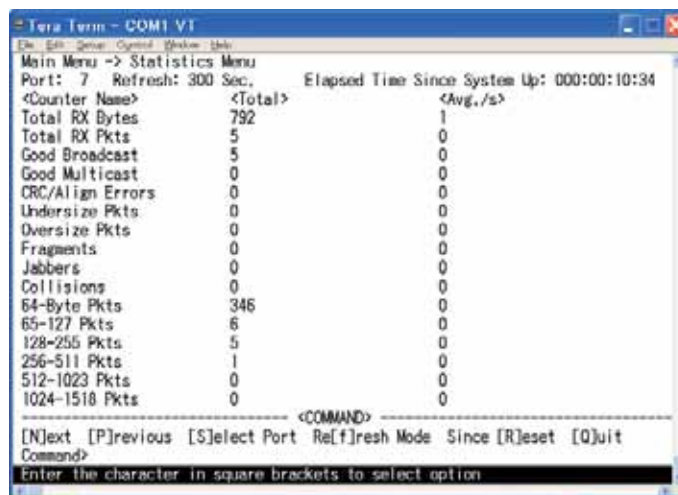


図4-9-1 統計情報の表示:起動後からの累積

画面の説明

Port	ポート番号を表します。
Refresh	再表示間隔を表します。
Elapsed Time Since System Up	現在のカウンタの値が累積されている時間を表示します。起動または再起動してからの時間を意味します。
Counter Name	各カウンタの名前を表示します。
Total	カウンタに累積された値を表示します。
Avg. /s	各値の一秒間の平均値を表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	値を表示するポートを切り替えます 「S」と入力するとプロンプトが「Select Port number>」と変わりますので表示したいポート番号を入力してください。
N	次のポートの値を表示します。 「N」と入力すると次のポートのカウンタを表示します。ポート12まで行くと次(ポート1)には移動しません。
P	前のポートの値を表示します。 「P」と入力すると前のポートのカウンタを表示します。ポート1では前のポートには戻れません。
r	カウンタの値をリセットしてからの値の表示に切り替えます。 「r」と入力すると、すぐにカウンタの値をresetしてからの値の表示に切り替わります。画面右上の時間表示が「Elapsed Time Since System Reset」に変わります
f	カウンタの更新モードを設定します。 「f」と入力すると、注釈行に「1 for start to refresh, 2 for set refresh rate」と表示されますので、更新を止めたい場合は「1」を入力すると、Refreshのパラメータが「STOP」を表示し、表示を更新しません。更新間隔を変更したい場合は「2」を入力すると「Input refresh time>」プロンプトが表示されますので、更新時間を入力してください。Refreshパラメータも連動して表示されます。
Q	上位のメニューに戻ります

またこの画面では本装置が起動または電源OFF、リセットによる再起動されてからの累積値（図4-9-1）とコマンドによりカウンタをクリアしてからの累積値（図4-9-2）の2種類を表示することができます。コマンドによりカウンタの値をクリアしても起動時からの累積値は保存されています。カウンタの値は約10秒で自動的に更新されます。

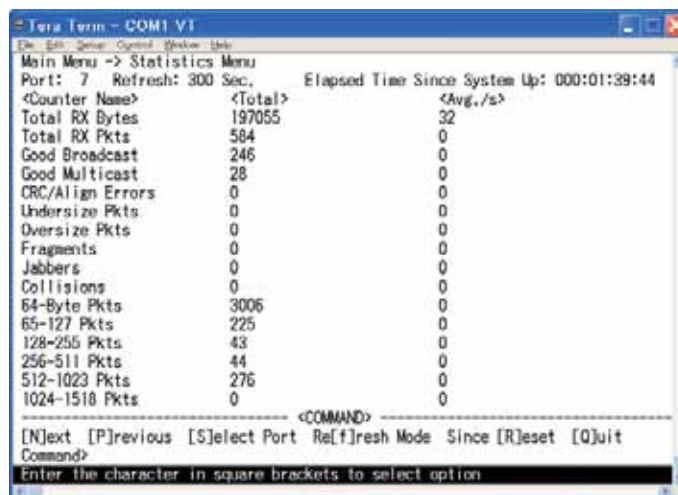


図4-9-2 カウンタクリアからの累積表示

画面の説明

Port	ポート番号を表します。
Refresh	再表示間隔を表します。
Elapsed Time Since Reset	カウンタをリセットしてからの時間を表します。
Counter Name	各カウンタの名前を表示します。
Total	カウンタに累積された値を表示します。
Avg. /s	各値の一秒間の平均値を表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	値を表示するポートを切り替えます 「S」と入力するとプロンプトが「Select Port number>」と変わりますので表示したいポート番号を入力してください。
N	次のポートの値を表示します。 「N」と入力すると次のポートのカウンタを表示します。ポート12まで行くと次(ポート1)には移動しません。
P	前のポートの値を表示します。 「P」と入力すると前のポートのカウンタを表示します。ポート1では前のポートには戻れません。
u	起動時からのカウンタ表示に切り替えます。 「u」と入力すると、瞬時にreset後のカウンタの表示から、システム起動時からのカウンタ表示に切り替わります。
r	カウンタの値をリセットしてからの値の表示に切り替えます。 「r」と入力すると、すぐにカウンタの値をresetし、全ての値を0にして再表示させます。
f	カウンタの更新モードを設定します。 「f」と入力すると、注釈行に「1 for start to refresh, 2 for set refresh rate」と表示されますので、更新を止めたい場合は「1」を入力すると、Refreshのパラメータが「STOP」を表示し、表示を更新しません。更新間隔を変更したい場合は「2」を入力すると「Input refresh time>」プロンプトが表示されますので、更新時間を入力してください。Refreshパラメータも連動して表示されます。
Q	上位のメニューに戻ります

カウンタの内容は下記のとおりです。

Total RX Bytes	受信した全てのパケットのバイト数を表示します。
Total RX Pkts	受信した全てのパケット数を表示します。
Good Broadcast	受信したブロードキャストパケット数を表示します。
Good Multicast	受信したマルチキャストパケット数を表示します。
CRC/Align Errors	エラーパケットで正常なパケット長(64~1518バイト)ではあるが、誤り検出符号(FCS)で誤りが発見されたパケット数を表示します。 そのうちパケットの長さが1バイトの整数倍のものはCRC(FCS)エラー、送でないものはアラインメントエラー。
Undersize Pkts	エラーパケットで、パケット長が64バイトより短い、その他には異常がないパケット数を表示します。
Oversize Pkts	エラーパケットで、パケット長が1518バイトより長い、その他には異常がないパケット数を表示します。
Fragments	エラーパケットでパケット長が64バイトより短く、かつCRCエラーまたはアラインメントエラーを起こしているパケット数を表示します。
Jabbers	エラーパケットでパケット長が1518バイトより長く、かつCRCエラーまたはアラインメントエラーを起こしているパケット数を表示します。
Collisions	パケットの衝突の発生した回数を表示します。
64-Byte Pkts	パケット長が64バイトのパケットの総数を表示します。
65-127 Pkts	パケット長が65~127バイトのパケットの総数を表示します。
128-255 Pkts	パケット長が128~255バイトのパケットの総数を表示します。
256-511 Pkts	パケット長が256~511バイトのパケットの総数を表示します。
512-1023 Pkts	パケット長が512~1023バイトのパケットの総数を表示します。
1024-1518 Pkts	パケット長が1024~1518バイトのパケットの総数を表示します。

ご注意: この画面は、工場出荷時には約10秒ごとに画面が更新されるため、コンソールおよびTelnetのタイムアウトが起きりません。

4.10. 付加機能の設定(Switch Tools Configuration)

「Main Menu」から「T」を選択すると図4-10-1のような「Switch Tools Configuration」の画面になります。この画面ではソフトウェアのアップグレード、設定の保存・読込、再起動、ログの参照等、スイッチの付加機能の利用とその際の設定を行うことができます。



図4-10-1 付加機能の設定

画面の説明

TFTP Software Upgrade	本装置のソフトウェアのアップグレードに関する設定、及び実行を行います。
Configuration File Upload/Download	本装置の設定情報の保存・読込に関する設定、及び実行を行います。
System Reboot	本装置の再起動に関する設定、及び実行を行います。
Ping Execution	本装置からのPINGの実行を行います。
System Log	本装置のシステムログの表示を行います。
Quit to previous menu	Switch Tools Configuration Menuを終了し、メインメニューに戻ります。

4.10.1. ソフトウェアのアップグレード(TFTP Software Upgrade)

「Switch Tools Configuration Menu」から「T」を選択すると図4-10-2のような「TFTP Software Upgrade」の画面になります。この画面ではソフトウェアのバージョンアップとその際の設定を行うことができます。

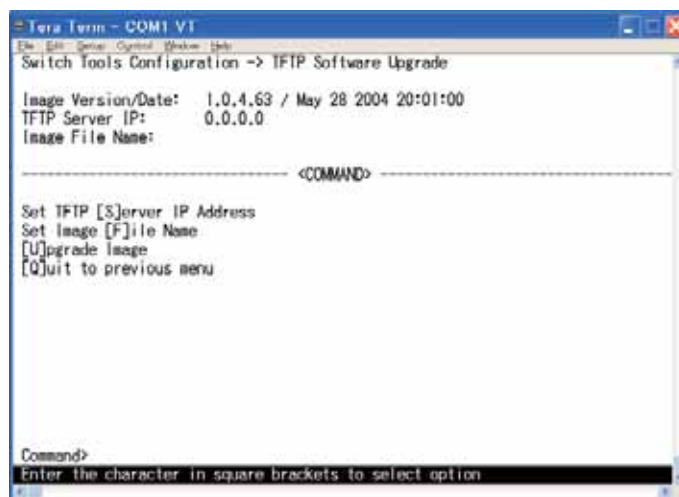


図4-10-2 ソフトウェアのアップグレード

画面の説明

Image Version/Date:	現在のソフトウェアのバージョンとソフトの作成された日付を表示します。
TFTP Server IP:	アップグレードするソフトウェアの置いてあるTFTPサーバのIPアドレスを表示します。
Image File name:	アップグレードするソフトウェアのファイル名を表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	アップグレードするソフトウェアの置いてあるTFTPサーバのIPアドレスを設定します。
	「S」と入力するとプロンプトが「Enter IP address of TFTP server>」と変わります。TFTPサーバのIPアドレスを入力してください。
F	アップグレードするソフトウェアのファイル名を設定します。
	「F」と入力するとプロンプトが「Enter file name>」と変わります。ダウンロードしたプログラムのファイル名を半角30文字以内で指定してください
U	アップグレードを開始します。
	「D」と入力するとプロンプトが「Download file(Y/N)>」と変わり、開始するかどうかの確認をします。設定が全て間違いないかどうか確認してください。「Y」と入力するとアップグレードを開始します。設定に誤りが合った場合は「N」と入力すると元の状態に戻ります。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.10.2. 設定情報の保存・読込(Configuration File Upload/Download)

「Switch Tools Configuration Menu」から「C」を選択すると図4-10-5のような「Configuration File Upload/Download Menu」の画面になります。この画面では本装置の設定情報をPCにファイルとしての保存・読込とその際の設定を行うことができます。



図4-10-5 設定情報の保存・読込

画面の説明

TFTP Server IP:	設定の保存・読込を行うTFTPサーバのIPアドレスを表示します。
Config File name:	設定情報のファイル名を表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

S	設定情報の保存、または読込を行うTFTPサーバのIPアドレスを設定します。 「S」と入力するとプロンプトが「Enter IP address of TFTP server>」と変わります。TFTPサーバのIPアドレスを入力してください。
F	保存、または読込を行う設定情報のファイル名を設定します。 「F」と入力するとプロンプトが「Enter file name>」と変わります。ダウンロードしたプログラムのファイル名を半角30文字以内で指定してください
U	設定情報の保存（アップロード）を開始します。 「U」と入力するとプロンプトが「Download file(Y/N)>」と変わり、開始するかどうかの確認をします。設定が全て間違いないかどうか確認してください。「Y」と入力するとアップグレードを開始します。設定に誤りが合った場合は「N」と入力すると元の状態に戻ります。
D	設定情報の読込（ダウンロード）を開始します。 「D」と入力するとプロンプトが「Download file(Y/N)>」と変わり、開始するかどうかの確認をします。設定が全て間違いないかどうか確認してください。「Y」と入力するとアップグレードを開始します。設定に誤りが合った場合は「N」と入力すると元の状態に戻ります。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.10.3. 再起動(System Reboot)

「Switch Tools Configuration Menu」から「R」を選択すると図4-10-6のような「System Reboot Menu」の画面になります。この画面では本装置の再起動を行うことができます。

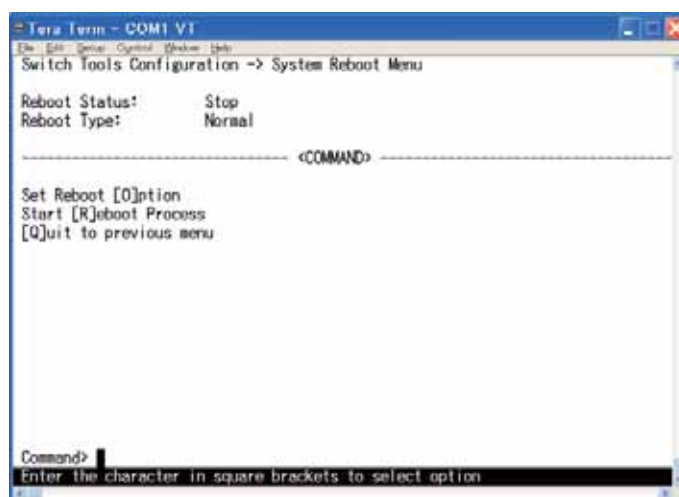


図4-10-6 再起動

画面の説明

Reboot Status	再起動のコマンドが実行されているかどうかを表示します。	
	Stop	再起動は行なわれていない状態を表します。
Reboot Type	再起動の方式を表示します。出荷時には「Normal」に設定されています。	
	Normal	通常の再起動をします。
	Factory Default	全ての設定が出荷時の状態に戻ります。
	Factory Default Except IP	IPアドレスの設定以外は出荷時の状態に戻ります。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

0	再起動の方式を単なる再起動か、出荷時に状態に戻すかに設定します。 「0」と入力するとプロンプトが「Select one option (N/F/I)>」と変わります。通常の再起動をする場合は「N」、全てを工場出荷時の設定状態に戻す場合は「F」、IPアドレスの設定だけを保存し、その他の設定を出荷時の状態に戻す場合は「I」と入力してください。
R	再起動を実行します。 「R」と入力するとプロンプトが「Are you sure to reboot the system (Y/N)」と変わり再度確認しますので、実行する場合は「Y」、中止する場合は「N」を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.10.4. 例外処理(Exception Handler)

「Switch Tools Configuration Menu」から「x」を選択すると図4-10-7のような「Exception Handler」の画面になります。この画面では例外処理の動作を選択することができます。

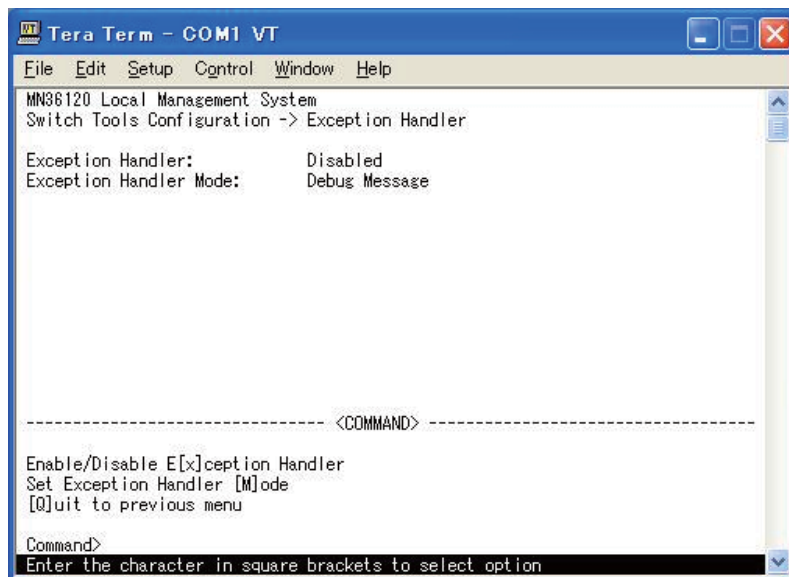


図4-10-7 例外処理の設定画面

画面の説明

Exception Handler	例外処理機能の状態を表示します。
Exception Handler Mode	例外処理の方法を表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

X	例外処理機能の有効/無効を切り替えます。 「X」と入力するとプロンプトが「Enable or Disable Exception Handler (E/D)>」と変わりますので、機能を有効にする場合は「E」を、使用しない場合は「D」を入力してください。
M	例外処理の方法を設定します。 「M」と入力するとプロンプトが「Select Exception Handler Mode (M/R/B)>」と変わりますので、デバッグメッセージを表示させる場合は「M」を、再起動させる場合は「R」を、両方を実施させる場合は「B」を入力してください。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.10.5. Pingの実行(Ping Execution)

「Switch Tools Configuration Menu」から「P」を選択すると図4-10-7のような「Ping Execution」の画面になります。この画面ではスイッチからPingコマンドを実行することにより、接続されている端末や他の機器への通信確認を行うことができます。

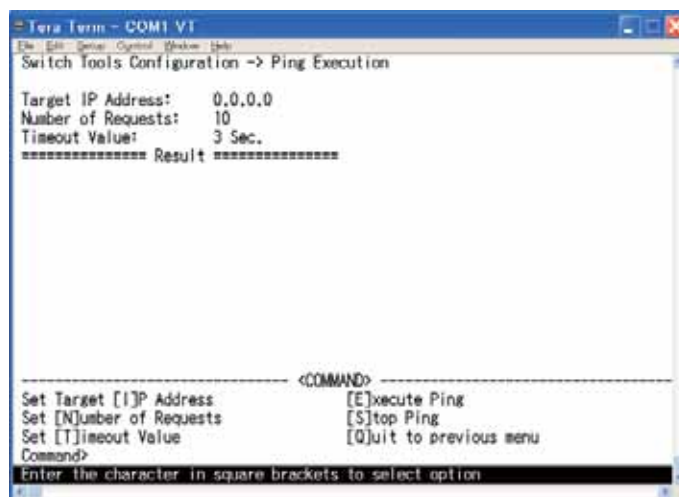


図4-10-7 Pingの実行

画面の説明

Target IP Address:	Pingを実行する相手先のIPアドレスを表示します。出荷時は0.0.0.0になっています。
Number of Request	Pingの回数を表示します。出荷時は10回になっています。
Timeout Value	タイムアウトになるまでの時間を表します。出荷時は3秒になっています。
Result	Pingの結果を表示します。

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

I	Pingを実行する相手先のIPアドレスを設定します。 「I」と入力するとプロンプトが「Enter new Target IP Address >」と変わりますのでIPアドレスを入力してください。
N	Pingの回数を設定します。 「N」と入力するとプロンプトが「Enter new Request Times >」と変わりますので回数を入力してください。最大10回まで可能ですので1~10の間の数字を入力してください。
T	タイムアウトになるまでの時間を設定します。 「T」と入力するとプロンプトが「Enter new Timeout Value >」と変わりますので時間を秒単位で入力してください。最大5秒ですので1~5秒の間で設定してください。
E	Pingコマンドを実行します。また表示をクリアすることができます。 「E」と入力するとプロンプトが「Execute Ping or Clean before Ping Data (E/C)>」と変わりますので、実行する場合は「E」、表示のクリアのみを行う場合は「C」を入力してください。
S	Pingコマンドを中止します。 Pingの実行中に「S」と入力するかまたは「Ctrl+C」入力すると中止します。
Q	上位のメニューに戻ります。

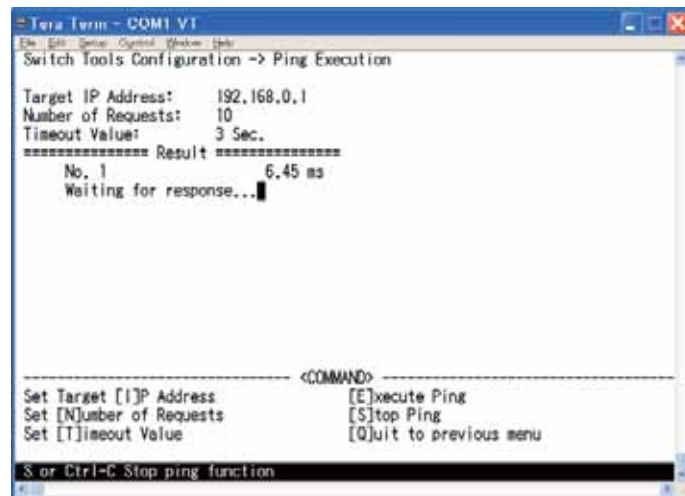
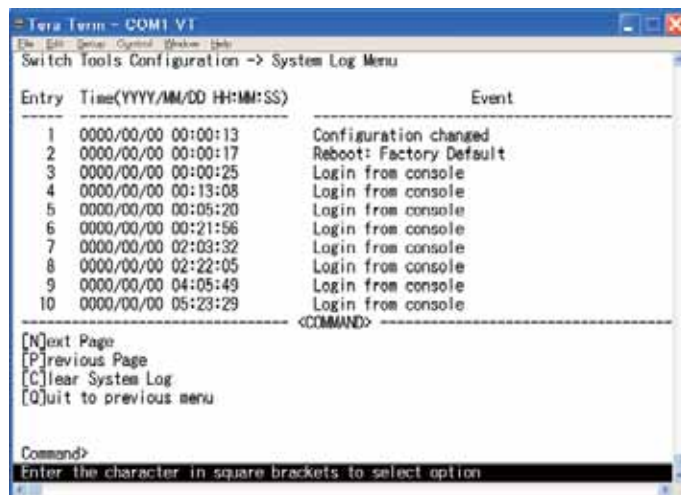


図4-10-8 Pingの実行中画面

4.10.6. システムログ(System Log)

「Switch Tools Configuration Menu」から「L」を選択すると図4-10-9のような「System Log Menu」の画面になります。この画面ではスイッチに発生した出来事（イベント）の履歴を表示します。イベントを見ることにより、-スイッチに起こった現象を把握でき、ネットワークの管理に役立ちます。



Entry	Time(YYYY/MM/DD HH:MM:SS)	Event
1	0000/00/00 00:00:13	Configuration changed
2	0000/00/00 00:00:17	Reboot: Factory Default
3	0000/00/00 00:00:25	Login from console
4	0000/00/00 00:13:08	Login from console
5	0000/00/00 00:05:20	Login from console
6	0000/00/00 00:21:56	Login from console
7	0000/00/00 02:03:32	Login from console
8	0000/00/00 02:22:05	Login from console
9	0000/00/00 04:05:49	Login from console
10	0000/00/00 05:23:29	Login from console

[N]ext Page
[P]revious Page
[C]lear System Log
[Q]uit to previous menu

Command>
Enter the character in square brackets to select option

図4-10-9 システムログ

この画面で表示される各イベントは、SNMPのトラップと連動しています。トラップを発生させるよう設定してある場合はイベントとして表示されます。トラップとの関係は下記をご参照ください。

画面の説明

Entry	イベントの番号を表します。	
Time	イベントの発生した時刻を表示します。時刻設定がされていない場合は起動からの通算時間が表示されます。	
Event	スイッチに発生したイベントの内容を表示します。	
	Login from console	コンソールポートからのログインがあったことを表します。
	Login from telnet, xxx. xxx. xxx. xxx	Telnetでのログインがあったことを表します。
	Configuration changed	設定が変更されたことを表します。
	(TRAP)Port-# Link-up	ポートのリンクがアップしたことを表します。このイベントは Individual Trapが有効で、対応するポートが設定されているときに発生します
	(TRAP)Port-# Link-down	ポートのリンクがダウンしたことを表します。このイベントは Individual Trapが有効で、対応するポートが設定されているときに発生します
	(TRAP)System Cold Start.	本装置が再起動を行ったことを表します。
	Not authorized! (IP: xxx. xxx. xxx. xxx)	SNMPによって未登録のマネージャからアクセスがあったことを表します。
SNTP first up date to yyyy/mm/dd hh:mm:ss	SNTPサーバにアクセスし、時間情報の取得を行ったことを表します。	

ここで使用できるコマンドは下記のとおりです

N	次のページを表示します。
	「N」と入力すると次のページを表示します。
P	前のページを表示します。
	「P」と入力すると前のページを表示します。
C	ログの内容を全て削除します。
	「C」と入力するとログが全て削除されます。
Q	上位のメニューに戻ります。

4.11. 設定情報の保存(Save Configuration to Flash)

「Main Menu」から「F」を選択すると図4-11-1のような「Save Configuration to Flash」の画面になります。このコマンドを選択することにより、本装置に設定した内容を内蔵のメモリへの保存を行います。この画面でプロンプトが「Save current configuration?(Y/N)」に替わりますので保存を行う場合は「Y」、行わない場合は「N」を選択してください。この保存を行わない場合、それまでに設定した内容は再起動時に消去されます。

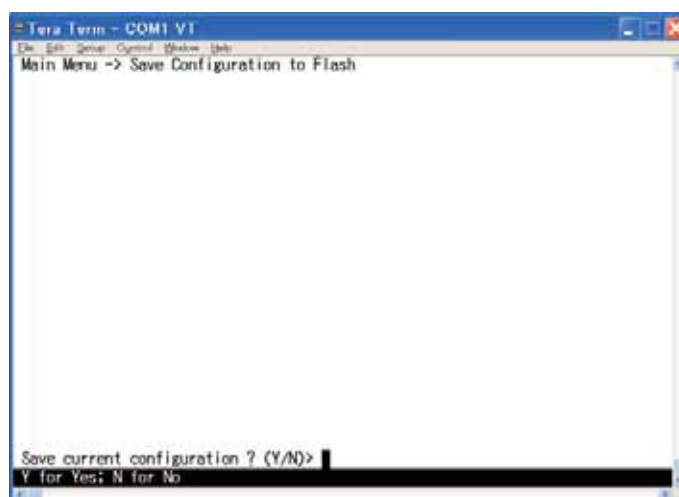


図4-11-1 設定情報の保存:保存確認

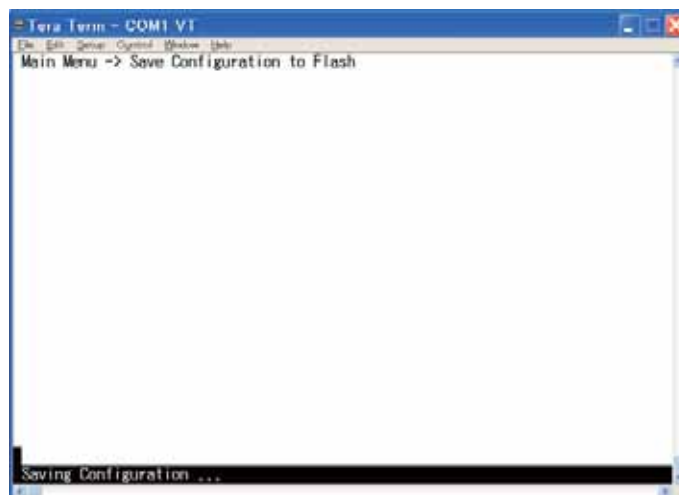


図4-11-2 設定情報の保存 : 保存終了

4.12. ログアウト

メインメニューで、「Q」を選択すると、コンソールからアクセスしている場合は図4-4-1のようなログイン画面に戻り、またTelnetでアクセスしている場合は接続が切断されます。再度、操作を行うには再び4.2章のログインの手順を行なってください。

また、4.6.5章のアクセス条件で設定されたタイムアウトの時間を過ぎると自動的にログアウトします。

付録A. 仕様

○インタフェース

- IEEE802.3 10BASE-T/100BASE-TX/1000BASE-T 準拠ポート×12 (RJ45コネクタ)
- GBIC拡張モジュールポート × 12 (1000BASE-SX/1000BASE-LX対応)
- RS-232C準拠コンソールポート×1 (9ピンD-subコネクタ)
- 二重化電源用接続コネクタ × 1

○レイヤー3スイッチ機能

- IPフォワーディング 最大8.9Mpps
- ルーティングプロトコル RIPV1/V2/OSPF
- ルーティングテーブル 1K

○レイヤー2スイッチ方式

- ストア・アンド・フォワード方式
- スイッチング容量 16.3Gbps
- フォワーディング・レート

10BASE-T	14,880pps
100BASE-TX	148,800pps
1000BASE-T	1,488,000pps
GBIC使用時	1,488,000pps
- MACアドレステーブル 8Kエントリ/ユニット
- バッファメモリ 1Mバイト
- フロー制御 バックプレッシャー (半二重時)
IEEE802.3x(全二重時)

○ その他

- IEEE802.1D スパニングツリープロトコル
- IEEE802.1w ラピッドスパニングツリープロトコル
- IEEE802.1Q タギングVLAN
ポートベースVLAN (最大256VLANまで可能)
- IEEE802.1ad トランキング機能 (最大8ポートのグループ構成可能)
- IEEE802.1p QoS機能
- IEEE802.1x ポートベース認証機能
(EAP-MD5/TLS/PEAP認証方式をサポート)

- エージェント仕様
 - SNMP (RFC1157)
 - MIB II (RFC1213)
 - Bridge-MIB (RFC1493)
 - RMON (RFC1757) グループ1, 2, 3, 9
 - TELNET (RFC854)
 - TFTP (RFC783)
 - BOOTP (RFC951)
 - SNTP (RFC2030)

- 電源仕様
 - 電源 AC100V 50/60Hz 2.0A
 - 消費電力 最大60W

- 環境仕様
 - 動作環境温度 0～40 °C
 - 動作環境湿度 20～80%RH (結露なきこと)
 - 保管環境温度 -20～70°C
 - 保管環境湿度 10～90%RH (結露なきこと)

- 外形仕様
 - 寸法 440mm(W)×256mm(D)×44mm(H) (突起部は除く)
 - 質量 {重量} 4,300g

- 適合規格
 - 電波放射 情報処理装置等電波障害自主規制協議会 (VCCI)
クラスA

付録B. Windowsハイパーターミナルによる コンソールポート設定手順

WindowsがインストールされたPCと本装置をコンソールケーブルで接続し、以下の手順でハイパーターミナルを起動します。

(Windows Vistaでは別途仮想端末ソフトウェアのインストールが必要です。)

- ① Windowsのタスクバーの[スタート]ボタンをクリックし、[プログラム(P)]→[アクセサリ]→[通信]→[ハイパーターミナル]を選択します。
- ② 「接続の設定」ウィンドウが現われますので、任意の名前（例えば Switch）を入力、アイコンを選択し、[OK]ボタンをクリックします。
- ③ 「電話番号」ウィンドウが現われますので、「接続方法」の欄のプルダウンメニューをクリックし、“Com1” を選択後[OK]ボタンをクリックします。
ただし、ここではコンソールケーブルが Com1 に接続されているものとします。
- ④ 「COM1 のプロパティ」というウィンドウ内の「ビット/秒(B)」の欄でプルダウンメニューをクリックし、“9600” を選択します。
- ⑤ 「フロー制御(F)」の欄のプルダウンメニューをクリックし、“なし” を選択後[OK]ボタンをクリックします。
- ⑥ ハイパーターミナルのメインメニューの[ファイル(F)]をクリックし、[プロパティ(R)]を選択します。
- ⑦ 「<name>のプロパティ」(<name>は②で入力した名前)というウィンドウが現われます。そこで、ウィンドウ内上部にある“設定”をクリックして画面を切り替え、“エミュレーション(E)”の欄でプルダウンメニューをクリックするとリストが表示されますので、“VT100”を選択し、[OK]ボタンをクリックします。
- ⑧ 取扱説明書の4章に従って本装置の設定を行います。
- ⑨ 設定が終了したらハイパーターミナルのメインメニューの[ファイル(F)]をクリックし、[ハイパーターミナルの終了(X)]をクリックします。ターミナルを切断してもいいかどうかを聞いてきますので、[はい(Y)]ボタンをクリックします。そして、ハイパーターミナルの設定を保存するかどうかを聞いてきますので、[はい(Y)]ボタンをクリックします。
- ⑩ ハイパーターミナルのウィンドウに“<name>.ht” (<name>は②で入力した名前)というファイルが作成されます。

次回からは“<name>.ht”をダブルクリックしてハイパーターミナルを起動し、⑧の操作を行えば本装置の設定が可能となります。

故障かな？と思われたら

故障かと思われた場合は、まず下記の項目に従って確認を行ってください。

◆LED表示関連

■電源LED(POWER)が点灯しない場合

●電源コードが外れていませんか？

→ 電源コードが電源ポートにゆるみ等がないよう、確実に接続されているかを
確認してください。

■リンク/送受信LED(LINK/ACT.)が点灯しない場合

●ケーブルを該当するポートに正しく接続していますか？

●該当するポートに接続している機器はそれぞれの規格に準拠していますか？

●オートネゴシエーションで失敗している場合があります。

→ 本装置のポート設定もしくは端末の設定を半二重に設定してみてください。

◆通信ができない場合

■全てのポートが通信できない、または通信が遅い場合

●機器の通信速度、通信モードが正しく設定されていますか？

→ 通信モードを示す信号が適切に得られない場合は、半二重モードで動作します。
接続相手を半二重モードに切り替えてください。
接続対向機器を強制全二重に設定しないでください。

●本装置を接続しているバックボーンネットワークの帯域使用率が高すぎませんか？

→ バックボーンネットワークから本装置を分離してみてください。

アフターサービスについて

1. 保証書について

保証書は本装置に付属の取扱説明書（紙面）についています。必ず保証書の『お買い上げ日、販売店（会社名）』などの記入をお確かめの上、販売店から受け取っていただき、内容を良くお読みの後大切に保管してください。保証期間はお買い上げの日より1年間です。

2. 修理を依頼される時

『故障かな？と思われたら』に従って確認をしていただき、異常がある場合はお買い上げの販売店へご依頼ください。

●保証期間中は

お買い上げの販売店まで保証書を添えて商品をご持参ください。

保証書の記載内容により修理をさせていただきます。

●保証期間が過ぎているときは

お買い上げの販売店にご相談ください。

修理により使用できる場合は、ご希望により有料で修理をさせていただきます。

3. アフターサービス・商品に関するお問い合わせ

お買い上げの販売店、または下記の連絡先にお問い合わせください。

パナソニック電工ネットワークス株式会社

TEL 03-6402-5301 / FAX 03-6402-5304

便利メモ（おぼえのため、記入されると便利です）

お買い上げ日	年 月 日	品番	MN
お買い上げ先	電話（ ） —		
お客様 ご相談窓口	電話（ ） —		

© Panasonic Electric Works Networks Co., Ltd. 2004-2009

パナソニック電工ネットワークス株式会社

〒105-0021 東京都港区東新橋2丁目12番7号 住友東新橋ビル2号館4階

TEL 03-6402-5301 / FAX 03-6402-5304

URL <http://group.panasonic-denko.co.jp/pewjnw/>

0407-25029